

堂地遺跡 中道遺跡

発掘調査報告書

1989年

長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会

堂地遺跡

1989年

**長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会**

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

深沢川右岸の扇央部に位置する當地遺跡は、昭和48年度における中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査によって、一躍世に知られた遺跡である。

今回、沢尻-箕輪線の道路建設に伴い、この地籍に2回目の緊急発掘調査が実施される運びとなりました。遺跡内容等については、前回の調査によりある程度までの推定をすることができます。

箕輪町教育委員会では、伊那建設事務所からの発掘調査依頼を受け、開発予定地内における調査を行ったものです。その結果、奈良時代後半から、平安時代にかけての集落の跡が出土し当時の生活状況を知る上で貴重な発見となりました。

開発事業によって発掘調査が実施されることとは、遺跡の破壊ということになるわけですが、調査結果の記録が残り、いわゆる記録保存ということになります。本書を残し、遺跡は消えてしまうことになりました。本書に残された調査の内容が、今後活用され、郷土の歴史を研究する資料となれば幸いに思います。

終りに本調査実施にあたり、深いご理解をいただきました方々、また発掘に参加ご協力を下さった調査団の皆様に、心からなる御礼を申し上げます。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11151-1番地に所在する堂地遺跡の報告書である。
2. 本調査は長野県伊那建設事務所の委託を受けた箕輪町教育委員会が実施した。

発掘調査は昭和62年8月19日～9月13日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。作業分担は次の通りである。

土器の復元－福沢幸一、竹入洋子　遺構実測図の整理－竹入洋子、根橋とし子

土器・鉄器実測・トレース－竹入洋子、根橋とし子　土器拓影－山内志賀子

挿図作成－竹入洋子、根橋とし子　写真図版作成－柴登巳夫

3. 土器実測図のスクリーントーンは、次のものを表す。

土器内面－内面黒色処理。断面－須恵器。

4. 本書に掲載した遺構、遺物の写真は柴登巳夫、赤松茂が撮影したものを使用した。

5. 土器・陶器類については小平和夫氏にご教示いただいた。

6. 本書の執筆は柴登巳夫・赤松茂が行った。

7. 本書の編集は発掘調査団が行った。

8. 本資の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

目 次

題 字 団 長 橋 口 彦 雄

序 教育長 堀 口 泉

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の立地	1
第1節 位置	1
第2節 自然環境	2
第3節 歴史的環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 調査の契機	5
第2節 調査の概要	5
調査団	5
発掘調査団員	6
調査に関する事務局の構成組織	6
第3節 発掘調査日誌	7
第Ⅲ章 発掘調査の結果	11
第1節 調査結果の概要	11
第2節 遺構	12
1. 遺跡周囲の状況	12
2. 住居址	15
1) 第1号住居址	15
2) 第2号住居址	16
3) 第3号住居址	16
4) 第4号住居址	17
5) 第5号住居址	18
3. 据立建造物址	19
4. 土 坡	21
第3節 遺 物	23

1. 縄文時代.....	23
2. 奈良・平安時代.....	24
第IV章　まとめ.....	27

挿図目次

第1図 位置図.....	1
第2図 遺跡周辺の地形.....	2
第3図 周辺遺跡分布図.....	4
第4図 調査区全測図.....	13
第5図 第1号住居址実測図.....	15
第6図 第2号住居址実測図.....	16
第7図 第3号住居址実測図.....	17
第8図 第4号住居址実測図.....	18
第9図 第5号住居址実測図.....	19
第10図 挖立建造物址実測図.....	20
第11図 土坑実測図.....	21
第12図 D-1区、F-4グリッド地層断面図（西面）.....	22
第13図 D-1区、F-4グリッド地層断面図（南面）.....	22
第14図 D-5区、第10グリッド地層断面図.....	22
第15図 出土縄文土器拓影図.....	23
第16図 出土土器実測図1.....	24
第17図 出土土器実測図2.....	26
第18図 出土鉄器実測図.....	26

図版目次

- 図版1 調査地近影
- 図版2 確認調査状況
- 図版3 第1、2号住居址
- 図版4 第3、4号住居址
- 図版5 第5号住居址、掘立建造物址
- 図版6 土塁、第1号住居址カマド状況
- 図版7 第3号・第5号住居址カマド状況
- 図版8 調査状況スナップ
- 図版9 遺物出土状況
- 図版10 調査風景
- 図版11 住居址出土土器
- 図版12 出土縄文土器、出土鉄器、墨書き土器「文」の文字
- 図版13 調査参加者

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位置（第1図）

堂地遺跡は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11151-1番地に位置する。天竜川に流れ込む深沢川と帶無川によって開析された扇状地は、約4kmを計り、東への緩傾斜面を呈している。堂地遺跡はこの傾斜面の中央やや下に位置し、沢尻-箕輪線（通称春日街道）が横切っている。遺跡地の奥、西側には西天竜水路があり、一帯は水田地帯である。遺跡地の北には深沢川が流れ、段丘崖下との比高約30mを計る。遺跡地の標高は735m前後である。



第1図 位置図

第2節 自然環境（第2図）

箕輪町は、上伊那の北部に位置し、中央を流れる天竜川によって、竜西・竜東の二地区に分けて呼ばれている。右岸の竜西地区は、木曽山系の山々から流れ出る中小河川によって形成された扇状地である。東流する河川は北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続いている。北ほど流路が短く、南ほど長い。これは、西側山地が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路の長さに比例して、山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。この中においては大泉川が最も大きい。従って箕輪町地籍は大泉扇状地の一部と帶無川・深沢川等によって形成されている。この広い扇状地は元来灌漑用水に恵まれず、山林・原野が多く、耕地も川沿いの一部を除いては畠地が大部分であった。しかし大正から昭和にかけて、西天竜幹線水路が完成した後は上伊那地区を代表する水田地帯となっている。また、中央自動車道は、南側の南箕輪村から西天竜水路の上方沿いを平行して通過し、深沢川右側の堂地遺跡で水路と交差し、その下方に位置する段丘崖端を経て辰野町に通じている。遺跡地は中央自動車道道及び西天竜水路の下方深沢川右岸に位置しており、東に面する緩やかな傾斜面、扇尖部なのである。



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

箕輪町は、天竜川をはさんで典型的は河岸段丘が形成され、竜東地区には、恵まれた扇状地や段丘面が形成されている為、遺跡分布の濃厚なところとして知られている。特に、上伊那郡唯一の前方後円墳の「王墓」と天竜川を隔てて対立する長岡古墳群との関係、昭和27年からの土地改良工事によって発見された「箕輪遺跡」、また、昭和47年の「北城遺跡」緊急発掘調査の結果、弥生後期の大集落の一画と、中世火葬墓群の発見など見られ、この地域の特色の一端を物語っている。

町内の遺跡のうち竜西地区とその立地する状況において分類すると、次の4つに分けて考えることができる。

1) 経ヶ岳山塊、山麓の遺跡

山麓に並ぶ小扇状地はそれぞれ独立した遺跡になっている。南から富田・一の宮・上古田・下古田・長田の集落の周辺にはそれぞれ遺跡が分布している。

2) 扇状地川沿いの遺跡

帯無川・深沢川・桑沢川と東流する川の両側に列状に並ぶものである。堂地遺跡も深沢川右岸に位置しており、この範に入るものである。

3) 段丘先端部に並ぶ遺跡

竜西には非常に顕著な河岸段丘が発達している。この段丘上の先端部を見ると、南北に列状に並ぶ遺跡群がみられる。绳文時代から弥生・古墳時代以後にかけての複合遺跡地帯と考えられる。「松島王墓古墳」もこの段丘上に位置している。

4) 低位段丘（沖積面）の遺跡

天竜川の氾濫に接する最低位段丘に当たり、分布する遺跡数は少なくないが、面積100ヘクタール余と推定される「箕輪遺跡」に代表される。古代水田址の存在を証拠づける遺跡であり、段丘上に立地する古墳群との関連深い重要な遺跡地帯である。



- 堂地 ②中道 ③五輪 ④丸山 ⑤熊野上 ⑥王墓古墳 ⑦大出 ⑧本城 ⑨中山
- ⑩藤山 ⑪上の林 ⑫北城 ⑬南城 ⑭猿森 ⑮箕輪

第3図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 調査の契機

本地区は、天竜川右岸扇央部で深沢川右岸にかかる広い水田地帯である。昭和初期に実施された土地改良事業により、水田は区画が整然としている。この地帯を南北に一般県道「沢尻一箕輪線」、通称春日街道と呼ばれる道路が走っている。しかしこの道は、松島堂地地籍の変電所上で行き止まりになっており、交通不能区間となっている。これを解消するため、車道幅員6m、全幅員10mの道路を通過することが計画、実施された。本地区は、昭和48年当時に中央自動車道開通に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施された同一地籍に位置するため、道路工事範囲内において埋蔵文化財発掘調査を実施するはこびとなつたのである。

第2節 調査の概要

- 遺跡名 堂地遺跡
- 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪11151-1番地ほか
- 発掘期間 昭和62年8月19日～9月13日
- 調査委託者 伊那建設事務所長 伊沢 修
- 調査受託者 箕輪町教育委員会
- 調査団の構成は下記の通りである。

調査団

- | | | |
|-----|-------|---------------|
| 団長 | 樋口彦雄 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| 担当者 | 柴 登巳夫 | 箕輪町郷土博物館主任学芸員 |
| 調査員 | 石川 寛 | 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| 調査員 | 竹入洋子 | |

発掘調査団員

荒川織光、石川 進、井上武雄、浦野 弘、岡 正、金子 范、唐沢正十、唐沢光国、
小池久人、小島久雄、小平和子、後藤又市、小林信義、小林光治、小松敬一郎、小松かほる、
白鳥博臣、夏目元江、根橋とし子、野村金吉、藤森秀男、松田幸雄、山内志賀子、山岸 工

調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口彦雄 箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課長
太田文陳 箕輪町教育委員会社会教育係長
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
赤沼悦子 箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 発掘調査日誌

8月19日（水） 晴時々曇

午後、テント設置予定地の草刈りを数人でする。

8月20日（木） 晴

テント、発掘用具、その他の資材を現地に運ぶ。

午前中にテント4張りを組立てる。身の丈以上に延びた雑草をナタ鎌を振って草刈りをする。ショ

ベルカーが正午到着。ブルドーザー3時に到着。

直ちに発掘地の表土を押し出す作業をする。

8月21日（金） 曇り

前日に引き続き、午前中草刈り。ブルドーザーで発掘予定地の排土作業を行う。1～3班まで1区のグリッド掘りを行なう。各グリッドより僅かながら縄文土器片、須恵器片が出土する。午後3区の表土を西側のみ押してみる。30cmの耕土の下はローム層で、おそらく畑地又は原野から西天竜耕地組合が開田する際に、遺構があると予想される地層は破壊されたと思われる。

8月24日（月） 曇り

午前10時、伊那建設事務所課長以下4名参列し樋口教育長の神事で調査の成功と工事の安全を祈願し式を終る。グリッド掘り作業をする。1区、2区共に住居址は発見できない。グリッドの各所より散発的に土師器、須恵器等の土器片を確認する。

8月25日（火） 曇り

1区、2区の整地作業をする。3区、4区のグリッド設定をする。試掘で縄文土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片が多数出土する。

8月26日（水） 曇り

2区を4ヶ所試掘したが、耕土を除くとすぐローム層に当たる。西天竜の開田工事の際、住居址を



包含した土を排除してしまったためと思われる。全員で4区に入りグリッド掘りをする。3区からH住居址が現われ、南側より土師器の深壺の1個体に近いものが出土する。明日は3区の表土を全面ブルドーザーで除き、グリッドを設定して基本発掘する予定。3区からは遺構と思われるものが出てきたので、明日はさらに先の5区を草刈りして試掘を行い、住居址の南限を見きわめる予定。



8月27日（木）快晴

午前中2区を発掘調査するも、客土が多く、さらにブルドーザーで排土して明日改めて発掘することに決める。午後より3班が5区へ入って発掘調査を、それ以外の全員が3区に入り、新たにグリッド設定したところを発掘調査する。5区は耕土を取り除くとすぐにローム層になっているので、遺構は存在しないと判断して調査を終了とする。

8月28日（金）曇り

4区10グリッドの地層断面測量をする。全員3区に入り発掘をする。B-16、D-16グリッド住居址確認（第1住居址）。B-14～16グリッド住居址確認（第2住居址）。D-14、西側に土塙と思われる落ち込み確認。C-15～17間、B、C、D間にベルト設定。土師器、須恵器等出土。

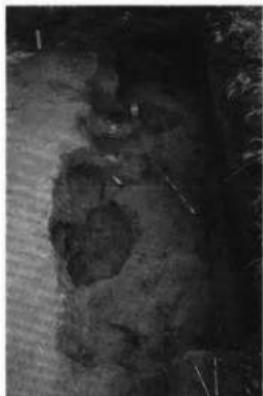


8月31日（月）曇り後雨

3区を発掘し始めるが、台風12号の日本海北上による影響を受けて、南から強風が吹きつけるので、基地のテントを補強する作業をし、午前にて本日の作業は中止する。

9月1日（火）快晴

3区に全員が入って発掘調査に入る。1号住居址は36cm掘り、床面が表われる。実に堅く、典型的な床面である。西側の角にカマド跡あり。焼土も出ている。2号住居址は東側に水田があるので



完掘は不可能である。床面はまだ出てこない。カマド跡あり。3号住居址は床面もカマド跡も今のところ出てこない。土器片25個出土する。

9月2日（水）晴

1号住居址を床面まで掘り下げて調査するも出土品ほとんどなし。ベルトの地層断面測量をする。2号住居址の東側地層断面測量をする。3号住居址の東側を40cm程グリッド線を外へ追込み、住居内を全体に10cm程掘下げて範囲を広げて調査する。2号住居址カマドの東側床面より土師器の長胴甕と須恵器の蓋及び破片2個出土。



9月3日（木）曇り

3区の発掘作業を行なう。住居址と思われる落ち込みを確認する。須恵器片、土師器片98個出土する。3区3号住居址北西寄りにカマド跡が確認される。また碗と思われるものが2個出土する。土塙No.1から刀子1本出土（墓らしい）。美輪中学校郷土クラブが見学に来る。



9月4日（金）曇り

1号住居址ベルトに額を出していた長頸壺を写真撮影し取り上げる。上部の欠損を除いて無傷に近い状態である。土塙No.1を平面測量及び写真撮影する。4号住居址は火災にあったのか、家屋全体に焼土が広がっている。カマドは西壁のほぼ中央にある。



9月5日（土）晴

3・4号住居址地層断面測量。1～3号住居址の精査、カマド発掘。カマドは石と粘土の中に土器の壊れた物を練り込んでしっかり造ってある。1号住居址の平面測量をする。午後3区西側を発掘調査する。現在のところでは住居址は発見されていない。



9月8日（火）晴

1号住居址の平面及び断面測量をする。カマド内の土師器片を取り上げる。3区西側グリッドの写真撮影のあと、全面発掘に入る。落ち込み、柱穴らしきものが出る。4区の5号住居址は床面が明瞭に出る。土器片が数個出る。



9月9日（水）曇時々晴

4区グリッド掘作業実施。遺物はほとんど出土しない。落ち込み数ヶ所あり。2号住居址のカマドの平面測量をする。1号住居址カマドを半カットする。5号住居址ベルトの地層断面測量をする。床面よりの遺物は内黒环、平皿、土師器の小壺など。



9月10日（木）曇り時々晴

2号住居址の断面、平面測量。3号住居址内の柱穴および土竈等の半カット作業と断面測量、写真撮影。5号住居址には周溝ができた。



9月11日（金）曇り

2号住居址の写真撮影及び平面測量。3号住居址の写真撮影。住居内に須恵器、土師器等多数出土する。本日で一部測量を残して作業を終了する。作業は天候に恵まれ、降雨等による休みもなく順調に進められた。

9月13日（日）曇り

発掘作業はすべて終了した。4区全面平面測量をする。4号住居址の断面測量をする。16日より、耕土した土を埋め戻す作業に入る予定。

第III章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

本遺跡は、沢尻一箕輪線の道路新設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査である。この地籍は昭和48年度に、中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査が実施されたすぐ東側に位置している。そのため調査着手前から、遺跡内容のおおよその検討をつけていたが、内容的には、ほぼ予想通りのものであった。

遺跡調査は深沢川右岸の水田地帯であり、水田の造成時においてかなり地下遺構が破壊されていた。

調査はまず、遺跡の破壊状況及び、南側へどの範囲まで広がっているかの確認調査から実施した。深沢川から水田2枚分は、造成時においてほぼ破壊されており、一部を除いて確認調査のみで終了した。3枚目及び4枚目の水田には住居址が残り、遺構・遺物の検出ができた。5枚目までグリッドを掘り、範囲確認を実施したが、4枚目の水田のほぼ中間地点までは遺物の発見があったが、それ以南は、見られなかった。そのため、4枚目の水田中間地点までを遺跡範囲と決定し、全面発掘を実施した。その結果、住居址5棟、掘立建造物址1棟等の遺構が検出された。これらの住居址は奈良時代中ごろから平安時代中ごろと推定される。この事は前述した、中央自動車道における発掘調査で検出された住居址と同時代の物である。調査範囲は、東西幅約15mで南北に長い状況であるため、住居址が完掘されたものは2棟のみであり、他は調査区域外に出ており、全体を見ることが困難であった。

中央自動車道調査時における調査のまとめにおいても、遺跡が東側にも広がっているという推測をしているが、今回の調査においてそれが証明された形になった。そして、今回調査した位置より更に東側へ広がることは確実であり、深沢川右岸は、王墓古墳の位置する段丘面まで遺跡地帯であろうと思われる。

第2節 遺構

1. 遺跡周囲の状況

天竜川右岸は、西方山麓から流れる中小河川によって開析された扇状地であるが、本地区は、扇央部よりやや下段に近い平坦地に位置している。全体的には東への緩傾斜面にあり、北側は深沢川が流れ、川との比高30mの急な段丘崖となっている。

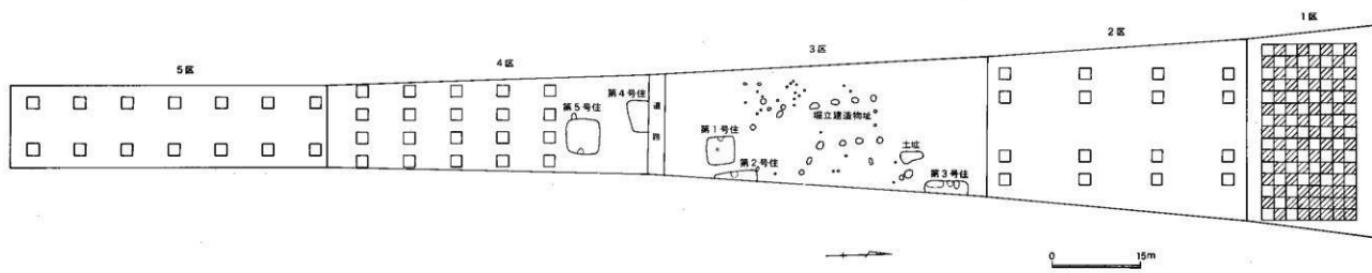
この地区一帯は黄金波打つ水田地帯で、開田工事が昭和初期に着手され、広大な水田開発が実施されている。

遺跡は深沢川右岸一帯に広く位置し、その存在は、故小池修兵氏の調査により以前から知られていたところであった。昭和48年中央自動車道の工事に伴い、大きな発掘調査が実施され、大集落の一部が明らかになっている。

本地籍はその調査地点のやや東に位置するが、同一地形の一帯であり、遺物も地表に出土しており、発掘調査実施のはこびとなったのであるが、周囲の状況から考え、深沢川の両岸に東西に長く、広い範囲に続くと考えられる。一帯は平地であるため、発掘調査を実施するには好都合であるが、昭和初期の開田工事により、地形が動いている状況である。



遺跡地遠望

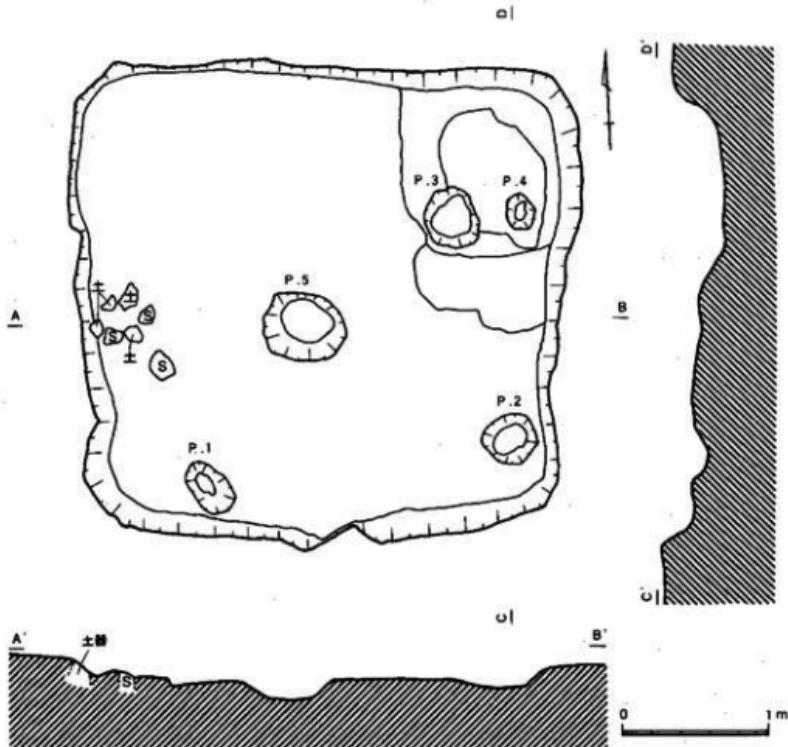


第4回 調査区全測図

2. 住居址

1) 第1号住居址（第5図）

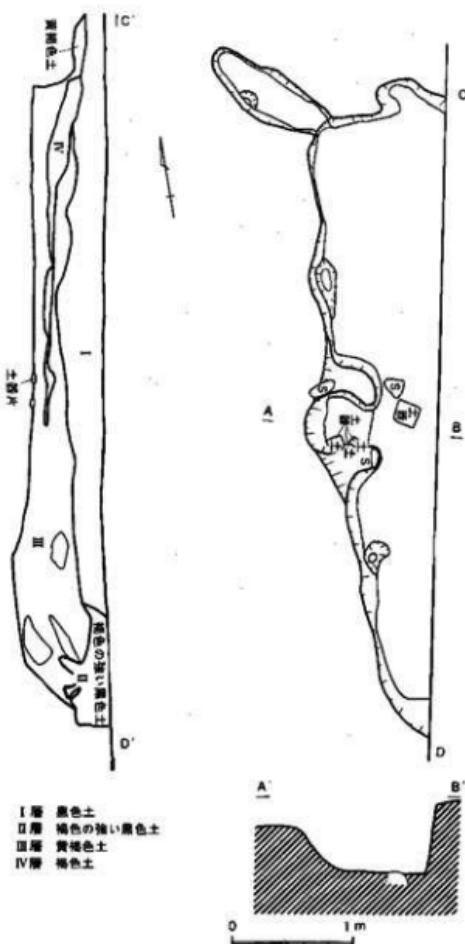
本住居址は、調査第3区の南端に近い位置から発見されたもので、完掘された。Ⅲ層かⅣ層に掘り込まれている。主軸はN-90°-Wを示しており、プランは東西3m40cm、南北3m30cmの正方形を呈している。ローム層中に掘り込まれている状況ではないため、プランの確認には非常に苦労し、部分的には不確実なところもある。壁はやや急な斜壁を示している。壁高は南側が20cm前後を計るが、他は5~10cmと少ない。床面は良好な敲きとはいせず、凸凹が多い。カマドは西壁ほぼ中央に位置しているが、カマドを構成する石組みなどはわずかであり、周辺には土師器の長胴甌の破片が検出されている。火床部も小さく、カマドの遺存状況は不良である。主柱穴と確認されるものはP.1~P.3であり、一ヶ所については不明である。検出された遺物を見ると、8世紀末から9世紀初めころの住居址である。



第5図 第1号住居址実測図

2) 第2号住居址（第6図）

本住居址は、第1号住居址の東側に位置している。図に示すごとく、検出された部分は全体の10パーセントにも満たない範囲であり。他は調査区域外に出ている状況である。プランは推定のほかはないが、幸いにもカマドが検出されたため、その周辺から若干の遺物を見ることができた。住居址は西壁にカマドを有する隅丸方形を呈するものと考えられ、南北の大きさは5m50cm前後と推定される。床面はほぼ平らな敷きになっており、小石を多く含んでいる。壁は急な斜壁で、落ち込み確認面より35cmを計る。西壁ほぼ中央に設定されているカマドは、西袖の中に芯になる平らな石を立て構築してあり、袖の中には土師器片も含まれている。カマドの遺存状況は良好の部類である。出土遺物はカマドの前面の床面に見られる。須恵器の环蓋、土師器の長胴甕などが確認され、これらの遺物から推定し、住居址の時期は8世紀後半と推定される。

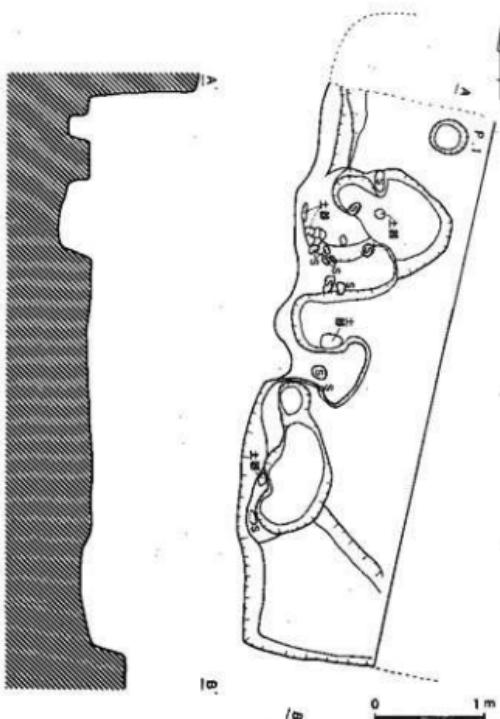


第6図 第2号住居址実測図

3) 第3号住居址（第7図）

第3調査区の東北隅に位置する本住居址も、第2号住居址とほぼ同様な検出状況を示している。住居址は水田面か25cmのところで落ち込みを確認し、床面まではさらに35cmほどの深さを示している。プランは推定しかできないが、一辺5m70cm前後の隅丸方形を呈するものと考え

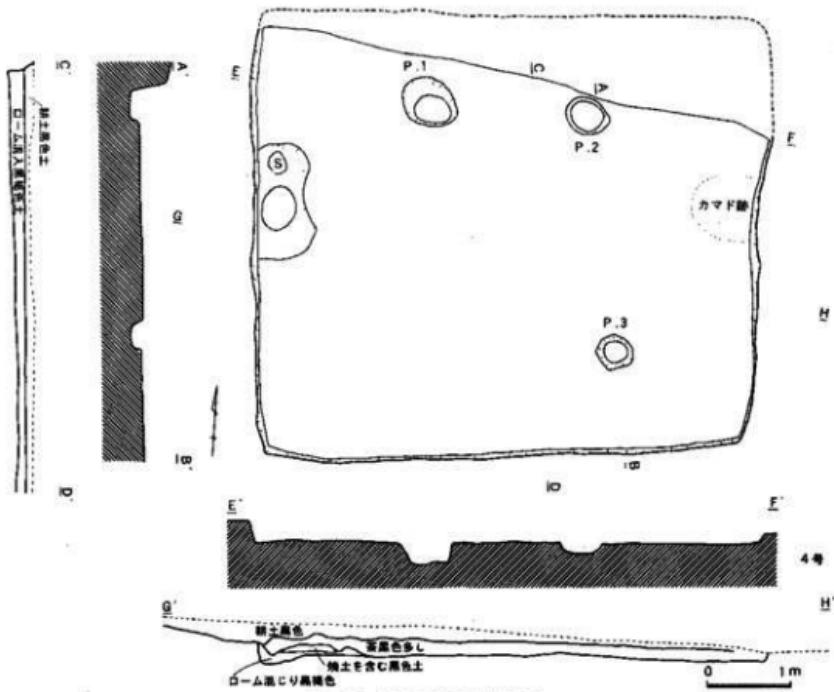
られる。カマドは西壁ほぼ中央に位置し、両袖の芯には長方形の平らな石を立てて使用している。片方の袖の中に3個の石を整然と並べしっかりと構築されている。カマドの両側には貯蔵穴に用いられたと思われるやや大きな穴が検出されている。これは、この時期の住居址にはよく見られる状況である。カマド右側のピットの中には、土師器の环や甕の破片が多数検出された。床面はカマド前面の部分がよく敲かれており、平らになっている。主柱穴と思われるものはP1のみであり、20cmの深さを示している。本住居址が完掘されたならば、かなり整然とした、良好な住居址が検出されたのではないと推測される。カマド周辺にみられる出土遺物から判断し、8世紀中頃の住居址であろうと考えられる。



第7図 第3号住居址実測図

4) 第4号住居址（第8図）

調査第4区の北端に検出されたのが、第4号住居址である。本住居址は第3調査区との境に位置する道路の下に入っている部分があり、完掘できなかった。プランは東西6m、南北推定5m40cmのほどの隅丸方形を呈している。床面は軟弱ではっきりせず、壁高も少ないところがあり、不確定である。主軸方向はN-90°-Wで、東西に長い住居址である。カマドの形状は全く見られないが、東壁ほぼ中央に位置していたと推定され、焼土が若干検出されている。主柱穴と思われるP1～P3の柱穴が発見されているがやや浅く、位置的にもややずれている。

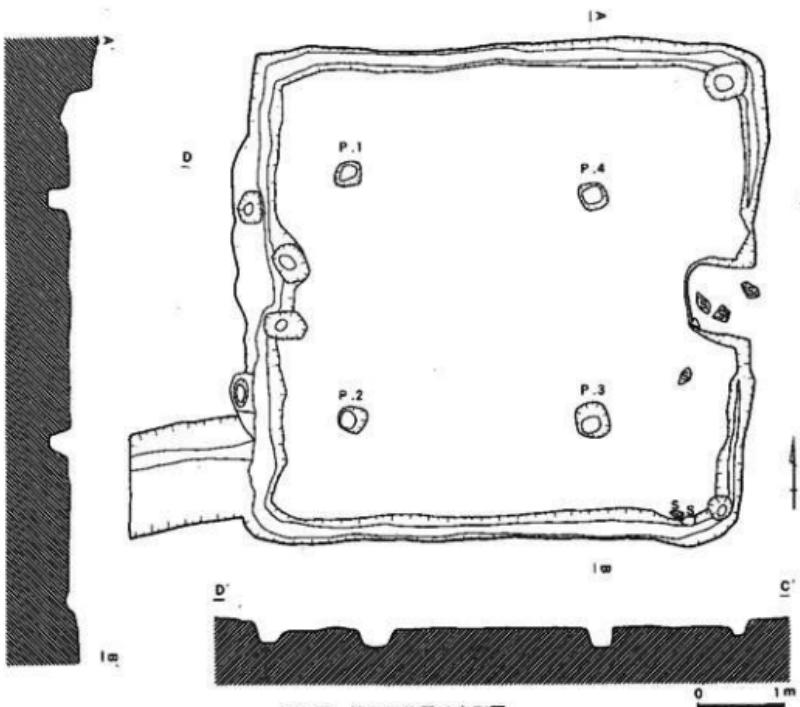


第8図 第4号住居址実測図

5) 第5号住居址（第9図）

本住居址は第4調査区内に発見されたもので、構造としては最南端に位置している。プランは東西6m10cm、南北5m70cmを示す隅丸方形を呈している。主柱穴はほぼ等間隔に4ヶ所配置されており、深さは26cm程度とやや深い。壁はやや急な斜壁となっており、ほぼ全体に周溝が見られる。周溝の幅は20cm前後と広く、深さは7~10cmを示す。床面及び壁面共に小石を多く含み、第2号住居址と同様な土質状況を示している。カマドは東壁中央に見られ、15cm角くらいの石を25個ほど集めて構築している。袖の中に平石を芯にしてカマドを形成する場合が多いが、このカマドはそのような状況は見られない。袖に相当する部分に若干ロームで固めた様子を伺うことができる。西壁中に2ヶ所のピットが見られ、柱穴と考えられるが、等間隔に位置している状況から、住居の屋根をささえ施設と推定される。また、西壁南角に、幅1m20cm、深さ70cm程度の構造溝が発見されている。これは東西に走る形で、西へ続くものと考えられる。溝は住居址によって切られている状況と示しているので、住居址の構築以前の構造溝である。

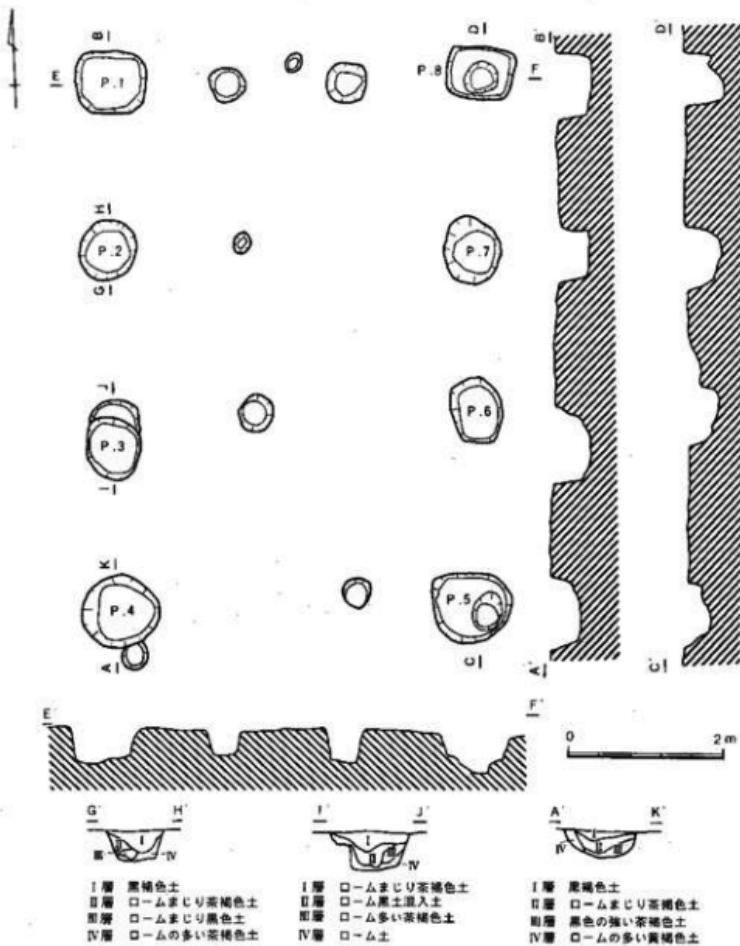
住居址内の出土遺物は、土師器小型甕などが出土し、9世紀中ごろの住居址と考えられる。



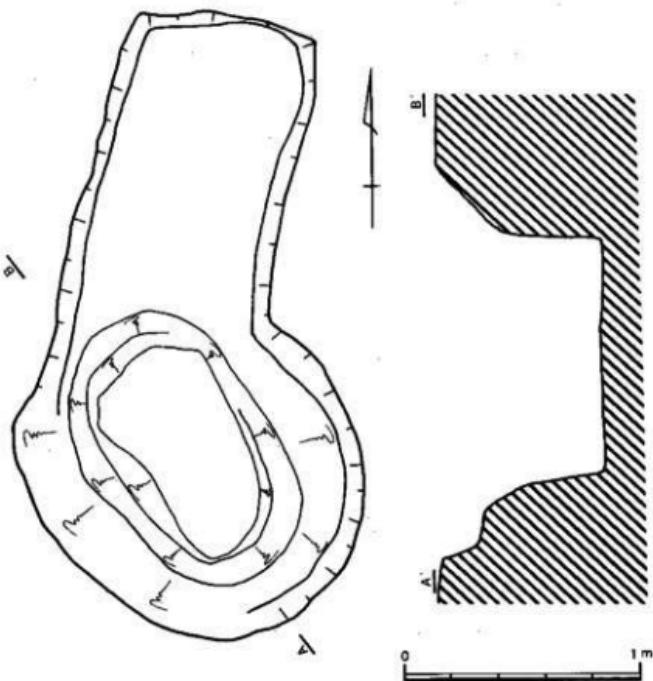
第9図 第5号住居址実測図

3. 挖立建造物址（第10図）

本遺構は、第3調査区のほぼ中央から検出されたもので、掘立建造物址としてはただ一つの遺構である。規模は東西4.8m、南北7mになる。掘立柱は4本づつ2列に並ぶ形で、ほぼ南北に長く位置している。北端のP1とP8の間に小柱穴が2ヶ所見られるが、地質を下からさえた東柱の跡と考える。P4とP5の間にも同様に小柱穴が位置していたと考えるが、南側は1ヶ所だけの確認であった。主柱穴8ヶ所の形状は、最も外側の4ヶ所が、隅丸長方形に近い形を呈しており、内側の4ヶ所は、ほぼ円に近い形をしている。深さは40~55cm程度で、P5、P8は柱根の太さと思われる穴が二段に落ち込んでいる。柱穴の底部はかなりの堅さを有しているものと、それほどの堅さの無いものとに分かれる。このような大形の掘立建造物址はあまり類例を見ないが、天竜川右岸の河岸段丘上に並ぶ遺跡の、上の林と中山遺跡に過去1ヶ所づつ見ることができる。中央自動車道に伴う発掘調査において、柱列址の遺構は多数見られたが、それ等と比較しても本例は大形である。遺構の時期決定に繋がる遺物は見られない。周辺遺構から見て8世紀から9世紀にかかる時代であろう。



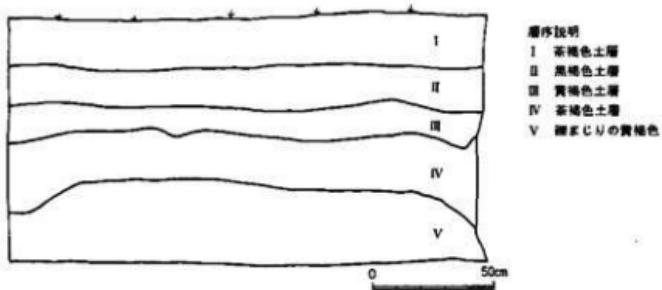
第10図 振立建造物址実測図



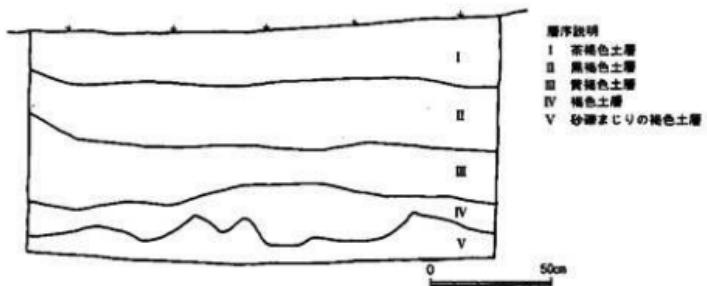
第11図 土塙実測図

4. 土塙（第11図）

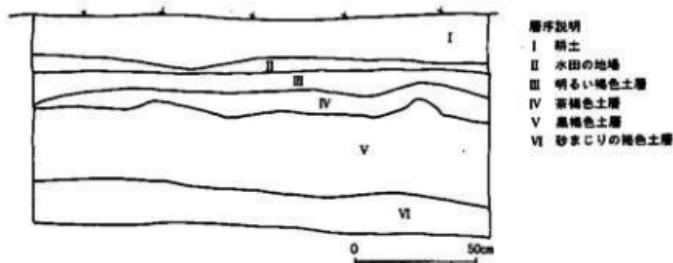
第3号住居址の西側に検出された遺構で、土塙としては1つだけである。南北に細長い形状を呈しているが、土塙としての中心部は南側の深い部分である。深さは約70cmで、底部は平らにしてあり、壁面共に調整している。貯蔵穴的な使われ方をしたものと考える。土塙内からの出土遺物は見られない。時期決定はできないが、第3号住居址と同時期と推定する。



第12図 D-1区F-4グリッド地層断面図（西面）



第13図 D-1区F-4グリッド地層断面図（南面）



第14図 D-5区第10グリッド地層断面図

第3節 遺物

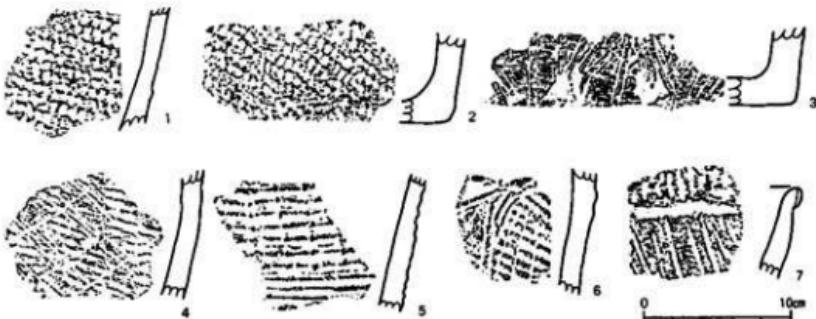
1. 繩文時代

土器（第15図）

今回の調査において、縄文時代の時期に属する遺構の検出はみられなかつたが、グリッドや他時期への遺構への流れ込み等により、細片ではあるが土器の出土が認められた。

1は、やや大粒のR L縄文が斜状に施文されるもので、焼成良好でしっかりとしている。2は、1と同様に斜状に大粒のR L縄文が施文される深鉢の底部片である。3は2と同じく深鉢の底部片であり、半截竹管状工具による縦、斜位に幾何学的な沈線文を施すものであ。4は、やや大粒のR L縄文を地文とし、その上に半截竹管状工具による沈線文を格子目状に施している。5は、瓦状押引き文が横位に施文されるものである。6は、連続する「Y」字状懸垂沈線と格子目状沈線による文様構成を行っている。7は、折り返した口唇部に半截竹管状工具による刻み目が施され、外面には沈線文が縱走する。

このような土器様相から、縄文時代前期後半から中期初頭時期に位置づけられよう。特に3は、諸磯C式土器にみられる文様構成に類似するようである。また、5～7は、その文様構成から梨久保式に位置付けられる。



第15図 出土縄文土器拓影図

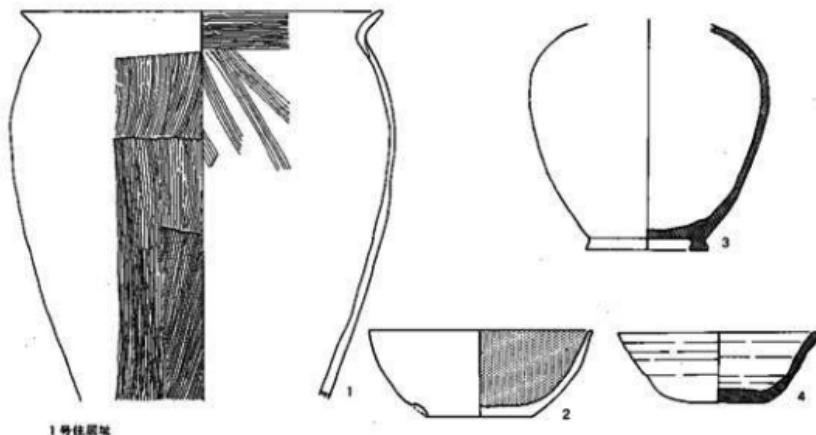
2. 奈良、平安時代

土器（第16・17・18図）

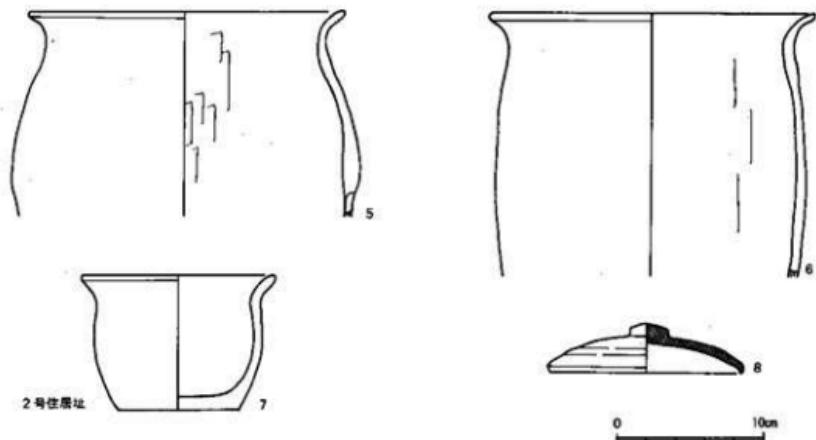
1号住居址（第16図1～4）

土師器は甕（1）・壺（2）が、須恵器は長頸甕（3）・壺（4）の出土がみられる。

1の甕は、カマドより出土したもので、口縁部は短く外反し、胴部は肩が張るようにふくら



1号住居址



第16図 出土土器実測図 1

む形状をする。外面は縦方向に、内面は口縁部横方向にハケ調整が施される。器厚は、比較的薄い。2の壺は、やや大型で内湾ぎみに大きく開く形状をする。ロクロ整形によるものである。内面は、黒色処理が施されており、外面は二次焼成のためか赤褐色化し、器面が剥げ落ちているところもみられ、炭化物の付着も認められる。3は、肩が強く張ってふくらむ形状をする長頸壺の胴部である。頸部から口縁部にかけて欠損しており、焼成不良のためか全体的に土師器のように茶褐色を呈し、軟質である。4は、体部が大きく開く壺で、ロクロ整形後底部は回転糸切りにより切り離される。色調は、青灰色を呈するものの、3と同様に焼成不良のためやや軟質である。

2号住居址（第16図5～8）

土師器は壺（5、6）と小型壺（7）、須恵器は蓋（8）・壺・大甕による器種構成がみられる。

5の壺は、口縁部は短く外反し、胴部はふくらみ底部に垂下するもので、胴部最大径は口径を上まわる。外面はナデ、内面は横方向にヘラナデが施される。6の壺は、5に対し胴部はあまりふくらまない形状をする。内面は横方向にヘラナデが施される。6の壺は、5に対し胴部はあまりふくらまない形状をする。調整は5と同じく外面ナデ、内面ヘラナデが施される。また、外面には、何か吹きこぼれたかのように炭化物が付着している。7の小型壺は、二次焼成のため外面は赤褐色を呈し、一部剥げ落ちているところもある。8の蓋は、宝珠形のつまみ部を有し、端部にかえりはみられない。尚、図化できなかったが、底部回転糸切りによる壺も見られる。

3号住居址（第17図9～14）

土師器は壺（9～11）、須恵器は壺（12～14）の出土がみられる。

9の壺は、口縁部は短く外反し、胴部はあまりふくらまずまっすぐ垂下する形状を示す。内外面共にナデ消しが不十分のため、輪積み痕が残っている。10は、胴部がややふくらむ形状をする壺で、内面は横方向にヘラナデによる調整が施されるが、それはハケに近いものである。12は、まっすぐ外開する底部回転ヘラ切りによる壺である。13と14は、美濃須恵器窯製の高台付壺である。

4号住居址（第17図15）

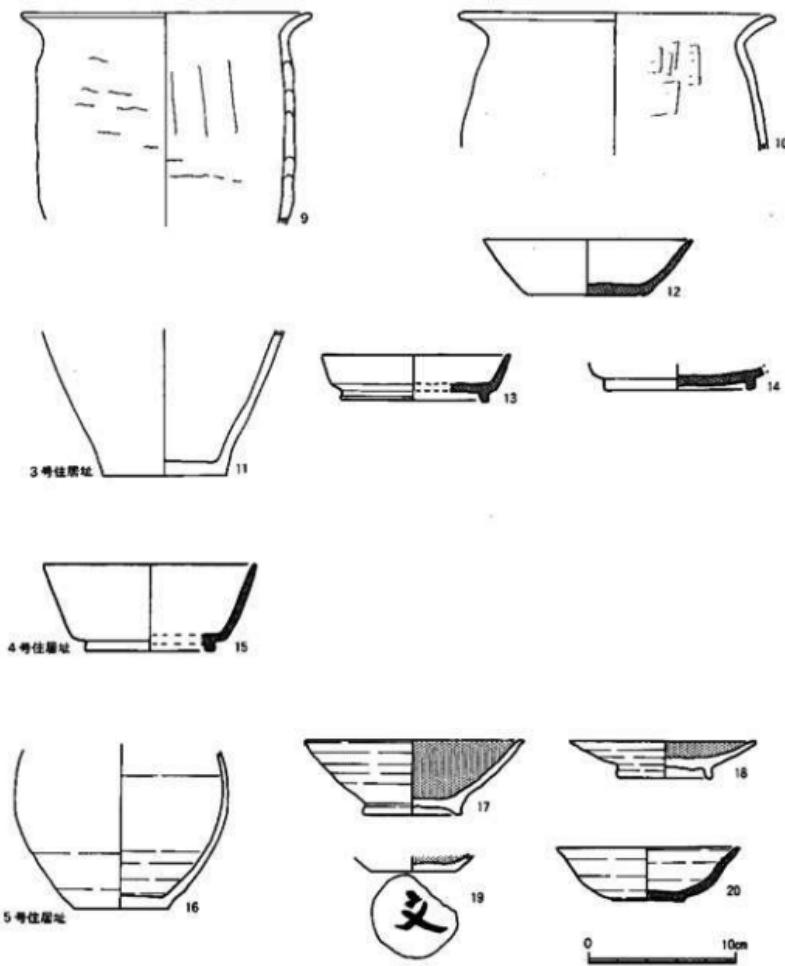
土師器は壺、須恵器は壺（15）の出土がみられる。

壺は、底部の小片しかないと図化できなかった。15の高台付壺は、体部がまっすぐ大きく外開する。他に、高台の付かない底部回転糸切りによる壺の出土もみられる。

5号住居址（第16図16～20）

土師器は壺（16）・壺（17）・皿（18）・壺（19）、須恵器は壺（20）の出土がみられる。

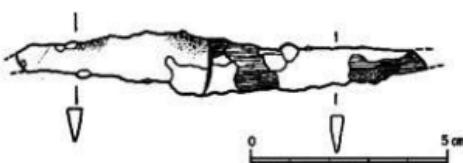
16は、薄手のロクロ壺である。17の壺は、ほぼまっすぐ体部が外開し口縁端部で小さく水平ぎみに外反する形状をするもので、内面は黒色処理が施される。19の壺は、内面黒色処理が施され、回転糸切りによる底部には墨書「文」の文字が認められる。20は、内湾ぎみに体部が外開する壺で、底部回転糸切りによるものである。



第17図 出土土器実測図2

鉄 器 (第18図)

18図の刀子は、土竈1号より出土したものである。刃部にはほぼ全体的に木質が付着している。また茎部も、刃部を作り出したかのように、断面は三角形を呈している。



第18図 出土鉄器実測図

第IV章まとめ

堂地遺跡は、沢尻一箕輪線の道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査である。この地籍は、昭和48年度に中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査が実施された場所の地続きになる。そのため、埋蔵文化財の内容については、かなり推測をすることができた。

昭和48年時における調査では、当時としては、県下では最大級の全面発掘であり、大規模なものであった。深沢川右岸に広がる広範囲の面に縄文中期初頭、古墳時代、平安時代などの多数の遺構、遺物が検出されたのである。そのため対岸（深沢川左岸）の中道遺跡を含め、伊那谷ルートにおける最大の調査となった。

さて、このような調査が過去において実施されているため、今回の発掘調査は、堂地遺跡がどの範囲まで広がっているのかという範囲確認の意味も含んだものであった。発掘調査の概要を記し、若干の考察を加えまとめとしたい。調査は道路敷の範囲に限られているため東西（道巾）約15mで、南北は深沢川段丘崖から南へ約300mほど続くものである。調査予定地域内における遺物分布状況から、遺跡範囲のおよその推定は可能であったが、まず最初の作業として、遺跡の範囲確認と地下遺構の破壊状況を知ることであった。

深沢川寄りの水田から田1枚分づつを調査区分けし、確認調査グリッドを設定した。その結果、深沢川段丘から南へ170m点までは遺物の分布を見ることができた。調査1区は縄文土器片が若干検出されたのみで、遺構はみられなかった。この地点ではローム面までが2m余りと深く、以前の地形はかなりの凹地であったと思われる。調査2区は逆に尾根状にやや高く、開田時に削平された範囲であったと考えられる。3、4区に遺構が集中している。住居址5軒、掘立建造物址1棟の検出があった。このうち住居址2軒と掘立建造物址は完掘できたが、他は調査区外に出ており、住居址は一部のみ確認されたにすぎない。調査3区に検出された3軒の住居址はすべて西カマドで、西壁ほぼ中央に位置している。カマドはいずれも平石を立てて芯にして、両袖を形成している。このことは共通した製作方法である。第1号住居址は完掘できたが、他の2、3号住居址は西壁部だけで、住居址全体のプランは推測する他は無い。これらの3住居址は、いずれも8世紀中頃から9世紀にかけての時期と考えられる。中道遺跡の時代区分を例にとると、中道I期に比定される。この3住居址と同じ場所に検出された掘立建造物址であるが、南北に棟を配し、二列8本の柱からなっている。その他に地質をさえた東柱が8本あったものと推定できる。平面プランは東西4.8m、南北7mである。柱穴は坪掘りで、円形及び隅丸方形を呈している。径は70~90cmほどもあり、中には柱の太さを示すように二段になっているものも見られる。このように大形の規模を有する掘立建造物址は、天竜川右岸段

丘上に見られ、上の林、中山の各遺跡に一ヶ所ずつ確認されている。昭和48年度における中央自動車道工事に伴う調査において、多数の建物址が見られたが、この種の大きさを有する遺構は少ない。遺構の時期を決める遺物の伴出は見られないが、周辺住居址に伴う時期と推定する。

次に第4区から検出された2住居址も第3区のものと同様な規模や時期と考えるが、2軒共にカマドが東壁に位置（第4住は焼土により推定）している。また第5号住居址のカマド構築状況は、他のものと相違が見られる。また第5号住居址によって切られた溝状遺構は、西方から水を引いた遺構のようにも推定される。

以上が遺構の概要であり、その内容について少しばかり気の付いたことを記した。今回の調査は、南北に長い区間であったため、深沢川段丘線から南に、遺跡がどの範囲まで及ぶかということについては、一応の目途を付けることができた。そして、深沢川右岸においても、川に添って下流にまで遺跡が続くことが証明されたのである。

このことは、左岸の大出側においても、同様な推測がなされるものであり、川をはさんで大きな遺跡の存在を考えさせる。このような大きな遺跡の存在は、ただ単に大遺跡というだけでなく、時代的背景をもった集落ではなかったかと推測したい。このことについては、中道遺跡との関連を考えながら考察しなければならない。

終わりに出土土器・陶器などについてご教示をお願いした長野県埋蔵文化財センターの小平和夫先生に、心からお礼を申し上げます。また発掘に従事された調査員ならびに団員の方々に、深く感謝申し上げます。予算等にご配慮頂いた伊那建設事務所長さん並びに担当職員の皆様に篤く謝意を表する次第であります。

図 版



調査地近影



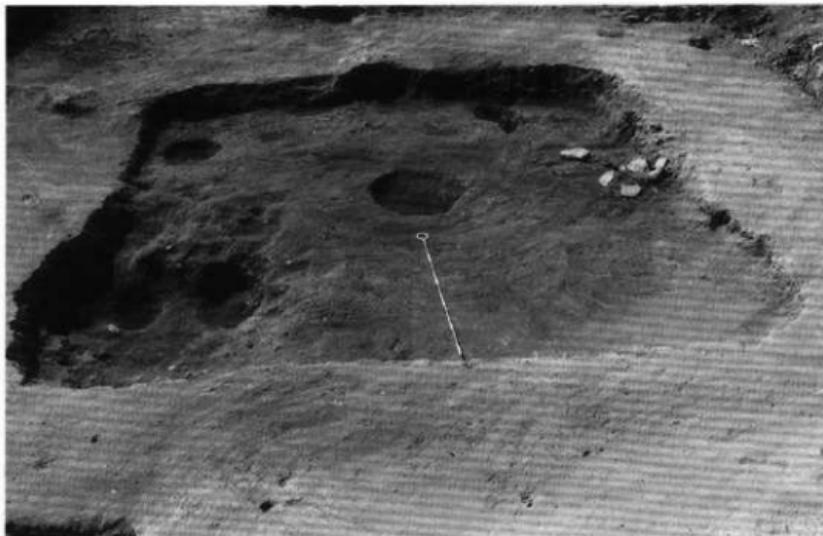
調査地近影



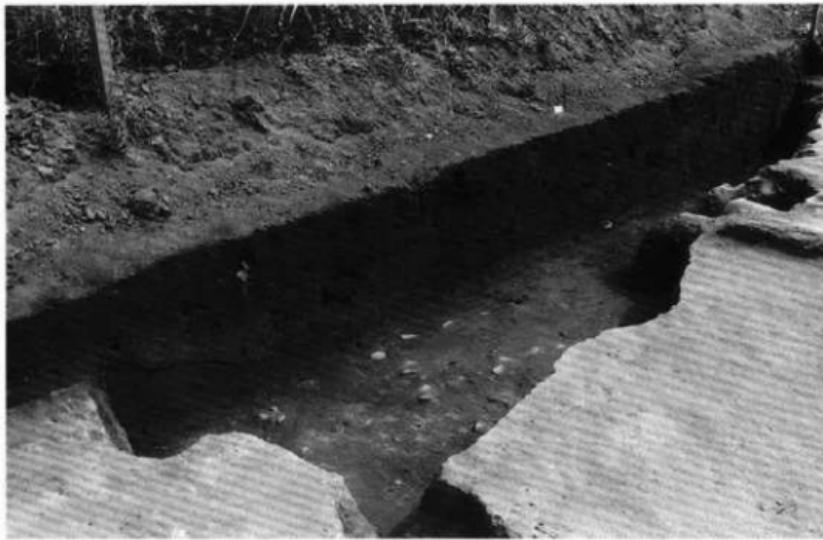
確認調査状況



確認調査状況



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



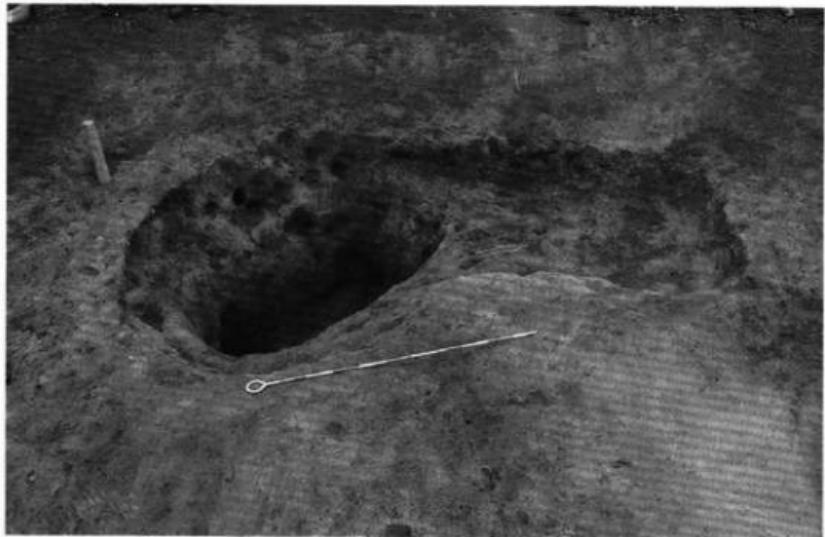
第4号住居址



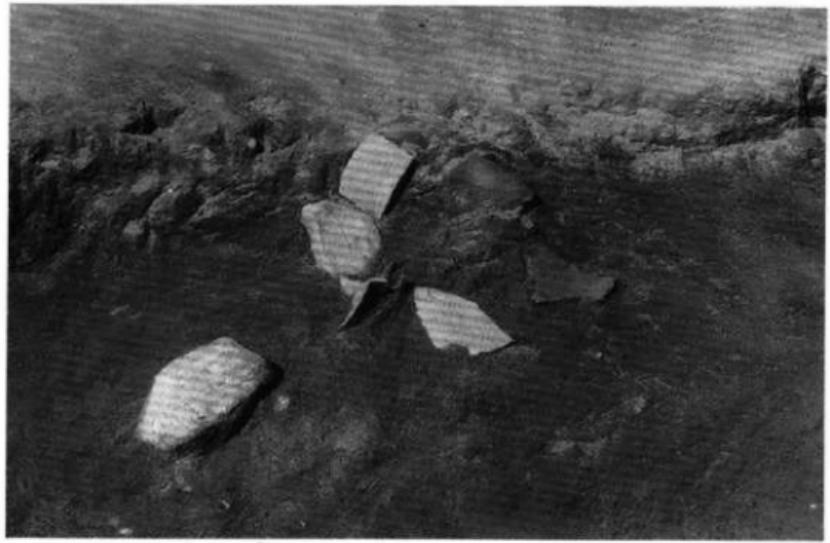
第 5 号住居址



据立建造物址



土塙



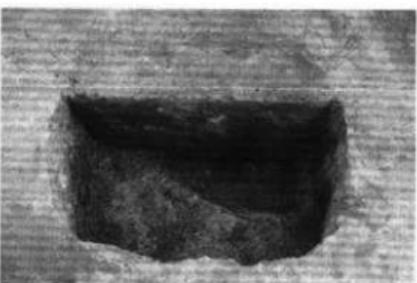
第1号住居址カマド状況



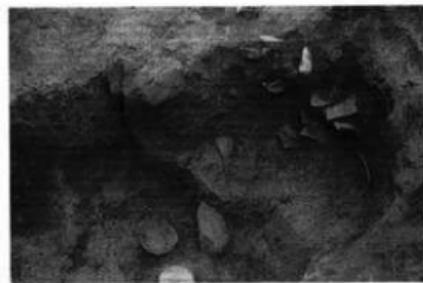
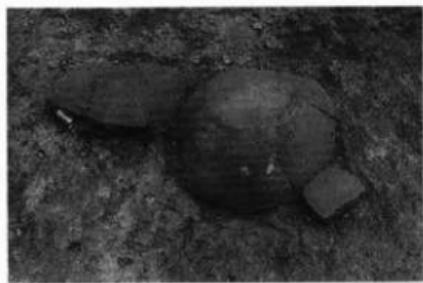
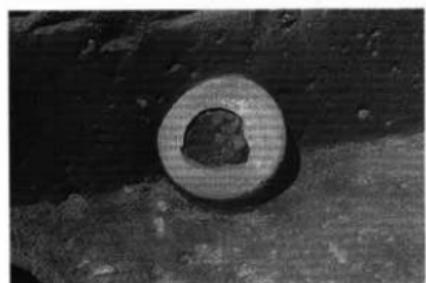
第3号住居址カマド状況



第5号住居址カマド状況



調査状況スナップ



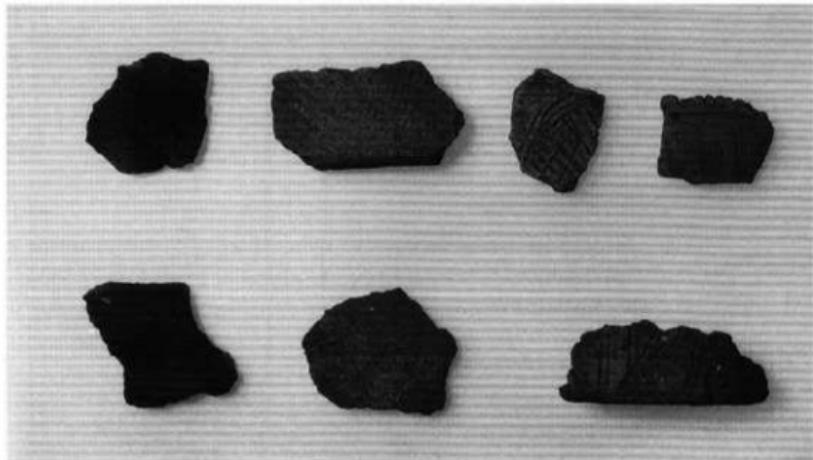
遗物出土状况



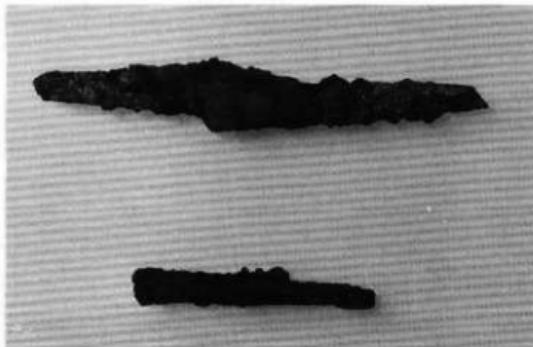
調査風景



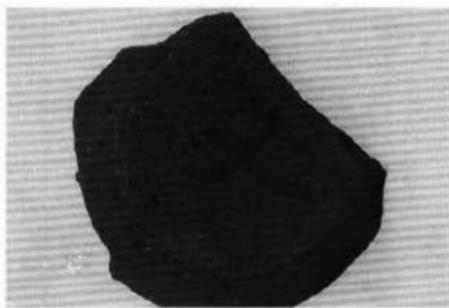
住居址出土土器



出土縄文土器



出土鐵器



墨書土器「文」の文字



調査参加者



調査参加者

中道遺跡

1989年

長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀口 泉

中道遺跡は、大出区の西部・深沢川左岸一帯に広がる地籍にあり、西天竜の開通により、一面の水田地帯となっている。

この地籍は、昭和48年度における中央自動車道埋文化財包蔵地発掘調査によって、世に大きく発表された遺跡であり、当時の調査において県下では最大級のものといわれています。

沢尻-箕輪線の道路建設に伴い、右岸の臺地遺跡に統いての調査となったものであり、調査地は段丘上・下の二ヶ所に分かれ、全調査面積3000m²におよぶという大きなものになりました。調査の結果については、各章ごとに記したとおりであります。2ヶ月余にわたって実施された調査により、多くの成果が上げられております。縄文時代中ごろの様子や、古墳時代後半から平安時代に及ぶ集落の状況が現われました。このことによって中道地籍に広がる集落の様子や、古代の人々の生活状況を推測することができました。

遺跡の発掘調査は、ただ一度しかできない性格のものであり、それによって、遺跡は消えてしまう運命にあります。

記録保存によって残った本書が、広く活用され、郷土の歴史を探る一頁になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、深いご理解をいただきました地元大出地区の皆様方、また長期間発掘に従事された調査団の方々に心からなる謝意を表して、序文といたします。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪2362、3267、3268、3276、3277番地に所在する、中道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、長野県伊那建設事務所より委託を受け、箕輪町教育委員会が行ったものである。調査は、昭和63年4月12日から6月14日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
 - ・遺物の復元—赤松 茂、福沢幸一、宮脇陽子
 - ・遺構図の整理—柴登巳夫、根橋とし子、宮脇陽子
 - ・遺物の実測・トレース—赤松 茂、井上武雄、柴登巳夫、根橋とし子、宮脇陽子
 - ・遺物拓影—井上武雄、根橋とし子
 - ・挿図作成—赤松 茂、宮脇陽子
 - ・付表作成—赤松 茂、宮脇陽子
 - ・写真撮影・図版作成—赤松 茂、井上武雄
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。
住居址・掘立建物址—1:80、カマド・土竈・集石—1:40
遺構図のスクリーントーンは、次のものを表す。
斜線—遺構断面、細点—カマドの火焼状況、網点—その他本文に記載する。
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。
縄文土器—1:4、縄文土器拓影図—1:3、土師器・須恵器・灰釉陶器—1:4、石器—1:3、2:3、鉄器・銭貨—2:3
土器実測図のスクリーントーンは、次のものを表す。
内面—内面黒色処理、断面—須恵器・灰釉陶器
6. 本書の執筆は、赤松 茂、柴登巳夫、宮脇陽子が分担した。
7. 本書の編集は、赤松 茂、井上武雄、柴登巳夫、根橋とし子、宮脇陽子が行った。
8. 石器の石材鑑定は、調査団長樋口彦雄氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
9. 土器については、(財)長野県埋蔵文化財センターの小平和夫氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
10. 写真撮影については、征矢 進氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
11. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町郷土博物館に保管されている。

目 次

題 字

団 長 橋口彦雄

序

教育長 堀口 泉

例 言

本文目次

挿図目次

付表目次

図版目次

第Ⅰ章	遺跡の立地	1
第1節	位 置	1
第2節	自然環境	2
第3節	歴史的環境	3
第Ⅱ章	発掘調査の経過	5
第1節	調査に至る経過	5
第2節	調査団の編成	5
第3節	調査日誌	7
第Ⅲ章	遺跡の状態	15
第1節	調査区の設定と検出遺構	15
第2節	層 序	15
第Ⅳ章	遺構と遺物	21
第1節	縄文時代	21
1.	住居址	21
1号住居址		21
2.	土塹	22
3.	集石	36
1号集石、2号集石		36
4.	遺構外出土遺物	37
土器、石器		37
第2節	古墳時代末～奈良時代	41
1.	住居址	41

2号住居址	41
3号住居址	43
4号住居址	46
5号住居址	48
6号住居址	52
7号住居址	54
8号住居址	54
9号住居址	56
10号住居址	59
11号住居址	62
12号住居址	63
13号住居址	65
14号住居址	68
2. 挖立建物址	70
1号掘立建物址、2号掘立建物址	70
第3節 中世	72
1. 上塚墓	72
第V章　まとめ	73

挿図目次

第1図 位置図	1
第2図 遺跡周辺の地形	2
第3図 周辺遺跡分布図	4
第4図 周辺地形と調査区設定図	14
第5図 1・2区基本層序模式図	16
第6図 1区全体図	17
第7図 2区全体図	19
第8図 1号住居址実測図・出土遺物実測図	21
第9図 土塙実測図1	23
第10図 土塙実測図2	24
第11図 土塙実測図3	25
第12図 土塙実測図4	26
第13図 土塙実測図5	27
第14図 土塙出土土器実測図1	29
第15図 土塙出土土器実測図2	30
第16図 土塙出土土器実測図3	31
第17図 土塙出土土器実測図4	32
第18図 土塙出土土器実測図5	33
第19図 土塙出土石器実測図1	34
第20図 土塙出土石器実測図2	35
第21図 1・2号集石実測図	36
第22図 2号集石出土土器実測図	37
第23図 遺構外出土土器実測図	38
第24図 遺構外出土石器実測図1	39
第25図 遺構外出土石器実測図2	40
第26図 2号住居址実測図	41
第27図 2号住居址カマド実測図	42
第28図 2号住居址出土遺物実測図	42
第29図 3号住居址実測図	43
第30図 3号住居址カマド実測図	44

第31図	3号住居址出土遺物実測図	45
第32図	4号住居址実測図	46
第33図	4号住居址出土遺物実測図	47
第34図	5号住居址実測図	49
第35図	5号住居址2号カマド実測図	49
第36図	5号住居址出土遺物実測図1	50
第37図	5号住居址出土遺物実測図2	51
第38図	6号住居址実測図	52
第39図	6号住居址出土遺物実測図	52
第40図	7号住居址実測図	53
第41図	7号住居址出土遺物実測図	54
第42図	8号住居址実測図	55
第43図	8号住居址出土遺物実測図	56
第44図	9号住居址実測図・カマド実測図	57
第45図	9号住居址出土遺物実測図	58
第46図	10号住居址実測図	60
第47図	10号住居址出土遺物実測図	61
第48図	11号住居址実測図	62
第49図	11号住居址出土遺物実測図	63
第50図	12号住居址実測図	64
第51図	12号住居址出土遺物実測図	64
第52図	13号住居址実測図・カマド実測図	66
第53図	13号住居址出土遺物実測図1	67
第54図	13号住居址出土遺物実測図2	68
第55図	14号住居址実測図	68
第56図	14号住居址出土遺物実測図	69
第57図	1・2号掘立建物址実測図	71
第58図	土塙墓実測図	72
第59図	土塙墓出土遺物実測図	72

付 表 目 次

付表2	出土石器一覧表	81
付表3	古墳時代末～奈良時代、住居址出土土器一覧表	82

図版目次

- 図版1 1区近景、1区全景(1)、1区全景(2)
- 図版2 2区近景、2区全景(北部)、2区全景(南部)
- 図版3 1号住居址、同埋甕炉出土状況
- 図版4 土塙1、土塙2、土塙3
- 図版5 土塙4、土塙5(7号土塙)、土塙6(7号土塙遺物出土状況)
- 図版6 土塙7、土塙8(15号土塙)、土塙9(15号土塙遺物出土状況)
- 図版7 土塙10、土塙11(28号土塙)、土塙12(28号土塙遺物出土状況)
- 図版8 土塙13、土塙14(30号土塙)、土塙15
- 図版9 土塙16(42号土塙遺物出土状況)、土塙17、土塙18(57号土塙)
- 図版10 土塙19、土塙20(66号土塙)、土塙21(66号土塙遺物出土状況)
- 図版11 土塙22、土塙23、土塙24
- 図版12 土塙25(87号土塙)、土塙26、1・2号集石
- 図版13 1号集石、2号集石、4号住床下縄文土器・石器出土状況
- 図版14 2号住居址、同カマド出土状況
- 図版15 3号住居址、同カマド出土状況
- 図版16 4号住居址、同遺物出土状況
- 図版17 5号住居址、同カマド出土状況
- 図版18 5号住居址遺物出土状況、6号住居址
- 図版19 7号住居址、7・4号住居址重複状況
- 図版20 8号住居址、同遺物出土状況
- 図版21 9号住居址、同カマド出土状況
- 図版22 10号住居址、11号住居址
- 図版23 12号住居址、同カマド・遺物出土状況
- 図版24 13号住居址、同カマド出土状況
- 図版25 13号住居址遺物出土状況、同遺物出土状況
- 図版26 13・14号住居重複状況、14号住居址
- 図版27 14号住居址遺物出土状況、同遺物出土状況
- 図版28 1号掘立建物址、2号掘立建物址

- 図版29 中世土塁墓、同遺物出土状況
- 図版30 調査状況
- 図版31 出土遺物 1
- 図版32 出土遺物 2
- 図版33 出土遺物 3
- 図版34 出土遺物 4
- 図版35 出土遺物 5
- 図版36 出土遺物 6
- 図版37 出土遺物 7
- 図版38 出土遺物 8
- 図版39 出土遺物 9
- 図版40 出土遺物10
- 図版41 出土遺物11
- 図版42 出土遺物12
- 図版43 出土遺物13
- 図版44 出土遺物14
- 図版45 出土遺物15
- 図版46 出土遺物16
- 図版47 調査参加者

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位置

中道遺跡は、長野県上伊那郡大字中箕輪2362番地を中心と所在する。天竜川右岸には、深沢川や帶無川などの小河川によって開削された扇状地が南北約21kmに広がり、東へ緩やかな傾斜面を呈している。遺跡は扇央部から扇端部にかけた傾斜面にあり、深沢川の左岸段丘上に位置している。一帯は水田地帯で、東は大出の集落があり、西は南北に中央道が走る。遺跡地は段丘の上段と中段とに分かれ、720~740mの標高を測る。



第1図 位置図

第2節 自然環境

箕輪町は、長野県の南部、上伊那郡の北部に位置し、諏訪湖を源とする天竜川が中央部を南流し町を竜西・竜東の二地区に分けている。右岸の竜西地区に発達した扇状地は、木曽山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成されたものである。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、蒂無川、大泉川、小沢川と続き、北ほど流路は短く、南ほど長くなっている。それは西側山地が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路の長さに比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地の扇頂部より浸透した地下水は、洪積台地の下をくぐって段丘崖下に湧き出す湧水群となり、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊富な水源に恵まれている。中道遺跡は、この複合扇状地の扇央部、深沢川の右岸段丘上に位置し、東方に面する緩やかな傾斜面に立地している。

遺跡地より東方に目を転ずれば、天竜川とその氾濫原が広がり、また、左岸の竜東地区を展望することができる。竜西と比べてやや小規模ではあるが、西流する沢川によって形成された扇状地が広がる。その背後には赤石の山脈を経て、はるかにそびえる雄大な南アルプスの麗峰を見渡すことができる。また、南方に目を転ずれば、天竜川によって形成された広大な伊那盆地を望むことができる。

遺跡は、このように恵まれた自然環境の中で形成され、現在に至っている。



遺跡周辺の地形

第3章 歴史的環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形であり、先史より人が居住しやすい好的な所といえる。町内には、そんな古代人たちが残した足跡とも言うべき多くの遺跡が散在し、その総数は、包蔵地176ヶ所、古墳24基が現在のところ確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その中にあって、中道遺跡の所在する竜西地区一帯をみてみると、地形的、水利的な立地条件のよい場所に集中している。

東流する小河川の両岸に形成された段丘上には、幾つかの遺跡群が存在する。中道遺跡は、深沢川の左岸段丘上に広がる遺跡群の一つであり、さらにその上流の八乙女地区には五輪遺跡、対岸には、中道遺跡との関連性が考えられる堂地遺跡がある。遺跡の所在する大出地区は、律令制以前に造られた東山道の通過地であるとされ、平安時代に書かれた「延喜式」には、一定区間に駅家が設置されたと記されており、その一つである深沢駅がこの地区的どこかに所在していたと推測されている。昭和48年に行われた中央道建設に伴う本遺跡の発掘調査では、縄文、奈良、平安時代に営まれた複合遺跡であることがわかった。中でも、奈良から平安時代にかけての大集落址の存在が明らかとなり、特に一辺が8mを越す規模の大型の堅穴式住居や、奈良三彩を出土する住居など、特種な遺構・遺物の多く出土する何か特別な意味を持つ遺跡として注目された。

一方、天竜川西岸の段丘突端部をみてみると、北から丸山・熊野上、大出、松島王墓古墳、本城、中山、藤山、上の林、北城、南城、猿楽の遺跡がほぼ切れ目なく連なり、一種の遺跡ベルト地帯を形成している。それは、縄文時代から中世まで営まれた複合遺跡で、昭和60~62年にかけて中山遺跡が、昭和55~57年にかけて上の林遺跡が、それぞれ調査され多数の遺構・遺物が検出され、徐々にその内容が解明されつつある。また、上伊那郡下で唯一の前方後円墳である松島王墓古墳は、6世紀後半の築造とされ、全長58m、前方部前縁幅32m、同高さ7.7m、後円部径約30m、同高さ7mの規模を有するものである。この大古墳の出現は、この箕輪一帯を治めていた統治者の絶大な権力というものを伺わせるものである。更に、段丘下の氾濫原に目をうつすと、古代水田址である箕輪遺跡が広がる。その規模は、およそ100ヘクタールとも言われ、稻作文化が入ってきた弥生時代から現代に至るまで、高い生産力を擁する屈指の穀倉地帯を形成している。時の権力者は常にここを支配し、自らの戦力基盤としていたのである。

このように箕輪町は、原始から古代にかけてその歴史的基礎を確立していったが、その中にあって中道遺跡はとりわけ重要視することができよう。これらの環境の中で遺跡は、大きな役割を果たしていたものと考えられ、その全貌が明らかになったときには、古代中世の歴史解明に大きな役割を果たすであろう。



- 中道 ② 堂地 ③ 五輪 ④ 丸山 ⑤ 熊野上
- ⑥ 松島王墓古墳 ⑦ 大出 ⑧ 本城 ⑨ 中山 ⑩ 藤山
- ⑪ 上の林 ⑫ 北城 ⑬ 南城 ⑭ 猿楽 ⑮ 笈輪

第3図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

今だに道路事情の問題が取りざたされている今日の社会において、敏速かつ円滑な移動ができる、より生活の発展・向上が得られるよう、道路の整備・新設が求められている。長野県伊那建設事務所は、そのような問題のみられる県道「沢尻—箕輪線」通称春日街道が、松島区堂地地籍の変電所上で行き止まりになっていることに対処するために、そこから北へ総長650m、幅員10mの路線を計画し、昭和62年度より工事着手するに至った。そして同事業に伴い、計画路線に所在する、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

東流する深沢川の右岸段丘上に堂地遺跡が、左岸段丘上に中道遺跡がそれぞれ所在し、昭和48年には中央道建設に伴う発掘調査が行われている。路線は、その中央道の100~150m東側にほぼ平行に位置するため、遺構・遺物の存在を予測していた所である。昭和62年度には、既に堂地遺跡分の調査が完了し、内容的にはほぼ予想通りのものであり、大きな成果を上げている。そして今年度、残る中道遺跡分を4月12日から6月14日までを期間とし、箕輪町教育委員会が伊那建設事務所より委託を受け、新たに調査団を編成して、調査を実施する運びとなった。

第2節 調査団の編成

調査団

団長 橋口彦雄

担当者 柴登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員

調査員 赤松 茂 箕輪町郷土博物館臨時職員

調査員 宮脇陽子

団員 荒川織光 石川清子、井上 清、井上武雄、浦野 弘、大根泰人、岡 章、

岡 正、春日義人、唐沢源一郎、唐沢正十、唐沢光国、小池久人、小島久男、

小平和子、小林信義、清水すみ子、白鳥博臣、戸田隆志、中坪侃一郎、

根橋とし子、野村金吉、藤森秀男、星野政雄、松田幸雄、水田あき子、水田重雄、

山岡ゆき子、山岸 工（故人）

事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課長
上田明勇 箕輪町教育委員会社会教育係長
柴登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
赤沼悦子 箕輪町郷土博物館臨時職員
赤松 茂 箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 調査日誌

4月12日 (火) 曇

発掘用機材やテントを運搬し、テントの設営を行う。調査区は地形的な状況から第1調査地区(中段面)と第2調査地区(上段面)とに分け、最初に前者の調査を行い、続いて後者を行う予定である。午後から地層状況を把握するため、第1調査区内に2m四方のテストピットを6ヶ所開ける。各テストピットより縄文土器片、土師器や須恵器の破片が出土する。また、北側のテストピットからは埋甕が出土し、初日から住居址の検出かと、明日からの調査に期待が寄せられた。



4月14日 (木) 曇

前日の雨が残り人員はやや少ない。テストピットの掘りの続きをを行い、土層の堆積状況などを見ながら今後の調査の見通しについて協議を行った。

4月15日 (金) 晴

晴天の下、堀口教育長、長野県伊那建設事務所の課長、担当職員の方々の御来席をいただき堀口団長を中心とする調査団の結団式を行い、続いて神事が行われ、団員の安全と調査の完遂を祈願した。午後から耕作土の厚い調査区西側の表土はぎが重機により開始され、耕作土の薄い東側にはグリッドが設定され、掘る作業も開始された。

4月16日 (土) 晴

昨日から引き続きグリッドを掘り下げる。グリッドは遺構を確認するため市松状に掘り進め行く。先日埋甕の出土した周辺のグリッドを掘ると、炉や柱穴らしいピットが検出されたため1号住とした。だが、この住居址付近は開発の際に削平により耕作土が薄く、遺構の残りが悪いようであり、1号住も立ち上がりがなくそのプランを確定し難かった。また、その他のグリッドからも遺物は出土するが、遺構の確認はできなかった。



4月18日 (月) 曇のち雨

グリッド掘りが続く。だが、遺構は確認できない。午後、間もなく雨が振り出し、1号住にシートをかけ作業を打ち切った。明日以降に期待をかける。

4月19日 (火) 雨のち晴

午前中は雨が残ったため、午後から作業を行つた。各班ごとに作業が進められ、1班は1号住の掘りに入り、2・3班はグリッド掘りが続けられ4班は測量を行つた。E-10グリッドおよび周辺グリッドから多量の土師器や須恵器の破片が出土し、遺構の確認が進められた結果、2号住が確認された。



4月20日 (水) 晴

昨日に引き続き班別に作業が行われ、1号住は床面の仕上げに入り、2号住ではプランの確認が続けられた。グリッド掘りも継続するが遺構は検出されない。午後から1号住の平面測量が始まった。

4月21日 (木) 曇のち雨

2号住の掘り下げに入る。土師器や須恵器の破片が多数出土する。また、グリッド掘りも継続される。しかし、午後になり雨が降り始め、3時すぎに作業を打ち切つた。

4月22日 (金) 曇

午前中、樋口団長による石についての講習会が行われた。カマドの石や石器の石質等々、大いに勉強になった。また、J-16グリッドを中心にして3号住が確認され、土師器や須恵器の破片が多数出土した。2号住では床面の仕上げが行われた。

4月23日 (土) 晴

3号住の掘り下げに入る。住居内から一括して土器が検出された。2号住では追い込みに入りカマド以外が仕上り、測量を行つた。また、重機による表土はぎが行われていた西側に、新たにグリッドを設定し、グリッド掘りを開始した。午後、福沢幸一氏が来訪し、1号住の埋甕を取り上げる。また、復元も依頼した。

4月25日 (月) 晴

発掘が始まつてから2週間が過ぎ作業も大分慣れてきたようだ。グリッド掘りが進み、Q-15グリッド周辺に4号住、また、西側のS-7グリッド周辺からは5号住がそれぞれ確認された。2軒の住居址からは土師器や須恵器の破片が出土した。3号住のベルトが解体され追い込みに入った。尚、検出面の土層と覆土の色調が類似しており、いずれの住居址もプランの確認に時



間を費やした。

4月26日 (火) 晴

2班による調査区西側のグリッド掘りが継続され、R-12グリッド周辺から集石炉が2基検出された。また、S-11グリッド周辺からは6号住を確認した。しかし、半分程が西側の調査区外にかかるため調査ができない。4号住のプランの確認を1班が行うが、西側が不明瞭で手間取った。また、5号住もプランの確認が行われ、午後に3班が掘り下げに入った。土師器や須恵器の破片が多量に出土した。



4月27日 (水) 晴

昨日より5号住を掘り下げているが、西壁の一部がわずかに調査区外にかかり、完掘をしたく地主にその旨を伝え承諾を得る。多人数で田畠を慎重に壊し完掘する。2・3号住もそうだが、カマドが住居の西側に存在する。しかし、5号住ではその西側のカマドが何らかの理由で破壊され、北東コーナーに新たに造設されていた。1軒の住居内から2基のカマドが検出され団員の興味をそそった。また、4号住の西側のプランを確認するため、平面的に拡張した。2号住のカマドの解体に入る。

4月28日 (木) 晴

4号住の西側プランが確定できないため、プランが判明している北端から南端へと南北にベルトを設定し、4号住の掘り下げに入った。土師器や須恵器の破片が多量に出土した。5号住が追い込みに入る。

5月6日 (金) 晴

1週間ぶりに調査が開始された。農繁期に入り人数がやや少なく、1・2班合同で4号住の掘りに入る。住居の西側に設定した南北ベルト以西を平面的に拡張していた結果、遺構が検出され7号住とした。また、3班が6号住のプランを確認した後、掘り下げに入った。午後に6号住のベルトを解体し、床面の仕上げに入る。

3号住のカマドおよび5号住北東コーナーのカマドの解体に入る。比較的残存状態の良好な5号住のカマドをモデルに、担当調査員よりカマドについての説明が行われた。

5月7日 (土) 曇のち雨

第1調査区の調査も終盤に差しかかった。1・2班合同で7号住の掘り下げに入る。続いて4・



7号住の各ベルトの土層断面を整地し、測量に入った。3班は昨日からの6号住の掘りの続きを床面まで掘り下げる。正午前、雨が振り出し作業を打ち切った。

5月9日（月） 晴

本日より第1調査区と平行して、2班と3班数人によって第2調査区の遺構上面確認が開始された。まず最初にいくつかのテストピットを入れ土層堆積状況を確認し、その後重機による表土はぎが行われた。遺構確認面がローム層（黄褐色）のため遺構の確認が容易であり、農耕道路東側よりいくつかの土塙と住居址（8号住）が確認された。しかし、排土スペースがなく排土に苦労をする。第1調査区では、4・7号住および6号住の各ベルトが解体され、床面・柱穴等の仕上げに入った。

5月10日（火） 曇のち雨

4班以外は全員第2調査区に移動し、遺構上面確認が行われた。4班は第1調査区で測量を行った。午前11時すぎ雨のため作業を打ち切った。

5月13日（金） 晴時々雨

第1調査区では4班が測量の続きをやる。第2調査区では遺構上面確認が継続された。農耕道路の東側がほぼ終了したためグリッドを設定した。いくつかの土塙と9号住・10号住が確認された。

5月14日（土） 晴

第1調査区の調査も大詰めを迎え、測量も終了した。第2調査区では8号住の掘り下げといくつかの土塙の半剖に入った。南端の土塙は中世の土塙墓であるらしく半剖の時点で内耳土器（土師器）が1個体と石、古銭が3枚検出され団員一同感嘆した。また、11・12号住が確認された。

5月16日（月） 晴

先週に引き続いて8号住の掘り下げと新たに11号住・12号住の掘り下げに入った。11号住は半分程が調査区外にかかるために完掘ができない。各住居址とも、土師器や須恵器の破片が出土した。また、11号住からは焼土も検出された。南端の土塙墓の完掘が行われ、土器の脇より歯（人歯と思われる）が出土し、石の下からは、古銭が3枚出土し、古銭は合計6枚となった。



5月17日 (水) 晴

9号住と10号住のプランを確認した後、掘り下げに入った。8号住・11号住・12号住は共に床面が仕上げの段階に入った。午後には12号住の測量を行った。また、9号住の西側の一部が農耕道路にかかっているため、現在のところ調査ができない。休憩時、昨日までに土塙墓から検出された古銭6枚（六道銭）についての説明があった。



5月18日 (木) 晴

9号住・10号住のベルトが解体され、床面の仕上げに入った。また、農耕道路西側の遺構上面確認が一部始まり、南端部よりピットがいくつか検出された。

5月19日 (木) 晴

午前中、第1調査区の全体測量が実施された。第2調査区では遺構上面確認が続けられ遺構の検出が行われた。また、11号住の測量が終了した。

5月20日 (金) 晴

いくつか検出された土塙の半割に入る。土塙内より縄文土器の破片が出土した。また、10号住の測量も行った。午前10時頃、博物館より山岸工さん（調査団員）死去の知らせを受ける。

5月24日 (火) 晴

業者に委託しての農耕道路とその西側一帯の表土はぎ作業が行われた。本日の作業は測量のみで、10号住と12号住のカマドの調査・測量を行った。

5月25日 (水) 曇

本日も業者が表土はぎと排土作業とを行う。北側の表土はぎが終了したところから上面の整地を行い遺構の確認を行った。一部が農耕道路にかかっていたために、調査が中断していた9号住の全掘を行った。この住居の西側から検出されたカマドは非常に残存状態が良好であった。また、10号住の西側から13号住・14号住が確認された。



5月26日 (木) 晴

南側の表土はぎ、排土作業も終了し、整地を兼ねた遺構上面確認が行われた。遺構は土塙がいくつか確認された。また、13号住のプランを確認した後、掘り下げに入った。

5月27日 (金) 晴

9号住のほぼ中心に有線電話の柱を残したために測量に苦労を要した。1班は昨日より継続して13号住の掘り下げを行い床面の仕上げに入った。床面より鎌が出土した。西側より残存度の比較的良いカマドが検出された。また、14号住のプラン確認も実施された。3班は12号住西側の遺構上面確認を継続して行った。



5月30日 (月) 晴

1班と3班が合同で遺構上面確認を行い、土塙やピットの遺構を多数確認し土塙の総数は100基を越えた。2班は8号住西側の土塙の半割に入った。昨日、14号住のプランを確認する際に住居の北側より土器の口縁部が検出され、掘り下げてみると完全な形で「横盆」が出土し、団員一同感嘆の声を発した。

5月31日 (火) 晴

中部小の6年生が午前と午後と見学に来た。担当学芸員の説明を熱心に聞き、メモして、質問していた。作業は土塙の半割が継続され、各土塙とも縄文土器の破片や打製石器が出土した。また、西側南端部まで整地および遺構上面確認が終了し、先日南端部より検出されていていくつかのピットと土塙が明確になった。ピットは南北に4列、東西に3列、合計12ヶが並んだため1号掘立建物址とした。また、13号住の測量を行った。

6月1日 (水) 曇

1号掘立建物址のピットの半割に入る。縄文時代の土塙を切っているピットもいくつかあつた。半割が終了したものから測量を行い完掘に入った。土塙も同様に半割、測量、完掘を行つた。

6月6日 (月) 晴

4日ぶりに現場に行くと雨の被害が目についた。土塙群の方がその被害が大きく、今後の対応が協議された。作業は終日、土塙の半割と全掘、および完掘が行われ、土塙内からは縄文土器の破片が多数出土した。また、11号住の西側に、南北に3列、東西に2列、合計6ヶのピットが並びこれを2号掘立建物址とした。



6月7日 (火) 晴

土塙群の掘りに目処が立ってきた。100数基の土塙も残すところわずかとなった。14号住の掘

り下げに入った。西側が一部調査区外に延びており調査ができない。ベルトを設定し全体的に15cm程掘り下げた住居内一面に、赤褐色の焼土が広がり火災に遭った可能性があると考えられた。更に掘り下げ床面に到達すると、東側に1m程度の柱と思われる炭化材が出土し、いよいよもって火災説が濃厚となり団員の興味をそそった。また、鉄製の紡錘車や刀子が床上から出土した。



6月8日（水）曇のち雨

午後3時頃、町の教育委員会の視察団約10名が見えられ、降雨の中を担当学芸員の説明を聞きながら現場の状況を見て行かれた。作業は昨日に引き続いての土塙の半割、完掘と14号住の掘りと床面の仕上げを行った。土塙も完掘されたものから測量に入った。午後3時すぎ、降雨のために作業を打ち切った。

6月10日（金）晴

第2調査区の調査も大詰めの段階となる。測量を主としてやや人員を削減して作業を行った。14号住と各土塙の測量を行い、さらに遺物の取り上げも行い、14号住居内の横糞が慎重に取り上げられた。

6月11日（土）晴

第2調査区の全体測量が行われた。最初に南側の100数基の土塙群から始めた。また、13号住のカマドを解体して調査した。しかし、遺物の量が多く測量と取り上げに時間要したため、午前中で終了する予定が午後まで延びてしまい、3時すぎにようやく全体測量が終了となった。

6月13日（月）晴

再び第2調査区内に農耕道路を造成するための埋め戻し作業を手作業および重機を用いて行った。また、慰労会も実施された。

6月14日（火）晴

昨日に引き続き第2調査区の埋め戻し作業を行った。午後、テントや発掘用機材の撤収を行い、博物館にて整理作業を行った。本日にて中道遺跡の発掘調査をすべて終了した。





第4図 周辺地形と調査区設定図

第III章 遺跡の状態

第1節 調査区の設定と検出遺構

中段面は、昭和48年度の中央道建設に伴う発掘調査の行われなかった面であり、遺跡の有無は不明であった。しかし、過去において水田・畑地の耕作中に土器等の遺物が出土した、という例もあり、また、遺物の表面採集もできることなどから、遺跡包蔵地として判断し、調査の対象とした。上段面は、中央道建設の調査で奈良時代から平安時代にかけての集落址の存在が明らかになっており、調査地はそこからわずか100m東側に位置するため、ほぼ同一時期の遺構・遺物が検出されるのは、当初より予測されていた。よって調査は、地形的状況と進行状況を踏まえて、中段面を第1調査区（以後1区と呼ぶ）、上段面を第2調査区（以後2区と呼ぶ）と区分し、前者より調査を進めることとなった。尚調査は、各区に試掘坑を設けて土層堆積状況を確認し、その後重機による表土剥ぎを行って、2m四方のグリッドを設定した。グリッドは、統一グリッドとせず、各区ごとに設定した。

調査結果は、1区より縄文時代中期初頭の住居址1軒と集石2基、古墳時代末から奈良時代にかけての住居址が6軒検出した。1区は全体的に遺構の遺存状態は悪く、特に縄文時代の住居址（1号住）は、過去における開田工事によって上部を削平された状態にあった。2区からは、縄文時代中期初頭の時期に属する土塙109基、古墳時代末から奈良時代にかけての住居址7軒と掘立建物址2軒、中世の土塙墓1基を検出した。土塙は調査区の全域にみられるが、特に段丘の突端部に集中しており、一種の土塙群として捕えられよう。住居址は、1区とほぼ同一時期のものとして考えられ、切り合い関係にある住居址もあり、時期の細分も可能である。また1基のみの検出であったが、人齒と錢貨を伴う中世の土塙墓に注目される。尚、2区は水田や農道として使用されていたにもかかわらず、1区のような地形の変化は少なく、比較的遺構の遺存状態はよかった。

第2節 層序

1区

中段面である1区は、深沢川の押し出しによって形成された堆積面であり、1区の上段面とは、基本的な堆積層序が異なっている。また、第5図をみると、調査区の西側から東側まで約40mの幅で90~100cmの標高差がみられ、ゆるやかに傾斜している。

1層——耕作土。現在、水田が営まれており、粘土層と鉄分を含む礫土層とに細分が可能であ

るが、耕作土として括する。

II層——黒褐色土層。調査区の西側では約20cmの厚さを測るのに対し、東側では120cmの厚さを持ち、同質の土でありながら混入物や粘性の違いで細分がされた。

- (1) 粘性やや有り、しまりは強い。小礫をまばらに含む。
- (2) 粘性は強く、しまりも強い。小礫はあまり含まれない。
- (3) 粘性は強く、しまりも強い。小礫は含まず土器片をまばらに含む。

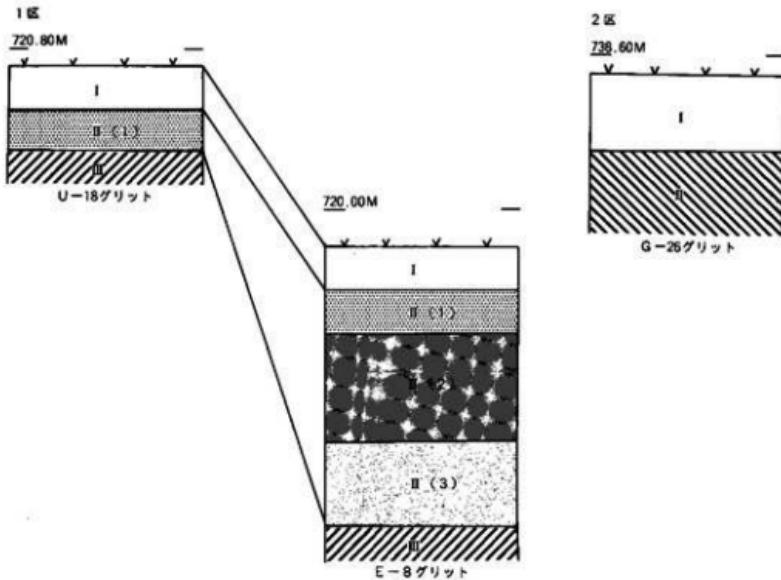
III層——黄褐色土層。粘性はあまりないが、しまりは強い。I・II層と比べ砂質であり、礫はほとんど含まれない。遺構確認面である。

2区

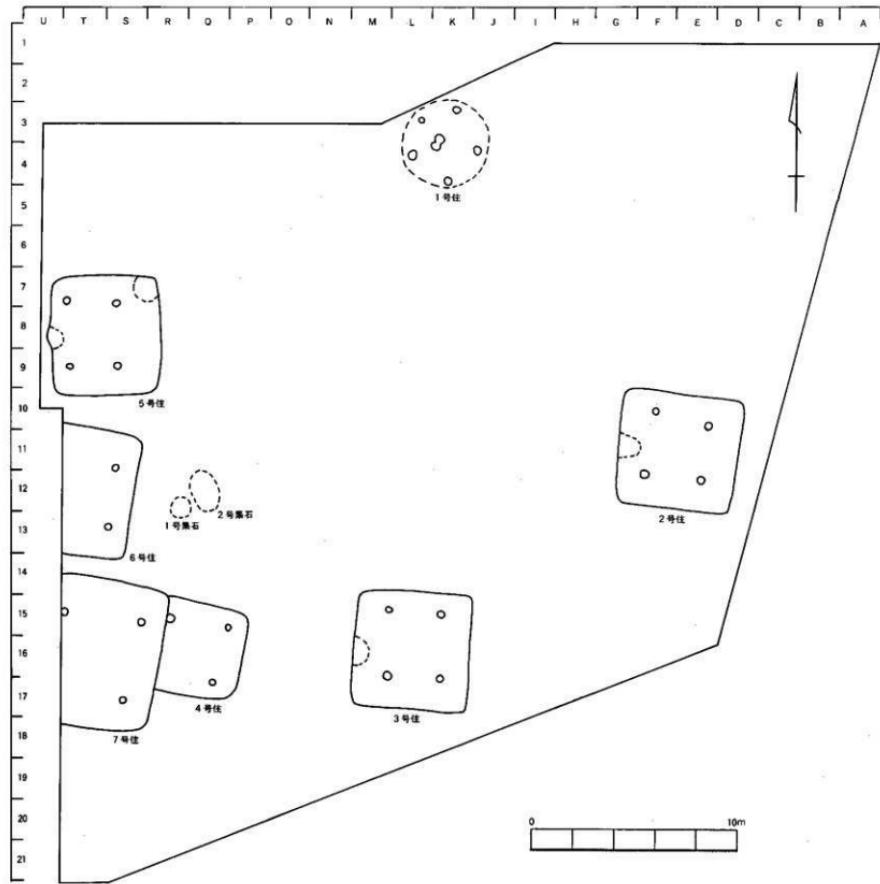
2区のような堆積状況は、町内における天童川の東西段丘上に普遍的にみられるものである。

I層——耕作土。黒褐色の腐植土で、現在は水田・畑地として営まれている。

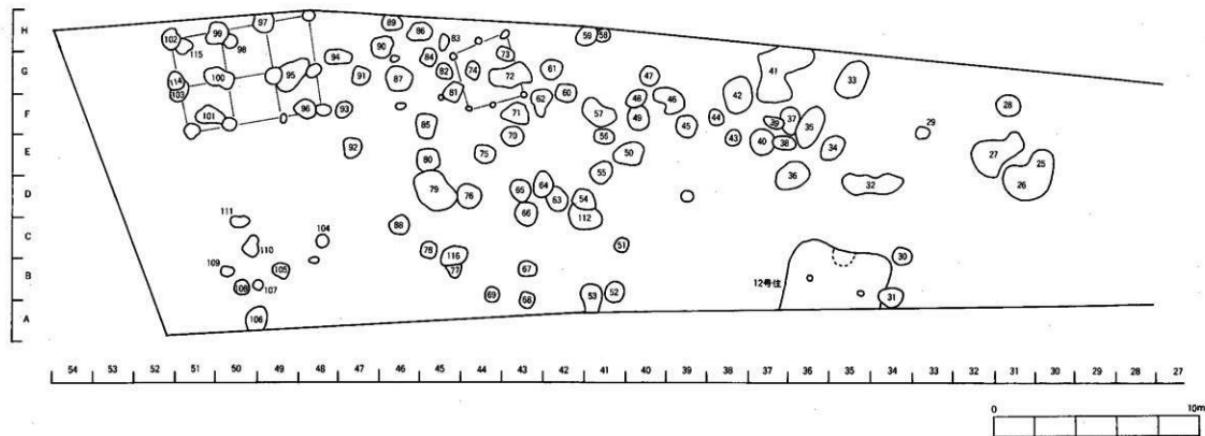
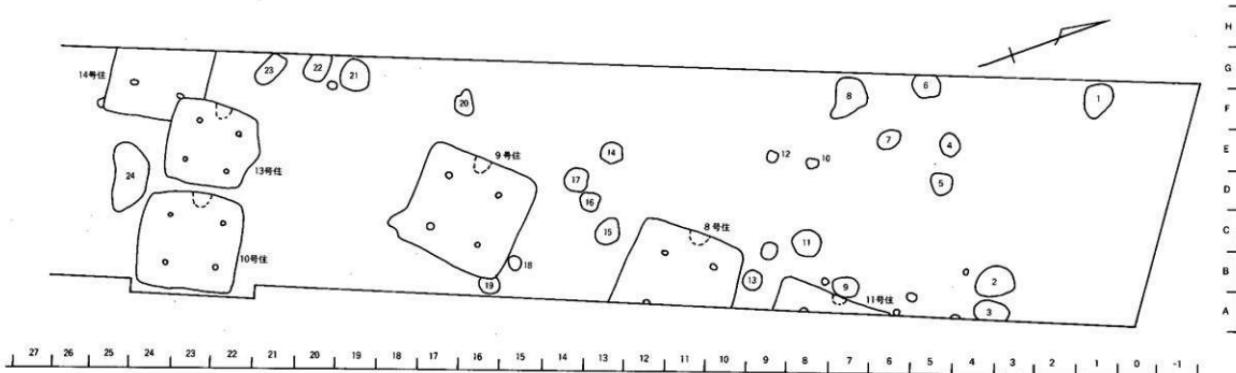
II層——黄色土層（ローム層）。粘性・しまりが強く、この層直上で遺構が確認された。



第5図 1・2区基本層序模式図



第6図 1区全体図



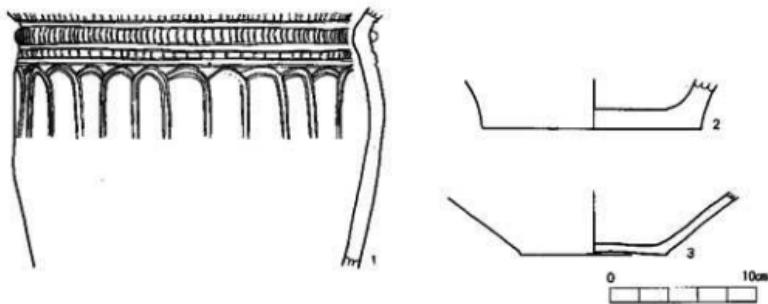
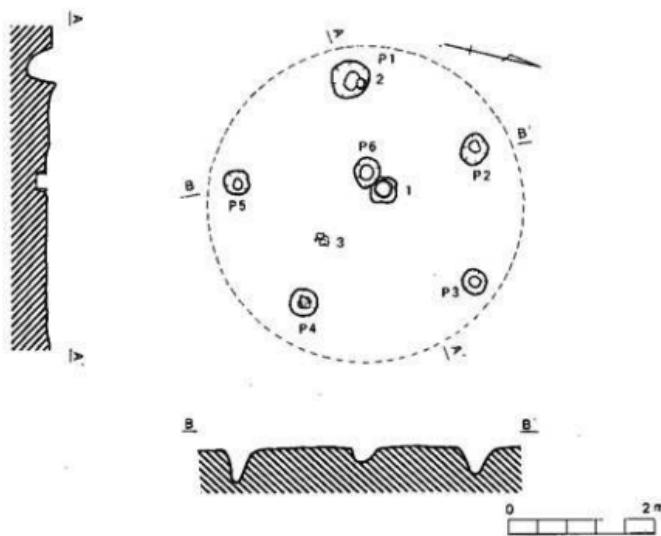
第7図 2区全体図 (数字のみは土壌番号)

第IV章 遺構・遺物

第1節 繩文時代

1. 住居址

1号住居址



第8図 1号住居址・出土遺物実測図

遺構（第8図） 本遺跡で検出された唯一の縄文時代の住居址で、1区北部J-3・4、K-2～4、L-3・4グリッドに位置する。住居址は、水田面より20cmの所で床面が確認され、壁は既になく、プラン確認に難行した。本址の発見された1区の北部は、かつてここ一帯に開田工事が行われた際に、土盤を大きく削平した箇所であり、住居址はその時に破壊を受けたものと考えられる。住居址の正確な規模・形状は不明であるものの、硬い床や柱穴が残っており、その範囲よりおよそ直径4.4mの円形を呈する形状の住居址と推測することができる。柱穴は、P₁ (52×52×34cm)、P₂ (43×38×35cm)、P₃ (34×32×38cm)、P₄ (38×36×35cm)、P₅ (37×34×51cm) の5本が検出し、ほぼ2mの等間隔で5角形を呈し、配置されている。

かは住居址のほぼ中央部に位置する埋甕かである。埋甕は、口縁部と胴下半部を欠いており、44×40cmの深さ18cmの小穴に納められ、内部には灰と炭化物を多く含む褐色土が詰まっていた。また、隣接する小穴（P₆）からは、炭化物を著しく含む黒褐色土を検出し、埋甕炉との何らかの関連性を伺わせている。

尚、床面は平坦で全域が硬く敲きしめられており、焼土や炭化物の散布が認められ、特にP₁集辺部にその状況が残っている。

遺物（第8図） 本址からの出土遺物は縄文土器だけで、石器やその他の遺物はみられなかつた。1は、埋甕として用いられた深鉢型土器で、口縁部と胴下半部を欠くものの、キャリバー型を呈するものと思われる。文様は、半截竹管状工具による沈線文で、口縁部から頸部にかけて縦位に、頸部には爪形隆帶文を、胴上位には連続する弧状懸垂文という文様構成である。2は、P₂より出土した深鉢の底部である。3は、外面に煤の付着が著しい浅鉢の底部である。

2. 土塙

遺構（第9～13図） 住居址と掘立建物址以外小穴址をすべて一括して、土塙と称することとした。土塙はすべて2区から検出されたものであり、合計116基を数えた。そしてその中で、96・97・99・100・102・114号の6基は、1号掘立建物址の柱穴であるため、欠番とするものである。また、116号土塙は中世土塙墓であり、その詳細については改めて後述することにする。その他の109基の土塙は、埋藏する遺物などから、縄文時代中期初頭の時期に属する土塙群として捕えることができよう。土塙の多くは、2区の南側、段丘の突端部に近い所に集中しており、北に向うに従いその数はまばらに分布していく（第6図）。このような分布状況を概観して、幾つかの土塙集合体に分類できるのではないかと考えられたが、本調査だけの状況から考えて、そのような分布をしているとは把握することはできなかった。

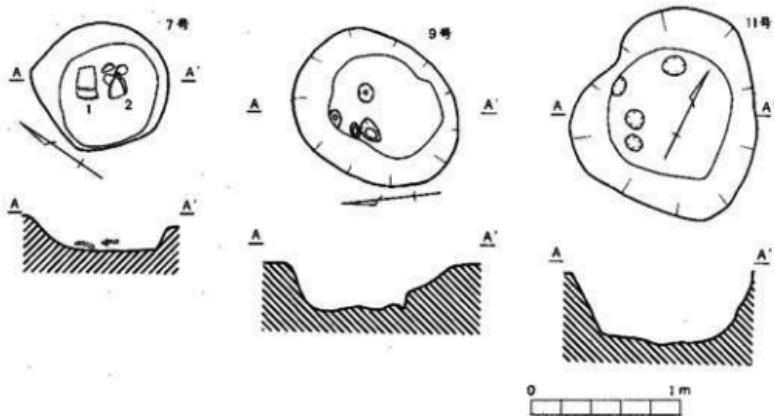
土塙の規模は、形状によってさまざまであるが、長径が最小のもので66cm、最大のものは372cmもあり、平均すると127cmである。深さは、平均して40cmである。

土塙の形状は、平面で円形（7・9・15号など）ないし梢円形（42・57・72号など）を呈す

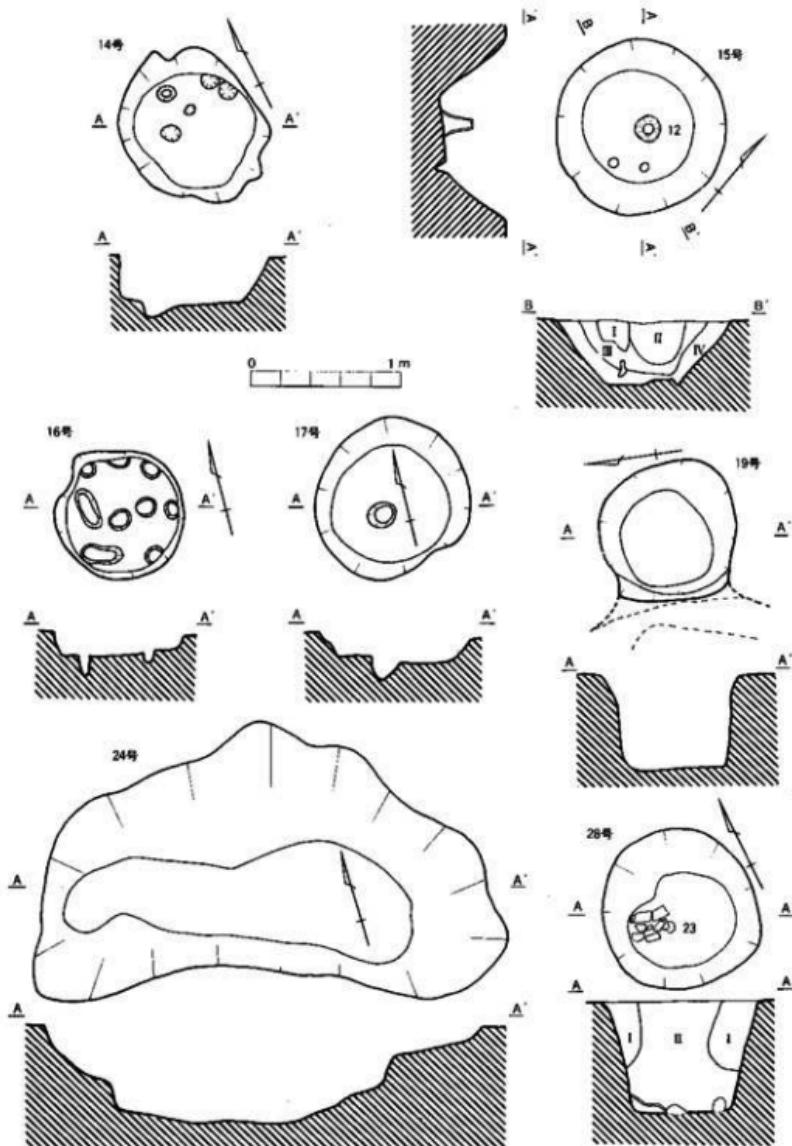
るものがほとんどであり、その他不整梢円形（79号など）を呈するものも幾つかみられる。底面形は、平面形に準じるもののがほとんどで、断面形は、土塙の掘り込み状況によって異なる。9・15・42号などは、確認面から底面にかけて緩やかな傾斜を持って掘り込まれるもので、断面形は逆台形ないし半円形を呈し、比較的深さの浅いものが多い。19・28・61号などは、確認面から底面へほぼ垂直に掘り込まれ、断面形が方形ないし長方形を呈するもので、比較的深さの深いものが多い。また、65・66・71号などは、掘り込みが垂直というよりもやや袋状に掘り込まれたため、断面形が台形ないしフラスコ形を呈し、平面積よりも底面積が大きく、深さは深いものが多い。

上塙の内部構造としては、単に掘り込みだけのものが主であるが、中には特種な特徴を有するものもみられる。9・11・14・16号などは、土塙の底面に数個の小穴を設けるものであり、17号のように底面中央部に1坑有するものもみられる。41・56号は、内部に拳大から人頭大の転石を混入するもので、覆土の中位から底面にかけて転石が出土する。その目的については不明であるが、人為的作用による転石の混入と考えられる。また、土塙の内部より土器や石器などの遺物を出土するものが多く、中には28・87号のように、1個体の土器がまとまって底面直上に出土するものや、15号より出土した深鉢（12）のように、底面直上に口縁部を下にして土器を伏せた状態で出土するものもみられた。更に、7・42・66号のように、数個体の土器を出土するものもあり、特に66号は、6個体もの土器を出土しており、壁際より出土した3個体の内2は3の中に収納された状態で出土している。これらのまとまった土器は、埋設を意識しているものと考えられる。

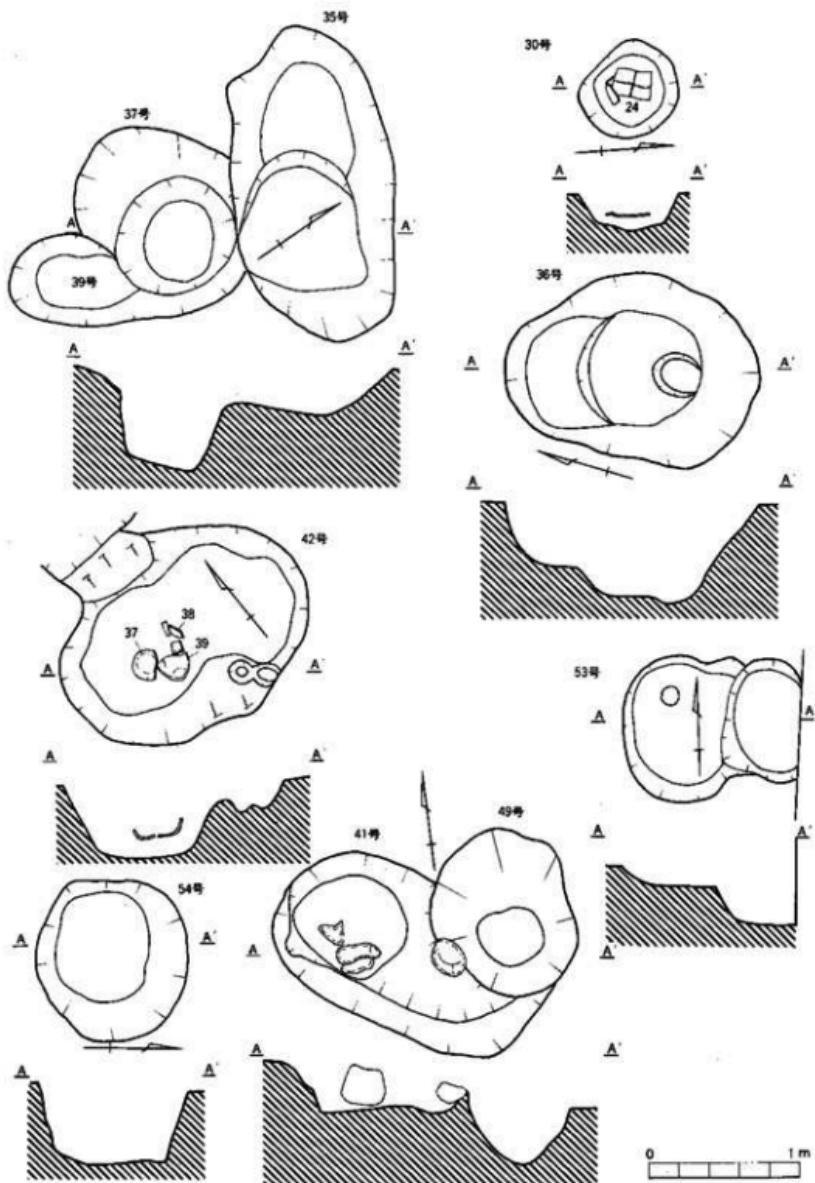
尚、各土塙の詳細については付表に記してある。



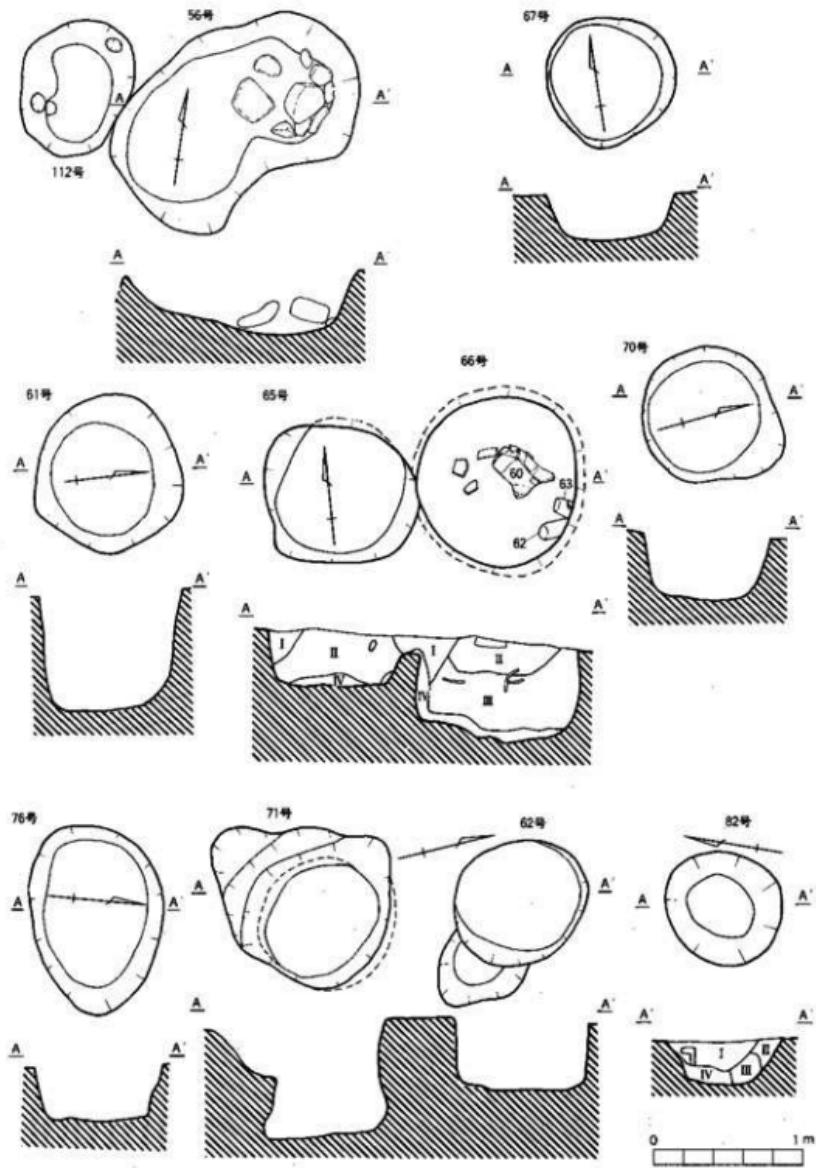
第9図 土塙実測図1



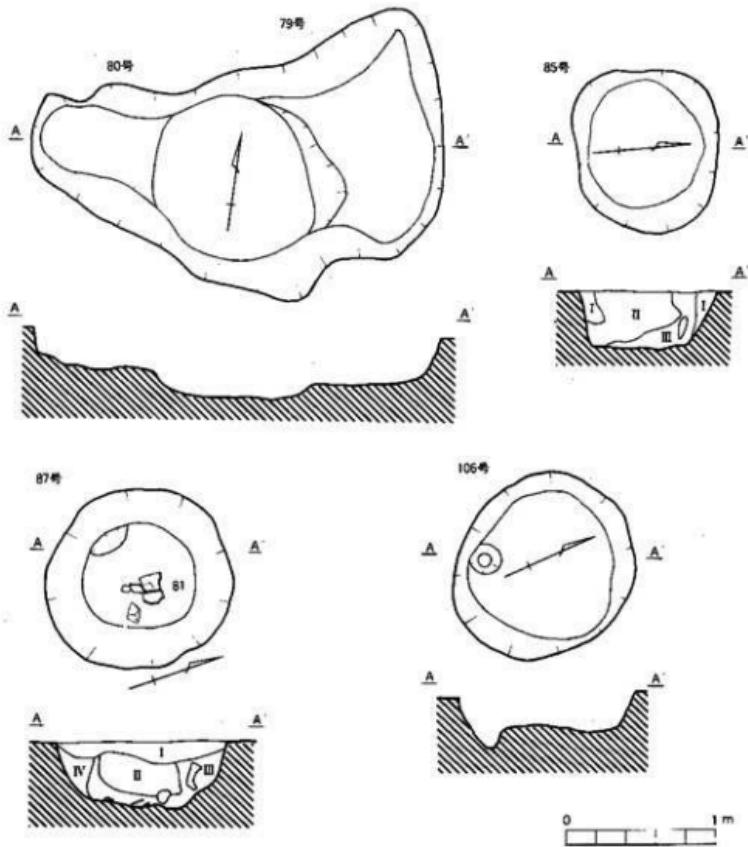
第10図 土塙実測図2



第11図 土塙実測図 3



第12図 土地実測図 4



第13図 土地実測図 5

遺物

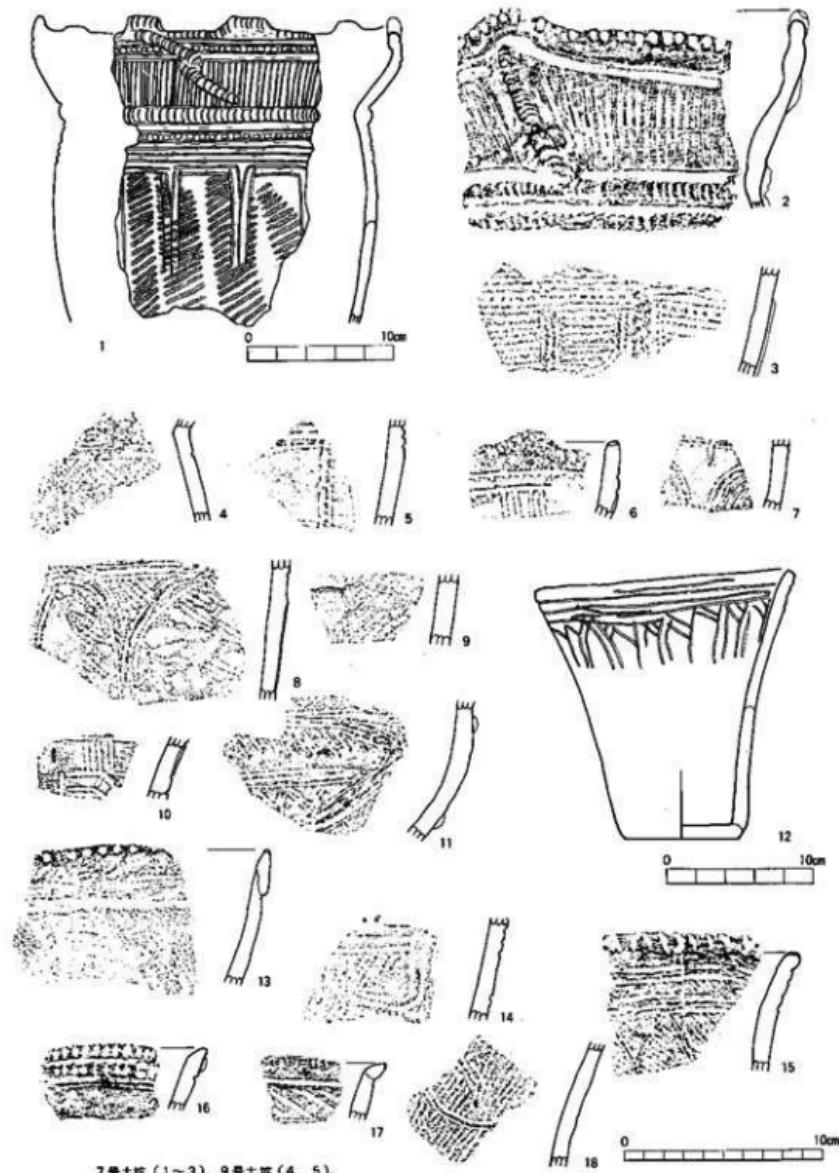
土器（第14～18図） 土塙内より出土する土器においては、そのほとんどが器形の判別不可能な細片であり、完形もしくは復元可能なものが少なく、特定の土塙に限られて出土するようである。出土した土器は、その独特な施文方法からの文様構成により、縄文時代中期初頭の時期に位置づけられる梨久保式の特徴を著しく見せるものである。器種は、キャリバー型と同様型を呈する深鉢がその主流をしめ、数量は少ないが浅鉢やミニチュア土器の出土も認められる。文様については、半截竹管状工具による沈線文をその基本としており、沈線文による幾何学的な文様構成を行うものと、縄文を地文として沈線文とのコンビネーションによるものとに大別することができるが、両者の間には縄文が施文されるかされないかの違いはあるものの、基本

的に形状や施文パターンにおいて大きな差異は認められない。

キャリバー型を呈するものは、1、23、81にみられるように口縁部は内湾して立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲して胴部はふくらみを持つものと、60、80のように口縁部は内湾するものの頸部は屈曲せず胴部はまっすぐ外開して立ち上がるものとがある。まず前者においてみてみると、口縁部はゆるやかな波状口縁、もしくは小突起を有し、口唇部には爪型文か刻み目を、頭部にかけては縦位の平行沈線と爪型貼付文、頸部には爪型隆帯文、胴上位にはコの字もしくはY字、弧状懸垂文による文様構成を行うもの（1、2、4、7、8、24、29、40、41、47、48、55、57、78、81）が特に多くみられ、胴部には1、4のように縄文を施すものと47、81のようにそうでないものがある。また、口縁部から縄文を地文として多用し、縦線文（26、45）、横線文や刺突を施すもの（6、32、49、54、65、75、77、82）もみられる。24は、ゆるやかにふくらむ胴部のみの大型品で、弧状懸垂文と粗雑な格子目文による構成で、大粒の結節縄文が地文として施されるが、垂下する結節のみが認められる。31は、口縁部に横位沈線文区画による縦位平行沈線が施される小型品で、他は施文されない。19、20、23は、爪型隆帯文を多用するもので、特に23は4単位を呈する波状口縁に円形爪型貼付文を、胴部には懸垂する貼付文により文様帯を4区分し、U字、弧状、横位による2つのパターンからなる幾何学的文様構成を行うものである。次に後者であるが、60は4単位からなる波状口縁に棒状貼付文と橋状貼付文がみられ、器面は結節R L縄文が施される。それとほぼ同類のものとして、79は同じく結節R L縄文が施される大型品である。80は60と同じく4単位からなる波状口縁と棒状貼付文を有し全面に縄文が施されるものの、押し引き文や爪型文の他に、胴部にみられる懸垂、U字、L字、菱形などの組み合わせによる文様構成が行われる。更に60は、底部がやや張り出し八の字状に立ち上がるもので、71も同じ立ち上がりを見せる。

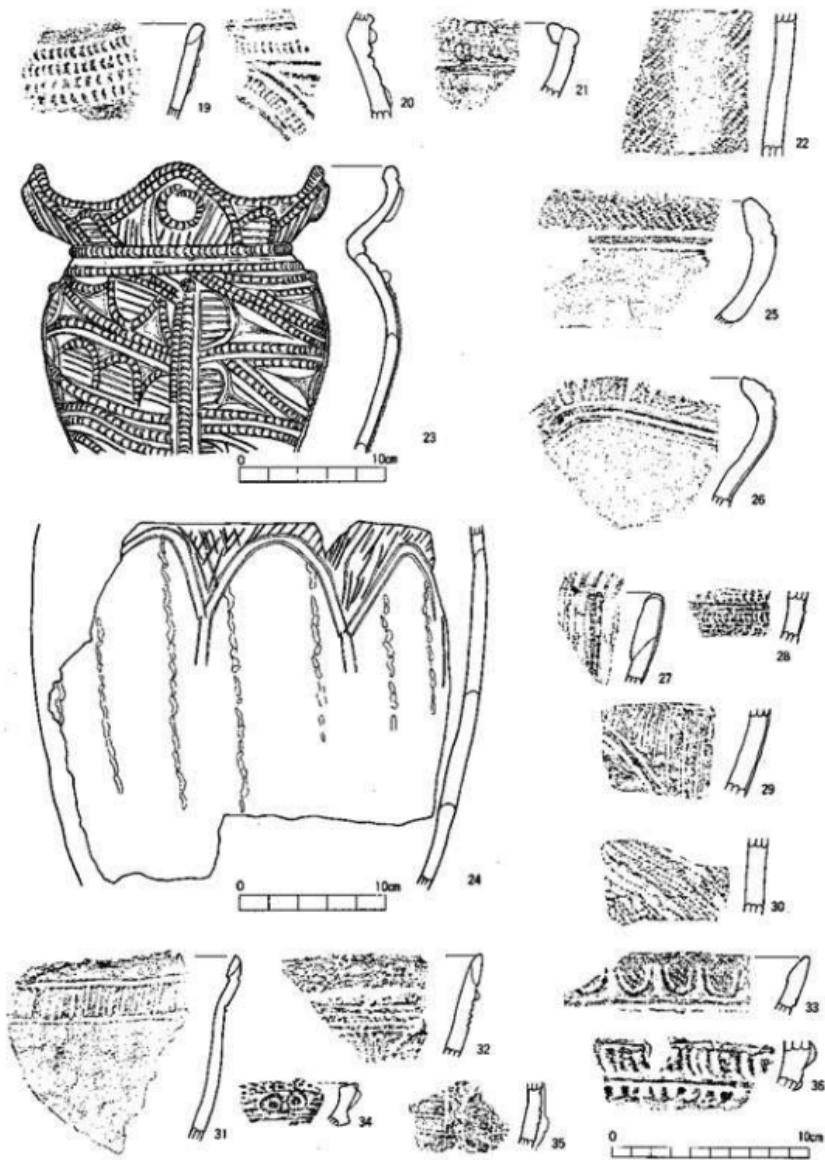
同筒型を呈するものとしては、12、15、62、64が上げられ数量は少ない。12はやや反りぎみに外開する口縁部を有する形状で、文様は横位とY字状懸垂文による沈線文構成であるものの、他の土器の施文方法と比べてかなり粗雑であり、形もややゆがんでいる。15は、器形、文様構成で12と類似するものの縄文を地文としている。62は、ほぼまっすぐに外開する形状の小型品で、全面にR L縄文が施される。64は、地文にL R縄文を施し、口唇部には刻み目を有し、一定間隔に横走する沈線に刺突が連続する。

浅鉢をみてみると、明らかに浅鉢とされるのは37の1点のみで、底径が広くやや反りぎみに外開する。比較的安定性のある形態をする小型のものである。文様は、W字、菱形文が交互に描かれ、そして口縁部、体部下半部やW字、菱形文、内部に、格子目、横位、縦位の細線文による施文が行われる。また42は、唯一出土しているミニチュア土器である。上部は欠損しているため形状は不明であるが、横位、縦位の沈線文による構成が行われる。



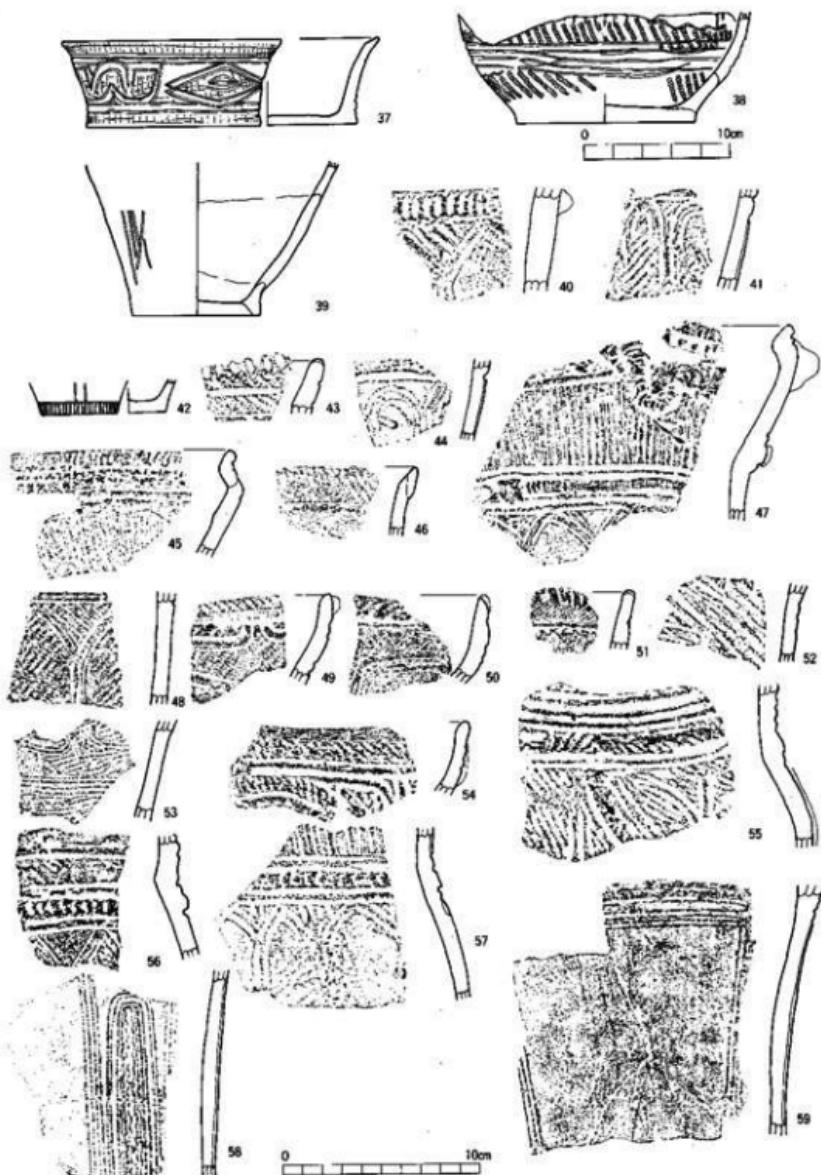
7号土坑（1～3）、9号土坑（4、5）、
11号土坑（6～9）、14号土坑（10）、15号土坑（11、12）、
16号土坑（13、14）、17号土坑（15～18）

第14回 土坑出土土器実測図1



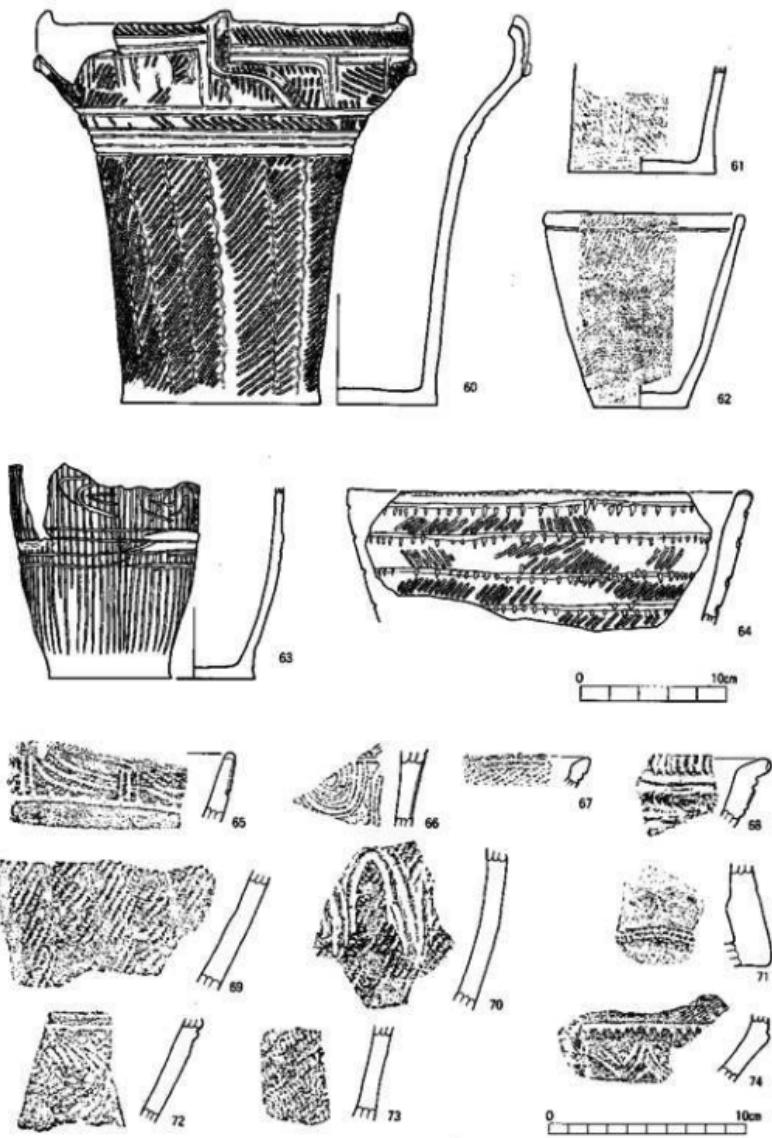
19号土塙 (19.20)、24号土塙 (21)、28号土塙 (22.23)、30号土塙 (24)、35号土塙 (25)、36号土塙 (26~30)、37号土塙 (31~36)

第15図 土塙出土土器実測図 2



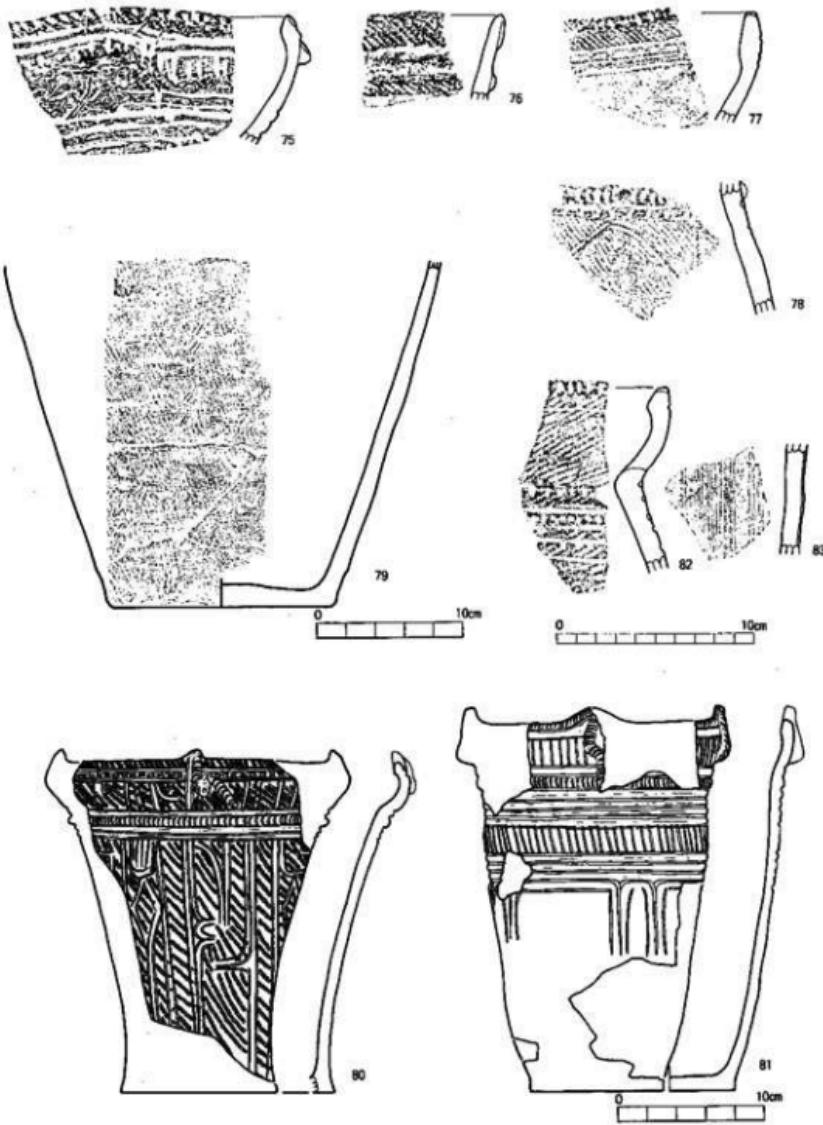
42号土埴 (37~39), 46号土埴 (40), 53号土埴 (41), 54号土埴 (42), 57号土埴 (43, 44), 61号土埴 (45~48),
62号土埴 (49~53), 65号土埴 (54~57), 66号土埴 (58~59)

第16図 土埴出土土器実測図3



66号土塙(60~64)、67号土塙(65,66)、70号土塙(67~71)、71号土塙(72)、75号土塙(73,74)

第17図 土塙出土土器実測図 4



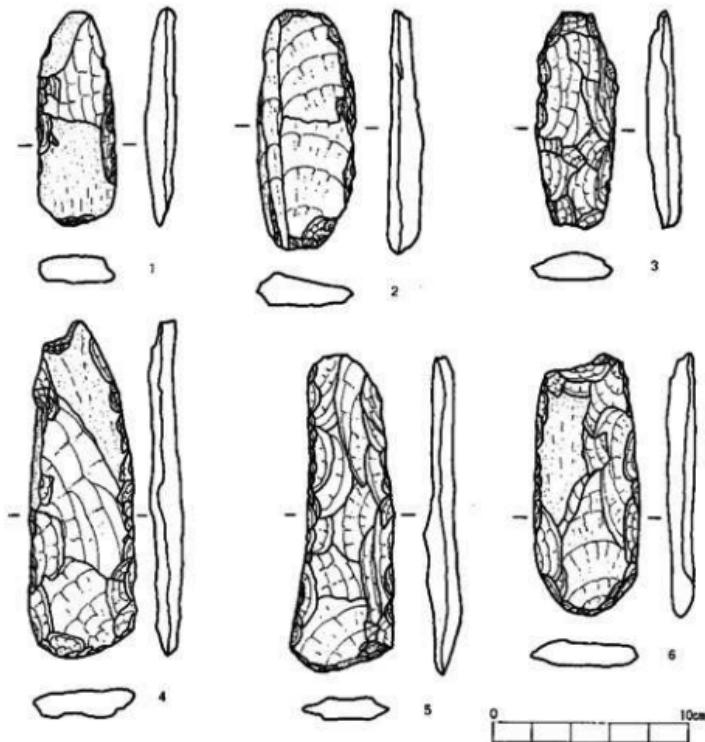
78号土坡 (75), 82号土坡 (76~79), 85号土坡 (80), 87号土坡 (81), 106号土坡 (82, 83)

第18图 土坡出土土器实测图 5

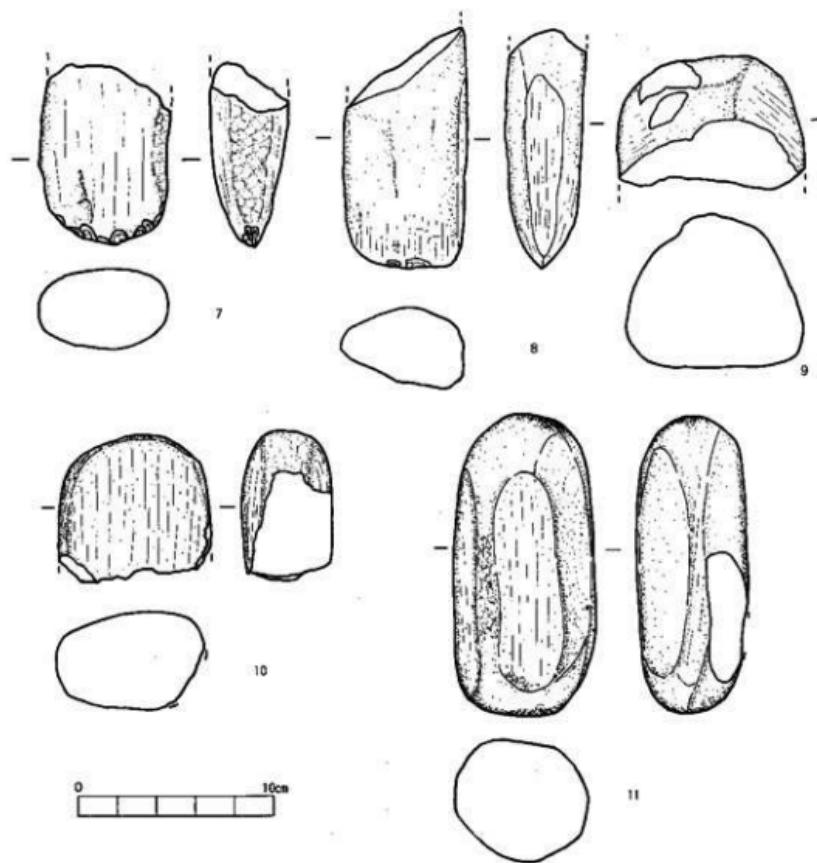
石器（第19・20）

土塙より出土した石器の総数は比較的少なく、また器種も打製石斧・磨製石斧・磨石だけであり、黒耀石の剥片は多数出土したもの、製品と思われるものは1点の出土もみられなかつた。石器は各器種ごとに分析し、その特徴について後述するものである。

打製石斧（1～6） 出土した6点の打製石斧は、すべて短冊形に属する。1は、表面に自然面を残し、刃部から表面にかけて磨耗が認められる。2は、側縁部に細かな調整が行われないものの、頂部・基部とも刃部としての使用痕がみられる。3は、使用度が激しいためか、刃部が後退する。4は、板状の剥片を素材とし頂部と上部側縁部は未調整であるものの、刃部は使用痕が残る。5も板状の剥片を素材とし、丁寧な調整が行われて薄く、刃部は直刃に近い。6は、刃部が剣先状になり、側縁部にかけて著しく磨耗しており、使用度の激しさを思わせる。石質は、錆泥岩・粘板岩・砂岩である。



第19図 土塙出土石器実測図1



第20図 土城出土石器実測図2

磨製石斧（7・8） 出土した2点の磨製石斧は、いずれも乳棒状磨製石斧に属するもので、2点とも中央より上部を欠損している。7は、使い込みが激しく、著しく刃部の剥離がみられ、側縁部は着柄痕と考えられる打痕が認められる。8は、鋭い刃部を作出するもので側縁部は面取りし、また着柄痕と思われる打痕が認められる。石質は、砂岩である。

磨石（9～11） 9は、断面三角形の石材の各面に磨痕を有するが、大部分を欠損する。10は、断面楕円形の石材の表裏面に著しい磨痕を残す。11は、円柱状の石材を用い、磨面は面取りがなされる。石質は、安山岩・花崗岩・砂岩である。

3. 集石

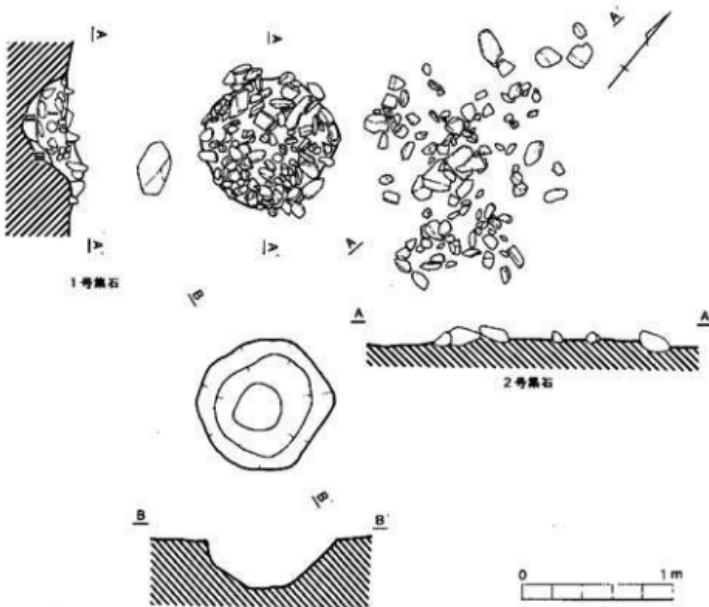
1号集石

遺構（第21図） 1区の西部、Q—12、R—12グリッドに位置する。平面は95×85cmの円形をなし、深さは36cmで断面は二段構造で底面に達する。摺り鉢状を呈する。上面から内部にかけて、拳大の石が多数混入しており、石のほとんどが赤色化したり、半割していたりするもので、明らかに焼けた状態を示している。内部の覆土は3層からなり、Ⅰ層は茶褐色土層で石はすべてこの層中に含まれる。Ⅱ層は炭化物を含む黒褐色土層、Ⅲ層は炭化物をまばらに含む暗茶褐色土層である。また、覆土中に焼土の混入は認められなかった。

このような状況から、本集石はいわゆる集石炉と判断されるものである。尚、集石中より遺物の出土は認められなかった。

2号集石

遺構（第21図） 1区の西部、Q—12・13グリッドに位置し、1号集石に隣接する。本集石



第21図 1・2集石実測図

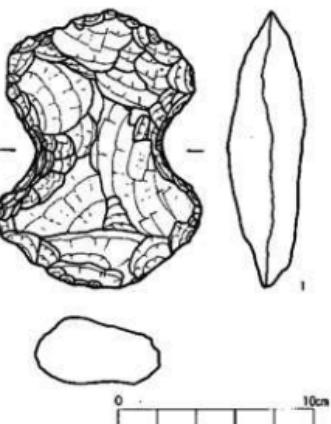
は、拳大から人頭大の右が地山（1区基本層序第V層）直上に、無造作に散らばった状態で検出された。石は、約30%のものが1号集石中より出土した石と同様に、赤色化した焼けた状況を示している。

遺物（第22図） 集石間からは、縄文上器と土師器が混在して出土しており、また打製石斧（1）や黒曜石片の出土がみられる。

1は、側縁部に大きく抉りをいれる分鋸型の打製石斧で、砂岩製である。

4. 遺構外出土遺物

土器（第23図） グリッド及び1号住以外の住居址覆土に含まれていたものを一括したものである。



第22図 2号集石出土石器実測図

II縁部形態よりキャリバー型を呈するものが多く、波状口縁を呈するもの（7～11）と素口縁のもの（3～6・12・17）が認められる。前者をみると、7と10は縄文を地文としており、特に10は口唇部に刻み目を有し、三角沈線と連続刺突文が施される。8と9は波状口縁の頂部にやや大きな刻みが入るもので、9は縦位に棒状工具らによる押し引き文が施された後、内部に連続する刺突がみられる。11は爪形文を多用する。後者は、全て口唇部に爪形文を用いており、4・6・12は瓦状押し引き文を、3は縦位平行沈線文を、5は縦・横位沈線文による組み合わせによるものである。特に1は、本調査で出土した一番の大型品で、4号住床下より石核（第25図10・11）を伴って出土したものである。地文として結節RL縄文を施し、爪形文・方形沈線区画の渦巻き文・U字文・そして頸部から連続する弧状懸垂文による文様構成が行われる。

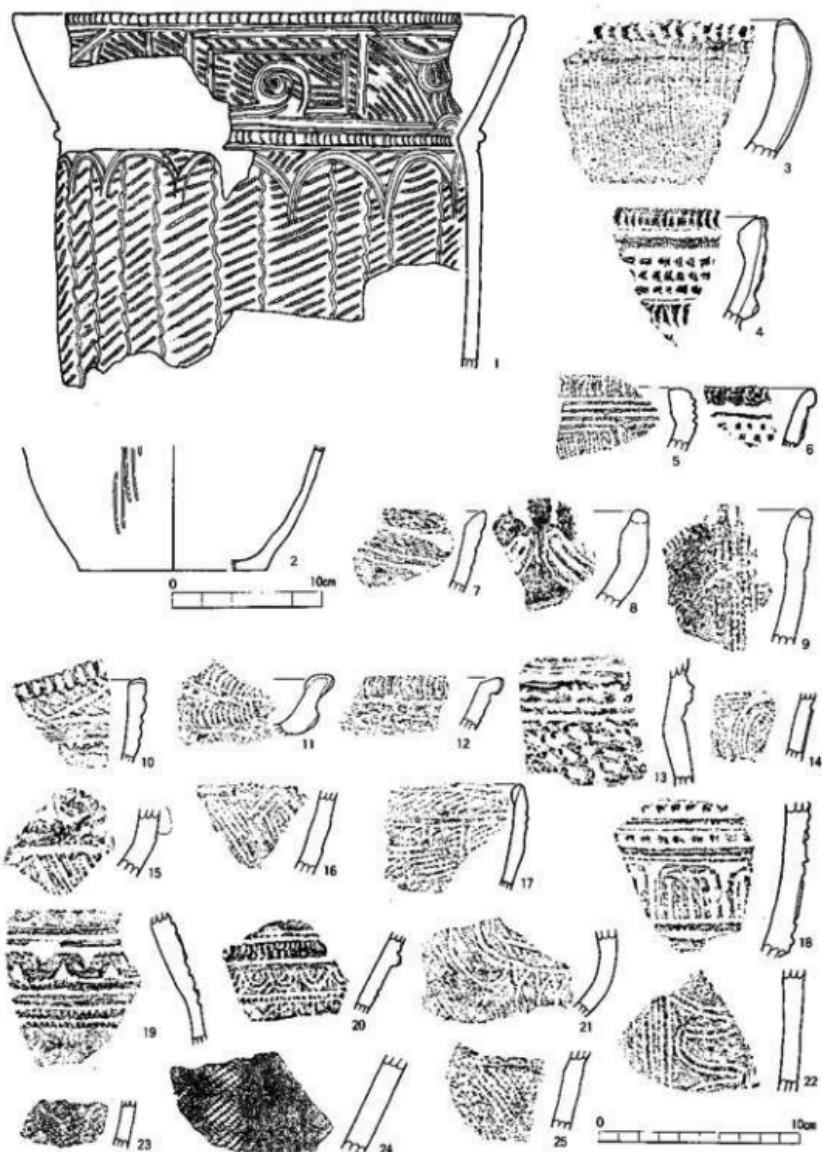
胴部文様帶についてみてみると、弧状・Y字懸垂文（14・15）、V字文（16）やU字文区画の横位沈線文（18）、沈状文？（19）、連続U字文（20）、Y字文（21）、弧状懸垂文（22）などの沈線文が多くみられる。また縄文も、器面を埋めるもの（23・25）や無文部を有するもの（24）もみられる。尚13は、連続する押し引き刺突文である。

石器（第24・25）

石鉋（1・2） 1は、基部に抉りが入る鉈型鉋である。2は、基部の両端を鋭く作出する凹基無茎鉋であり、先端に脱さはみられない。石質はともに黒曜石である。

石匙（3） 3は横型で直刃を有するもので、刃先が欠損するものである。石質はチャートである。

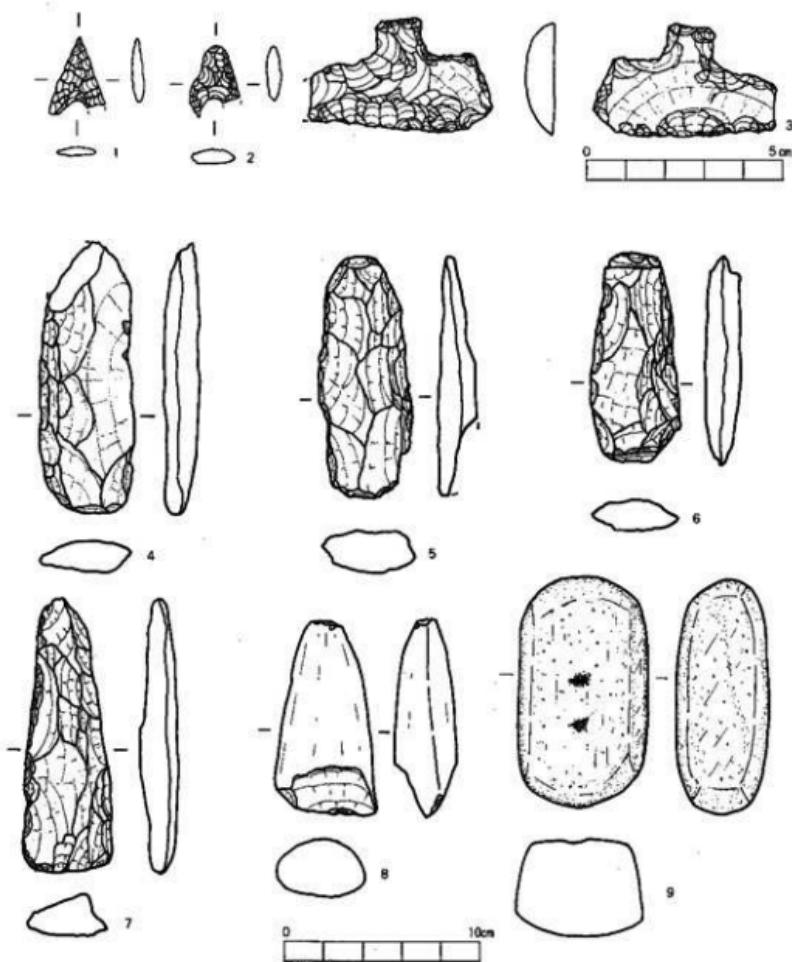
打製石斧（4～7） 4・5は短冊形に、6・7は撥形に属する。4は、あまいJ字な成形



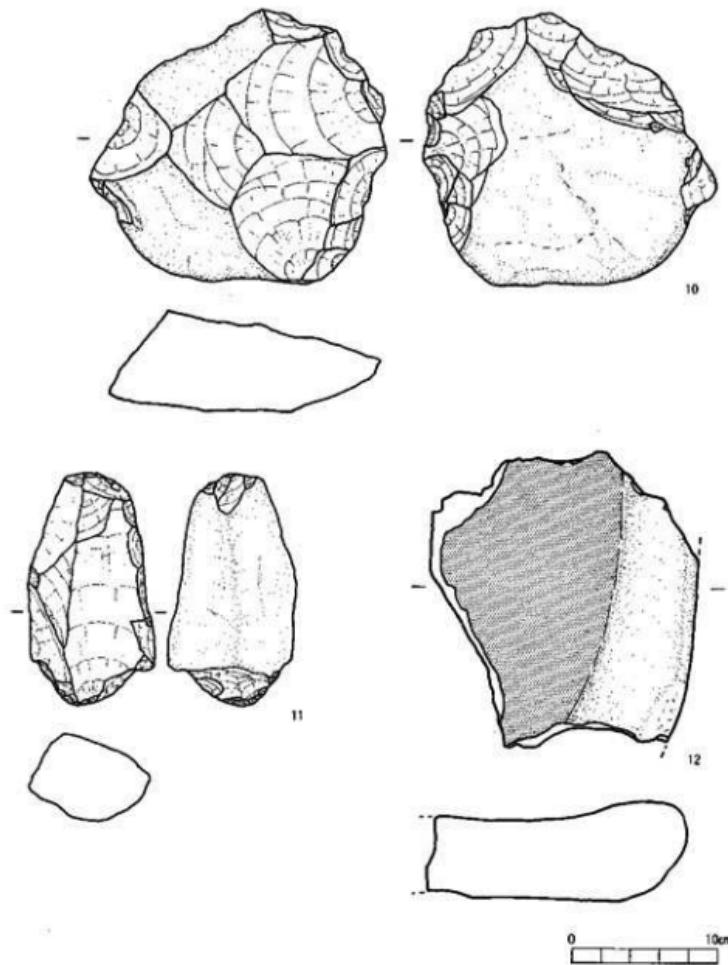
第23図 造構外出土土器実測図

はなされないが、刃部の摩滅はみられる。5は、使い込みが激しいためか、刃部から裏面にかけて大きく剥離している。6は、側縁部に丁寧な調整を加えている。7は、丁寧な調整で作り出し、刃部は直刃を呈する。石質は、砂岩・泥岩である。

磨製石斧（8）8は、乳棒状磨製石斧で、使用度が激しく刃先は後退し、斜刃状を呈する。石質は、緑泥岩である。



第24図 遺構外出土石器実測図1



第25図 遺構外出土石器実測図2

磨石（9） 9は、断面楕円形の石材を丁寧に面取りして磨面を作り出し、台形状に変形させる。また表面の中央部に、2ヶ所の凹痕を有する。石質は、安山岩である。

石核（10・11） 10・11は、4号住床下より出土した23—1の土器と共出するもので、強い打撃によって大きく剥ぎ取りが行われている。石質は、砂岩である。

石皿（12） なだらかに凹む石皿の残欠で、楕円形を呈するものと思われる。裏面には凹痕がみられ、火を受けて赤色化する。石質は、花崗岩である。

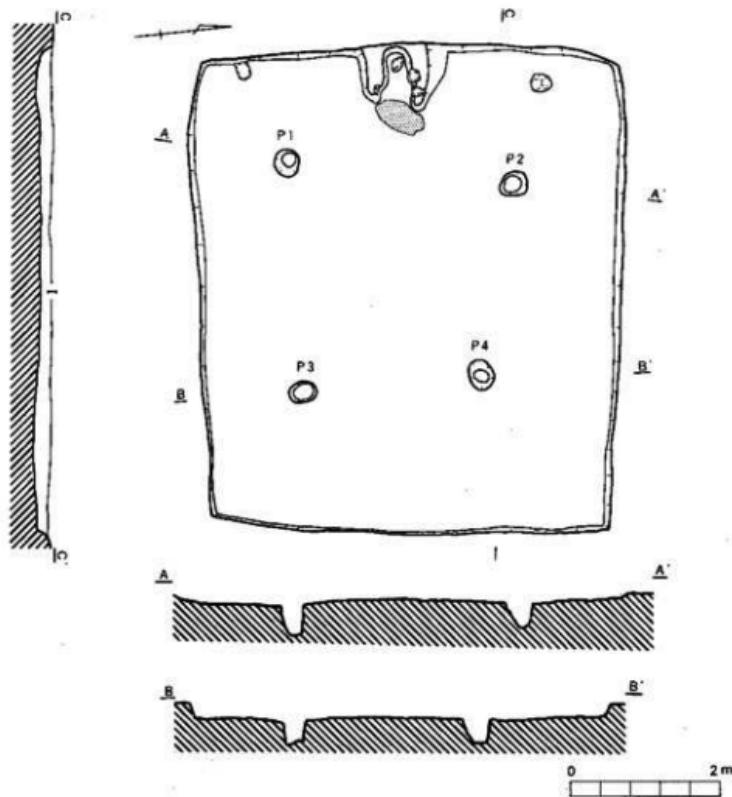
第2節 古墳時代末～奈良時代

1) 住居址

2号住居址

造構（第26図） 1区の東側、D—10～12、E—9～12、G—9～12グリッドに位置する。東西6.7m、南北5.8mの規模を測り、ほぼ方形を呈する。主軸はN—81°—Wを示し、壁高は北壁14cm、南壁13.5cmで、床面は硬く良好である。主柱穴は、P₁ (40×34×40cm)、P₂ (42×36×34.5cm)、P₃ (38×30×34cm)、P₄ (44×34×36cm) の4穴方形配列で、円形プランである。本住居址の覆土は、粘性の強い黒褐色土層の1層のみであった。

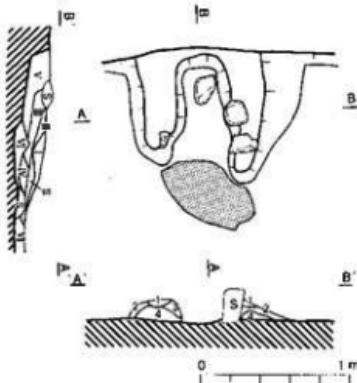
カマド（第27図）は西壁の中央に位置し、石材を4層からの粘土（1—茶褐色粘土、2—黄



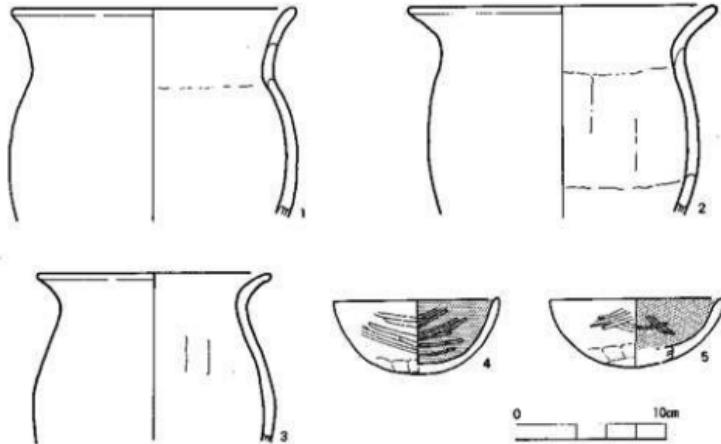
第26図 2号住居址実測図

褐色粘土、3—焼土混りの黄褐色粘土、4—黄褐色粘土)で被覆して袖を構築している。石芯粘土カマドである。内部の覆土は6層からなりI層は茶褐色土層、II層は焼土をまばらに含む黄褐色土層、III層は焼土を多く含む茶褐色土層IV層は赤褐色の焼土層、V層は茶褐色土層、VI層はしまりが強い茶褐色土層である。また、カマドの前方部床面に焼土の散らばりがあり、3個体の土師器の壺の破片がまとまっていた。

遺物(第28図) 土師器は壺(1~3)、环(4・5)が出土しており、出土量は多く須恵器も出土しているものの、岡化しうるものは少なかつた。1~3の壺は、口縁部が短く外反し、頭部はゆるやかに屈曲して胴部は球状にふくらむ形状で共通性を持つ。4・5の环は、丸底を呈する形状で、内外共ヘラミガキが施され、底部はヘラケズリされる。また内面は、黒色処理が施される。須恵器では岡化できなかったが、蓋受けを有する环の蓋の破片が出土している。



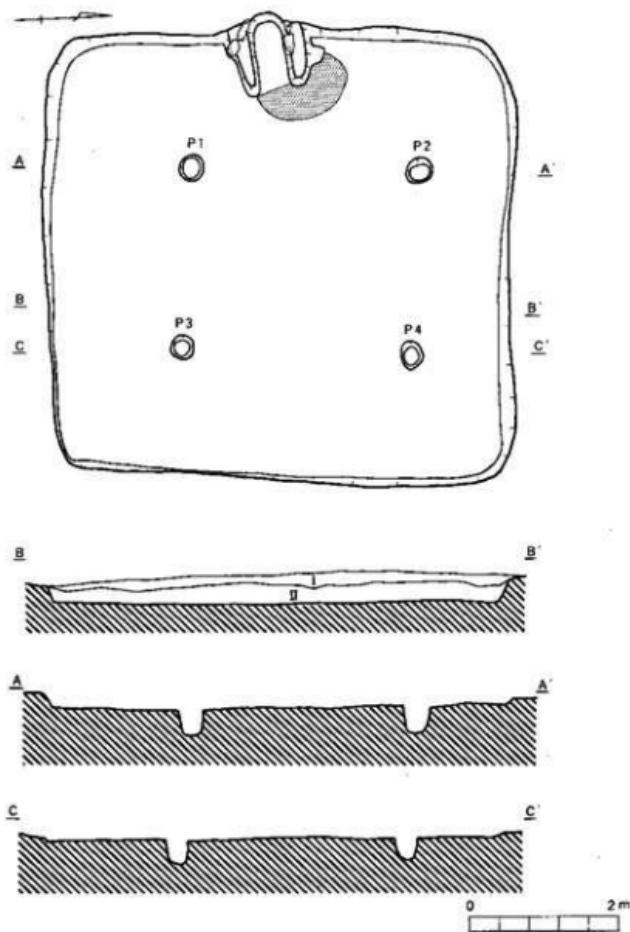
第27図 2号住居址カマド実測図



第28図 2号住居址出土遺物実測図

3号住居址

造構（第29図） 1Kの南側、J—15・16、K—14～17、L—14～17、M—14～17グリッドに位置する。主軸は、N—85°—Wを示し、東西6.4m、南北6.2mを測り、隅丸方形を呈する。壁高は、西壁が30cmで東壁が15cmを測り、地形的に西侧から東側へと傾斜をしているため、壁



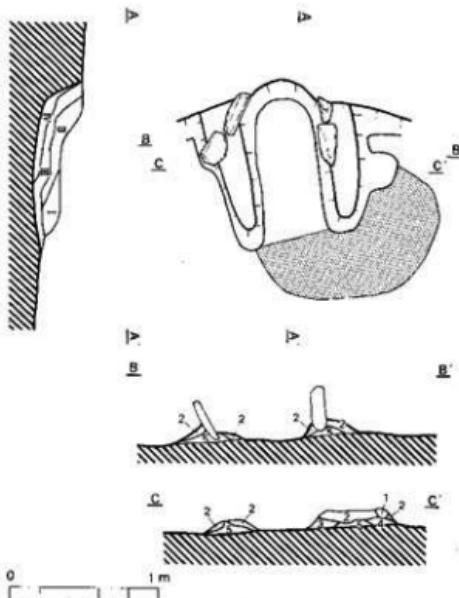
第29図 3号住居址実測図

高の差が認められる。主柱穴は、
 P₁ (35×32×26cm)、P₂ (38×
 32×26cm)、P₃ (33×29×35cm)、
 P₄ (38×37×26cm) の4本方形
 配列で、プランは円形を呈する。
 覆土は2層からなり、I層は小
 粒をまばらに含む暗茶褐色土層、
 II層は茶褐色土層で、しまりは
 ややみられる。

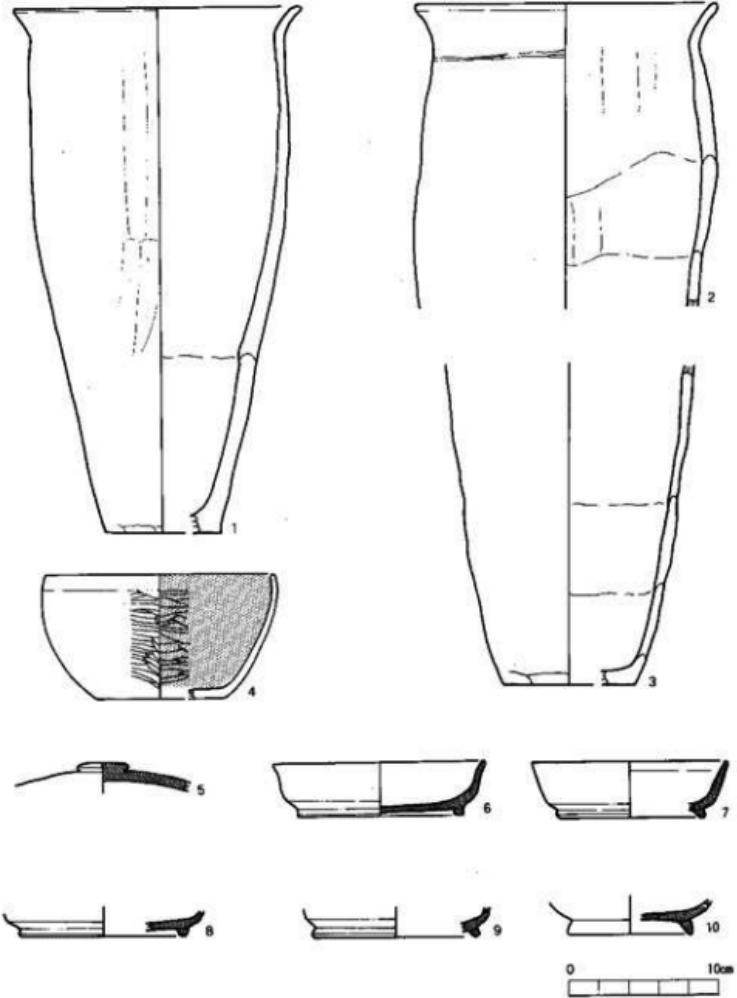
カマドは、西壁の中央部に位
 置する。石芯粘土カマドであり、
 既に、半壊状態にある。芯石は、
 柱状というよりも平石に近い石
 材を用いており、壁際から各袖
 に2個づつ立てられ、それを5
 層からなる土や粘土。(1—ロー
 ム、2—ローム粒子や小礫を含
 む茶褐色上層、3—暗茶褐色粘土層、4—茶褐色粘土層、5—黄褐色粘土層) で被覆している。
 また覆土は、I層が小砾を含む茶褐色土層、II層が焼土を多く含む茶褐色土層、III層が焼土を
 含まない茶褐色土層、IV層が小砾を多く含む暗茶褐色土層である。

尚、床は全体的に軟弱であるが、カマド集辺部は硬く敲きしめられており、焼土の散らばり
 が認められる。

遺物(第31図) 土師器は甕(1~3)と鉢(4), 須恵器は蓋(5)と坏(6~9), 灰釉
 陶器の碗の出土がみられ、床面よりの出土は少なく、覆土中からの出土がほとんどである。1
 の甕は、短く外反する口縁部からほぼ「く」の字に頸部が屈曲し、ふくらまず、まっすぐ底部
 に移行する長胴甕で、外面はヘラナデが施され、その痕跡が認められる。2の甕も1と同じく
 長胴甕であり、内面にヘラナデが施されその當て具痕が残る。4の鉢は、内湾して立ち上がる
 形状をし、内外面共丁寧なヘラミガキが施され、特に内面は黒色処理がなされている。5は、
 宝珠形のつまみ部を有する須恵器の蓋である。6~8は、高台付の坏で、底部回転ヘラ切りの
 後、台部を取り付けたものである。10は、灰釉陶器の碗で、混入品である。尚、固化した須恵器
 は、胎土・焼成・色調などの特徴から、美濃須恵器窯製品と考えられる。



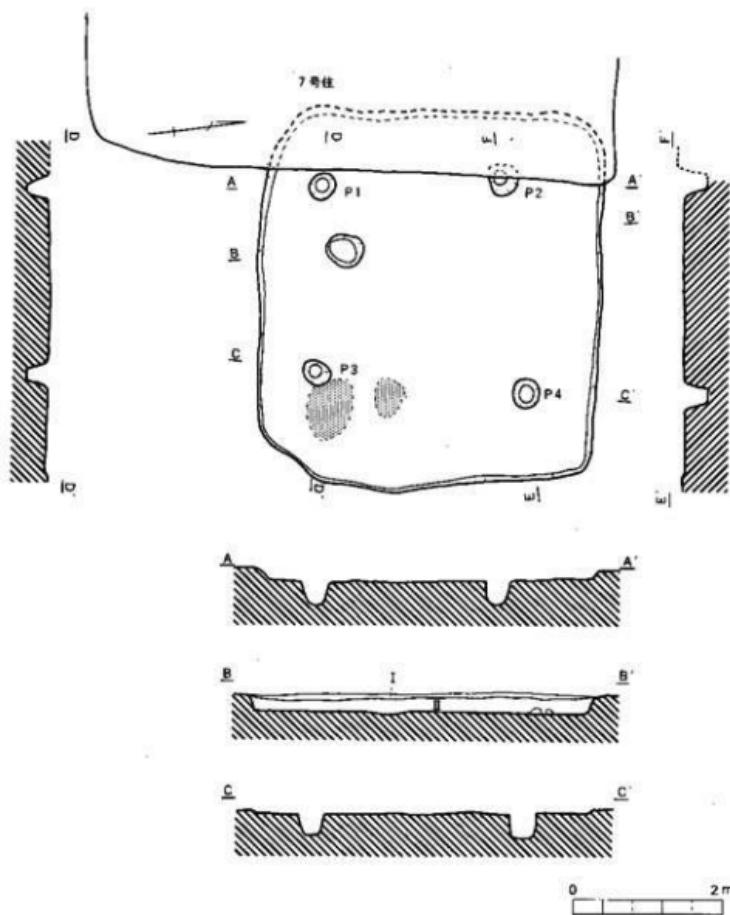
第30図 3号住居址カマド実測図



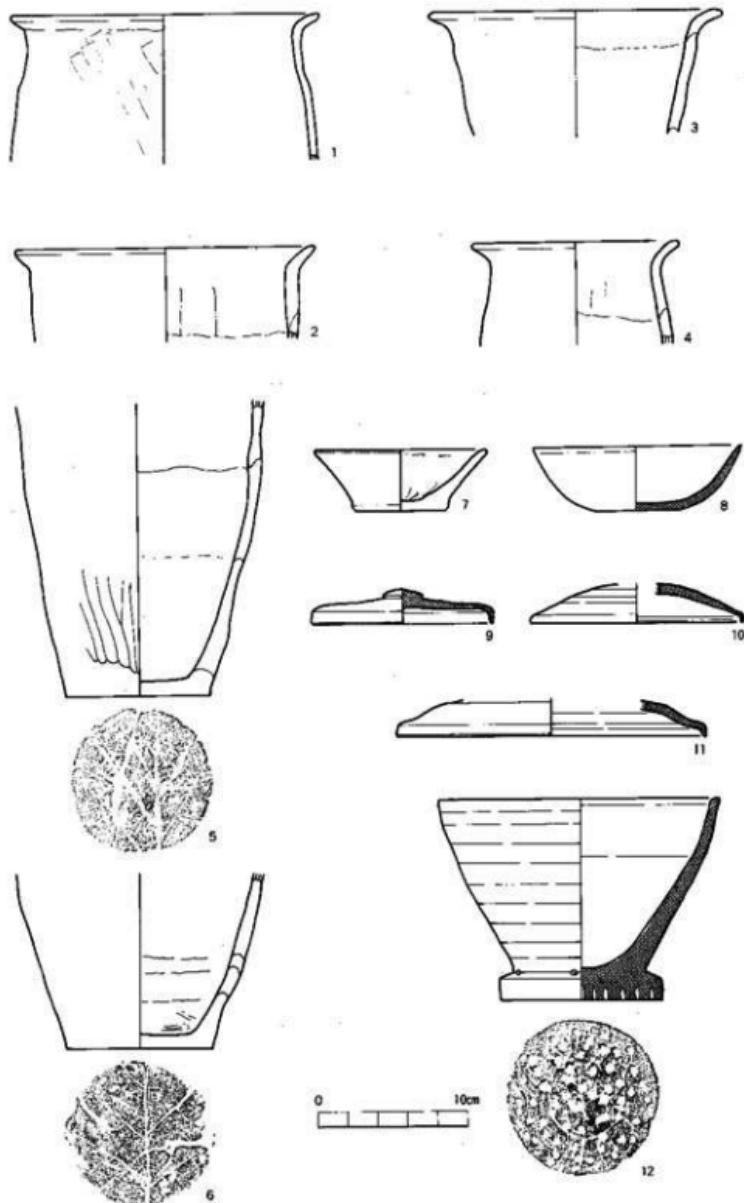
第31図 3号住居址出土遺物実測図

4号住居址

造構（第32図） 1区の南西部、P-15~17、Q-15~17、R-15~17グリッドに位置し、住居址の西側は7号住居址に切られる。N-73°Wに主軸を示し、南北4.7m、東西は推定5.2mを測り、隅丸方形を呈する。壁高は、上部が擾乱されているためか、プランがはっきりとせず、確認できた時点では南壁15cm、北壁5cmであった。主柱穴は、P₁ (39×32×30cm)、P₂ (44?×39?×33cm)、P₃ (39×31×30)、P₄ (40×35×33.5cm) の4方形配列で円形を呈する。覆上は2層に分層され、I層は小砾を多く含む暗茶褐色土層、II層は上器片を多く含む茶褐色土層



第32図 4号住居址実測図



第33図 4号住居址出土遺物実測図

であり、共にしまりは強い。

カマドは、他の住居址と同じく西壁に中央部にあり、7号住の構築時に破壊してしまったものと考えていたが、7号住の調査時にカマドの推定位置と思われるところから、その痕跡を残すものは何も検出されなかった。しかし、本址の南東コーナーの床面上に焼上痕（スクリーントーン表示）が確認することができ、ここがカマドであるという可能性も考えられるが、他にカマドと決定づける根拠は何もない。

遺物（第33図）　土師器は壺（1～6）と环（7）が、須恵器は环（8）と蓋（9～11）とすり鉢（12）があり、図化できなかったが須恵器の大型壺も出土している。小型の住居址としては出土量は多く、特に焼土痕集辺に集中して散乱していたものの、図化できない細片がほとんどであった。

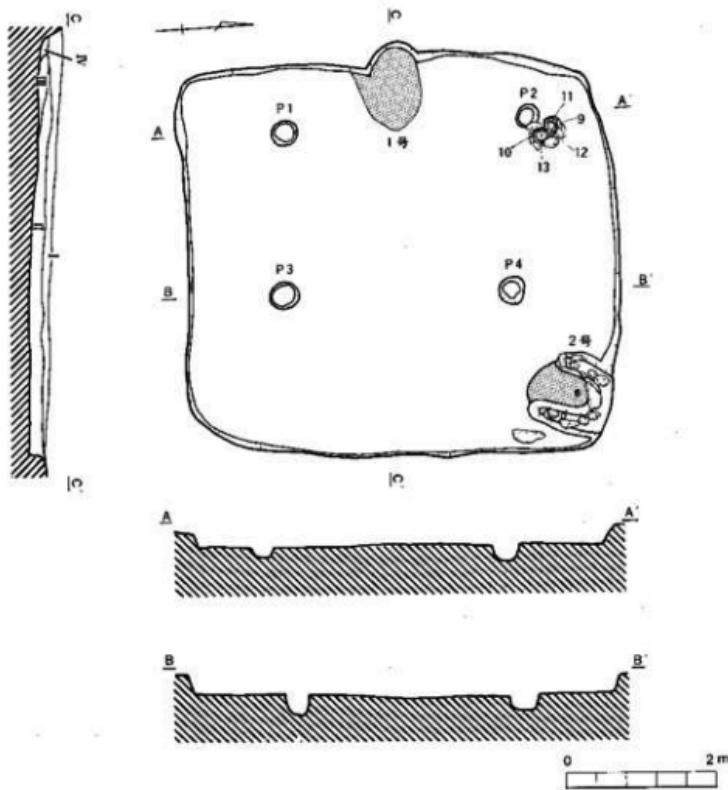
1は、口縁部が短く水平ぎみに開く長胴壺で、外面ヘラナデがなされる。2と3も、口縁部が短く外反し、腹部は張らない長胴壺である。4は、小型壺である。5と6は、底部に木葉痕が残る長胴壺である。7は、内外共ナデ調整がなされる。非ロクロ整形の土師器の环である。8は、ロクロ整形による須恵器の环で、底部は手持ちヘラキリによるものである。9の蓋は、宝珠形のつまみ部を有し、裾部にかえりはみられない。10・11の蓋は、つまみ部は欠損して不明であるが、裾部にかえりはなく、特に11は屈曲をみせる。12は須恵器のすり鉢で、体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、底部は張り出して安定性を有する。また底部は、回転ヘラキリ後棒状工具で不規則に穿孔がなされる。

尚、9～11の須恵器の蓋は、美濃須恵器窯製品と考えられる。

5号住居址

遺構（第34図）　1区の北西部、R—7～10、S—7～10、T—7～10、U—7～10グリッドに位置する。東西5.6m、南北5.9mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方向は、N—85°—Wを示し、壁高は北壁28.5cm、南壁31cmである。主柱穴は、P₁（35×34×22cm）、P₂（32×32×13cm）、P₃（40×35×20cm）、P₄（40×34×22cm）の4本方形配列で、円形プランである。覆土は4層からなり、I層は大小の礫を含む暗茶褐色土層、II層は小礫を多く含む茶褐色土層、III層は焼土を多く含む赤褐色土層、IV層は焼土をまばらに含む茶褐色土層であり、III・IV層はカマド（1号）覆土である。

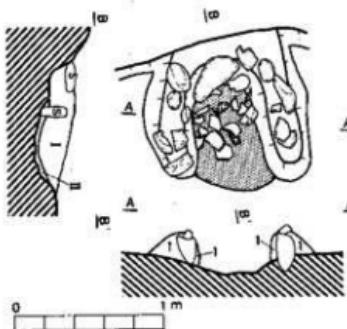
本住居址においては、西壁の中央部と北東コーナーにカマドが2基確認され、前者を1号カマド、後者を2号カマドと呼称することとした。1号カマドは、西壁中央部をややえぐり煙道を築いているものの、内部は既に破壊状態であり、石材は取り除かれて袖の痕跡もなかった。しかし、内部やその集辺部からは焼土の検出が著しく、使用度の激しさを物語っている。2号カマドは、遺存状態のよい石芯粘土カマドである。左右の袖には5つの柱状の石材を立て、黄



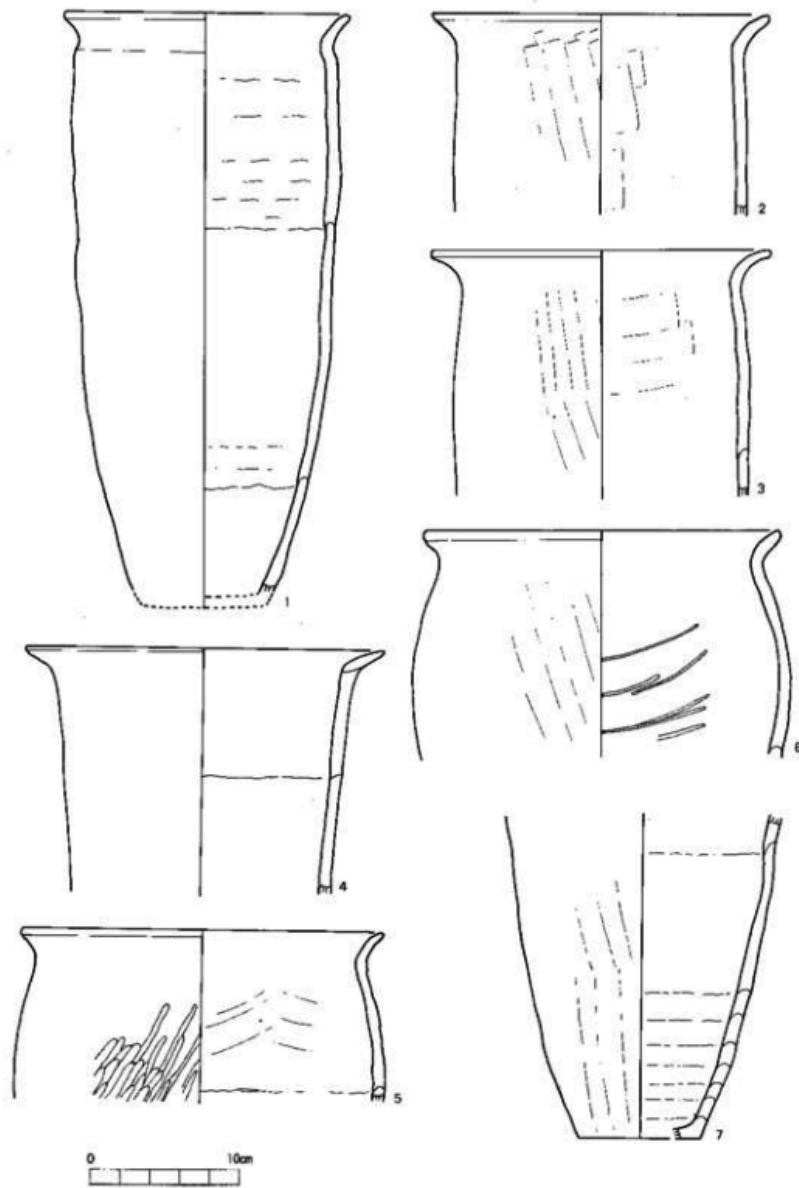
第34図 5号住居址実測図

褐色粘土（1層）で被覆され、しっかりととしている。煙道にみられる天井石は、やや落ち込んでいるものの、ほぼ原形をとどめている。火焼部は床面よりやや窪んでおり、そのほぼ中央部から、甕を支えていた脚石が検出している。カマド内の覆土は2層からなり、I層は焼土をまばらに含む茶褐色土層、II層は赤褐色の焼土層であり、II層上面からは3個体もの甕の破片がまとまって出土している。

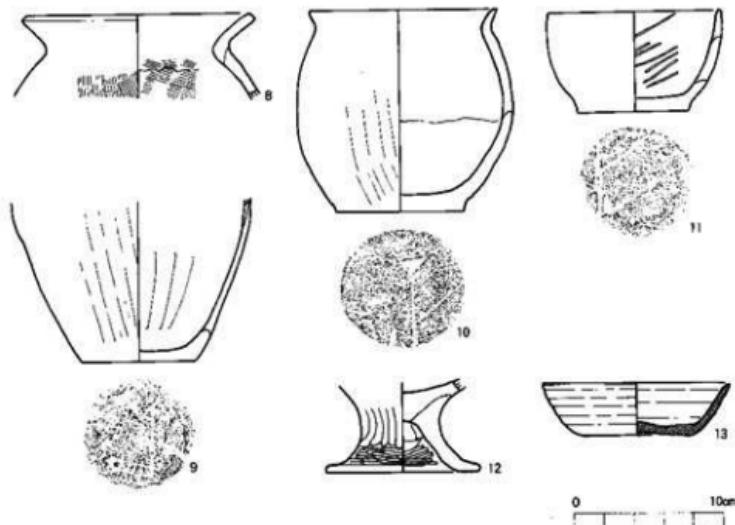
尚、床面は全体的に硬くしまっているが、特に両カマドの集辺部は硬く敲きしめられている。



第35図 5号住居址2号カマド実測図



第36圖 5號住居址出土遺物實測圖 1



第37図 5号住居址出土遺物実測図2

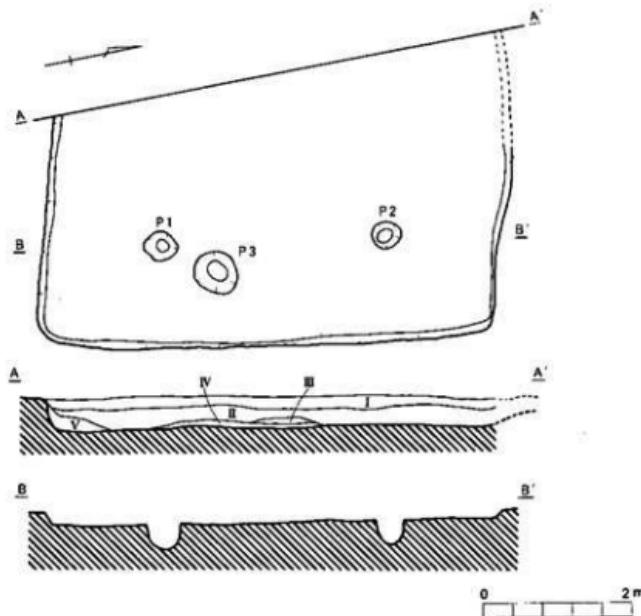
遺物（第36・37図）。土師器は壺（1～10）、鉢（11）、高壺（12）がみられ、須恵器は壺（13）が出土している。比較的出土量は多く、特に土師器壺の出土が目立っている。

1～4、7は、口縁部が短く外反し胴部はふくらまずほぼまっすぐ底部へ下る長胴壺である。内外面共にヘラナデによる器面調整がなされ、2・3・7は外面は縦方向に、内面は横方向に当て具痕が残る。一方5・6は、口縁部は短く外反するものの、胴部は球状にふくらむ形状をする壺である。調整も、基本的にはヘラナデではあるが、5は外面に、6は内面にそれぞれヘラミガキを施すものである。尚、1・2・5は、2号カマド内より一括出土したものである。8は、口唇部は面取りがなされ、頸部は「く」の字状に屈曲する。内外面ハケ調整の壺である。同一個体の破片が7号住からも出土している。

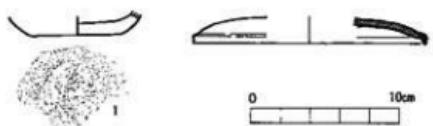
また、9～13の土師器・須恵器は、P₂に隣接する祭祀施設？から出土した一括遺物である。施設は、床面直上に5個の転石を用いて「コ」の字型に囲み、遺物はその中に収められた状態で出土している。特に13の壺は10の小型壺の中に、また12の高壺と11の鉢は9の壺の底部の中に、それぞれ収納する状況を示していた。10は、胴部が球状にふくらむ小型壺で、11は、内湾して立ち上がる小型の鉢で、共に二次焼成を受け外面がはげ落ちている。12は、柱状部は短く「ハ」の字に開く脚部を有する高壺の脚部である。13は、底部回転ヘラキリによる須恵器の壺である。

6号住居址

造構（第38図） 1区の西部、S—11～14、T—10～14グリッドに位置し、住居址の西側が調査区に埋没するため、東側の50%の調査であった。主軸方向はN—71°—Wを示し、南北ライン6.4mを一边とする。隅丸方形を呈する形状と思われる。壁高は、北壁16.5cm・南壁18cmを測るもの、北壁の一部は攪乱されプランははっきりと確認できなかった。柱穴は、P₁ (42×36×35cm)・P₂ (41×36×31cm)の2個の柱穴を検出したものの、他の住居址と同様に、4本方形配列を呈するものと考えられ、また柱穴の形状は、円形を呈している。覆土は5層に分層され、I層は暗茶褐色土層、II層は土器片等の遺物や小砾をまばらに含む暗茶褐色土層、III層



第38図 6号住居址実測図



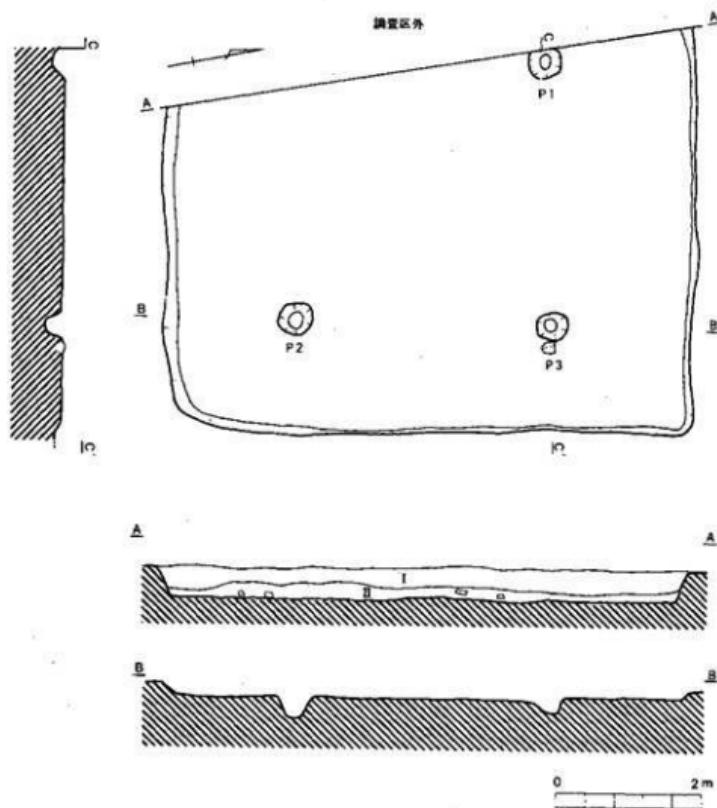
第39図 6号住居址出土遺物実測図

は砾を含まない黒褐色土層、IV層は小砾や炭化物をまばらに含む黄褐色土層、V層は黄褐色土層である。尚、特にIV・V層のしまりが他層より強かつたことを付け加えておく。

一方、床は全体的に軟弱であるが、硬い床を作り出していた粘土のブロックが、床面上にまばらに確認された。またカマドは、調査範囲内からは検出しておらず、他の住居址と同様に西壁の中央部に存在すると思われたが、その詳細については不明である。

遺物（第39図） 土師器の甕（1）、須恵器の蓋（2）の出土がみられる。全体的に出土量は多かったものの、國化不能の細片ばかりであった。

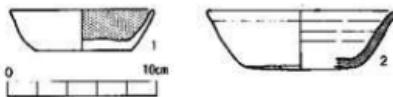
1は、外面ハケ目が残る小型甕の底部であり、胎土・焼成は他の甕と異っており、13号住居址出土の6の小型甕と共通性がある。2は、裾部のかえりがなく肩曲する須恵器の蓋で、美濃須恵器窯製品と思われる。他に同化できなかったものの、柱状部が長い脚部を有する上師器の高壺が出土している。



第40図 7号住居址実測図

7号住居址

遺構（第40図） 1区の南西部、R-15～19、S-15～19、T-15～19グリッドに位置し、4号住居址を切っている。また本址も6



第41図 7号住居址出土遺物実測図

号住居同様に、住居址の西側が調査区外に埋没しているため、70%の調査であった。規模は、南北7.5mを一辺とする隅丸方形を呈する大型住居址で、全体的に床は硬くしっかりとしていた。壁高は、北壁44cm、南壁41cmを測る。主柱穴は4本方形配列を呈すると考えられるが、P₁ (44×42?×20cm)・P₂ (52×44×30cm)・P₃ (44×40×23cm)の3個が検出しており、形状は円形をなし、他の住居址よりもやや大きい。覆土は2層からなり、I層は小砾をまばらに含む茶褐色土層、II層は拳大の礫をまばらに含む暗茶褐色土層である。

遺物（第41図）土師器は环（1）の他、図化できなかったものの甕・高环が出土している。須恵器も环（2）の他、長頭甕が出土している。また、大型住居址にしては遺物出土量は少なかった。

1の土師器の环は、底部木葉底で内面黒色処理を施している。2の須恵器の环は、底部手持ちヘラキリがなされている。

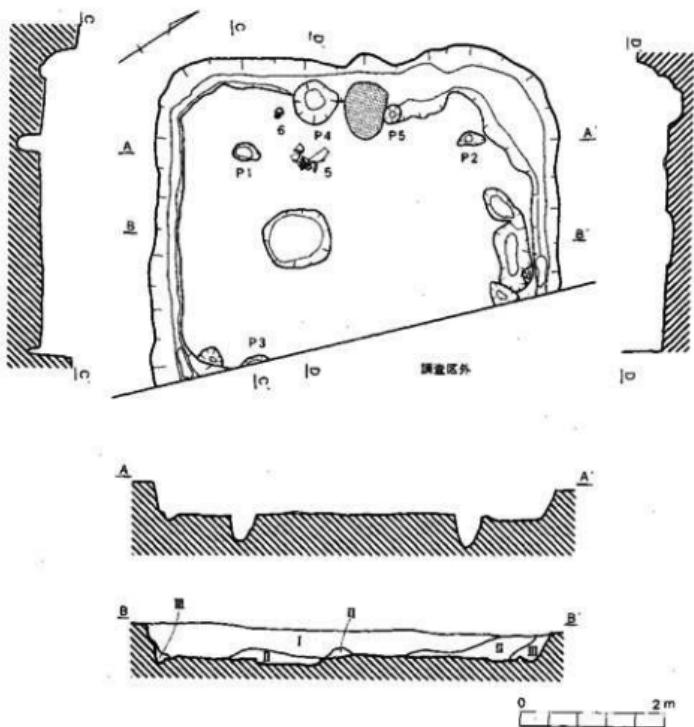
8号住居址

遺構（第42図） 2区の北部、A-10～13、B-10～13、C-10～12グリッドに位置する。住居址の東側は、調査区外に埋蔵しているため、約80%の調査であった。規模は一边6.2mを測り、隅丸方形を呈する形状である。壁高は、北壁で37cm、南壁で50cmを測り、N-59°-Wに主軸を示す。主柱穴は、4本方形配列でP₁ (40×20×35cm)、P₂ (42×20×45cm)、P₃ (計測不能)の3個が検出され、形状は平面・底面共精円形を呈しており、半蔵した木材を柱に使用したのではと推測される。住居址の覆土は3層からなり、I層はしまりの弱い茶褐色土層、II層はしまりが強くロームを含む暗茶褐色土層、III層はロームを多く含む黄褐色土層である。

カマドは、石芯粘土カマドで西壁の中央部に位置する。しかし、カマドを構成している袖は既に破壊されており、石材もまったく検出されず、ただカマドの火焼部（焼土）が残存しているだけであった。

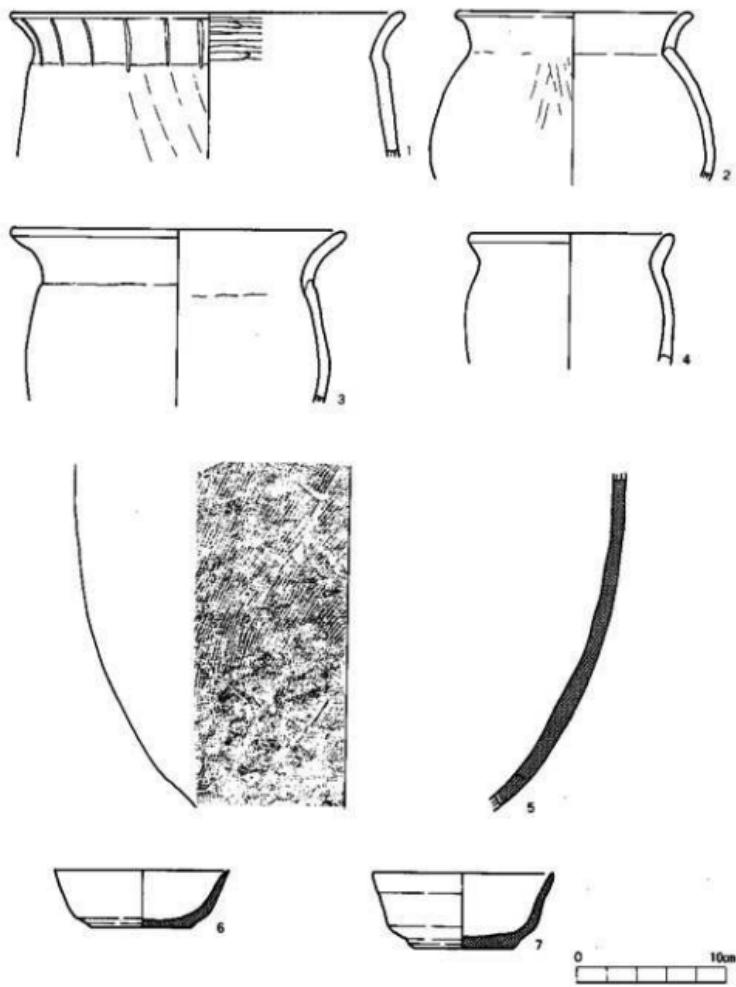
また、カマドの両脇にはP₃・P₄の小穴が認められ、壁際には周溝がめぐらされている。周溝は、北コーナーからカマドにかけてやや幅が広めで深くなってしまっており、内部よりまとまって土器片が出土している。これは単に周溝の一部として捕らえるのではなく、いわゆる貯蔵穴的な性格を持つ施設ではないかと推測する。床面は、ほぼ全域が堅く敲きしめられており、特にカマド周辺部はそれが著しくみられる。

遺物（第43図） 土器器では甕（1～4）、須恵器は大甕（5）と环（6・7）などの遺物の出土がみられた。遺物は覆土中からの出土が多く、またカマド周辺部からの出土が目立っていた。



第42図 8号住居址実測図

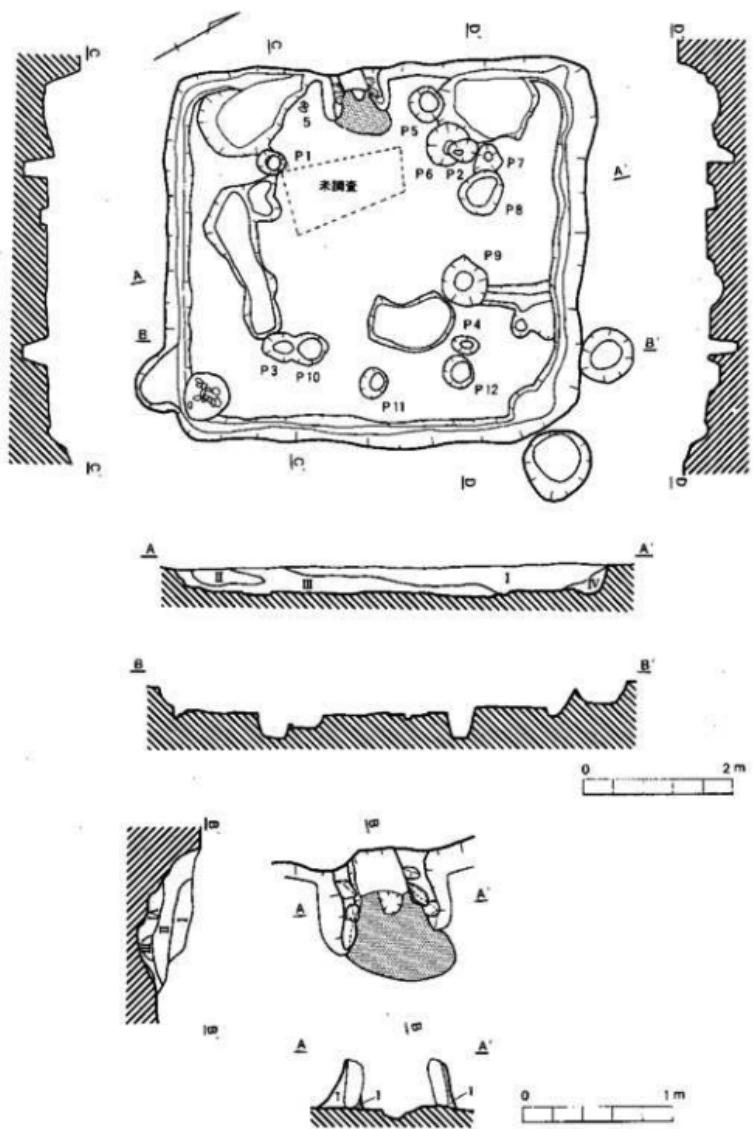
1の甕は、短く外反する口縁部がヨコナデの後、口唇部から頸部にかけて縦方向に一定間隔を持って、ヘラミガキが施されるもので、12号住・14号住からもこれと同じ調整方法（?）の特徴を持つ甕が出土している。2は、頸部が「く」の字状に屈曲し口縁部が短く外反するもので、胸部は球状に大きくふくらみをみせる。5は、球状に大きくふくらむ須恵器の大甕で、カマドの前方部よりまとまって出土しているものの、これのみで他からは同一個体の破片はみられなかった。6と7は、共に下半部でくびれて底部に移行する形状のもので、特に7は焼成不良で赤褐色を呈する。



第43図 8号住居址出土遺物実測図

9号住居址

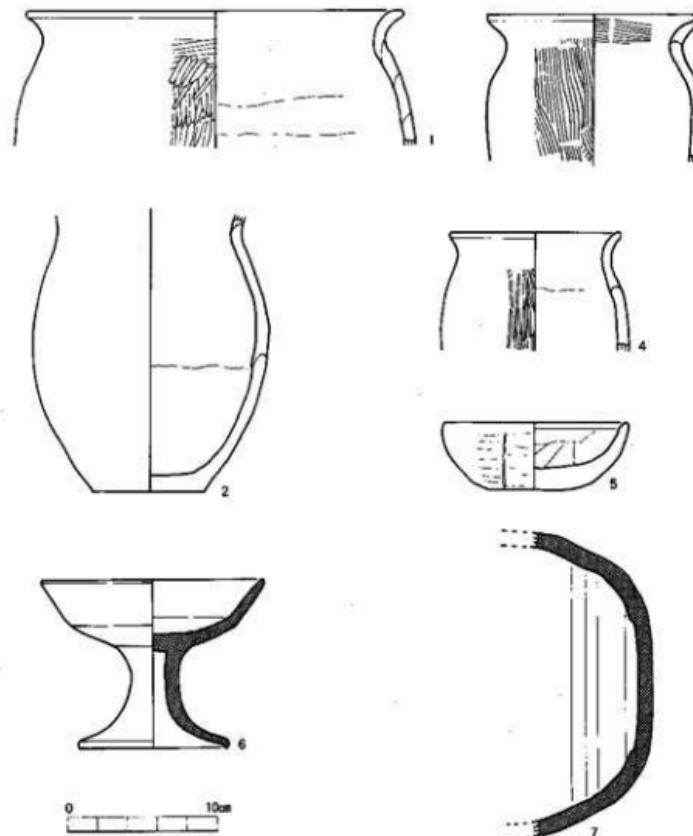
造構（第44図） 2区の北部、B—15～17、C—15～18、D—15～17、E—16・17グリッドに位置する。南北6.2m×東西5.3mの規模で、隅丸方形を呈する形状である。主軸は、N—62°—Wを示し、壁高は、北壁で34cm・南壁で36cmを測り平均している。主柱穴は、P₁ (40×22×



第44図 9号住居址実測図・カマド実測図

P_2 ($38 \times 22 \times 36\text{cm}$)・ P_3 ($50 \times 38 \times 34\text{cm}$)・ P_4 ($38 \times 24 \times 39\text{cm}$)の4本方形配列で、8号住と同様に橢円形を呈する形状である。覆土は4層からなり、1層は小礫をまばらに含む黄褐色土層、II層は黒褐色上層、III層は茶褐色土層、IV層はローム粒子を多く含む黄褐色土層であり、全体的にしまりは弱い。

カマドは、西壁中央部に位置する石芯粘土カマド、比較的遺存状態のよいものであった。右袖に3個、左袖には2個の円柱状の石材を床面に立て、黄色粘土(1層)で被覆し、断面が「ハ」の字状に袖を構築している。火焼部は、床面よりやや深んでおり、ほぼ中央部に支脚が立って



第45図 9号住居址出土遺物実測図

いたと思われる小穴が認められた。また、カマドの覆土は4層に分層され、I層は焼土と灰をまばらに含む黄褐色土層、II層は焼土と灰の他に炭化物をまばらに含む暗茶褐色土層、III層は焼土を多く含む赤褐色土層、IV層は焼土とローム粒子を含む茶褐色土層であり、全体的にしまりが弱いものであった。

一方、柱穴以外に8個の側穴（P₃～P₁₂）を検出したが、深さは浅く規則的な配列は感じられない。その中でもP₁₁は、東壁下中央部に位置し、深さ31cmを測るもので、入口施設に何らかの関係を持つ小穴の可能性が考えられる。また、壁際には周溝がめぐらされ、カマドの両脇には土器を多産する貯蔵穴的な性格を持つものと思われる土坑がみられ、更に床面は全体的に堅く敲きしめられている。尚、南側コーナーには、床面より13cmほどロームをマウンド状に盛り上げた上に、13個の小礫をのせた集石状の施設を検出したが、用途などの性格は不明である。

遺物（第45図） 土師器は壺（1～4）と壺（5）、須恵器は高壺（6）と横銚（7）が出土している。出土量は多く、特にカマド両脇の土坑内からの出土が目立っている。

1の壺は、口縁部が短く外反し胴部が球状にふくらむ大型のもので、外面は丁寧なヘラミガキが施されており、4の小型壺にも共通性がみられる。3は、短く外反する口縁部の端部が上へつまみ上げられた形状をする小型壺で、内外面共ハケ調整が施される。また、他の土師器とは異なったよく精選された灰色の胎土で堅く焼きしめられており、搬入土器の可能性が考えられる。5は、手捏製によるものである。6の高壺は、焼成不良のため黄褐色を呈している。7は、横銚の胸部と考えられるもので、これのみでの全体の形状は不明である。

10号住居址

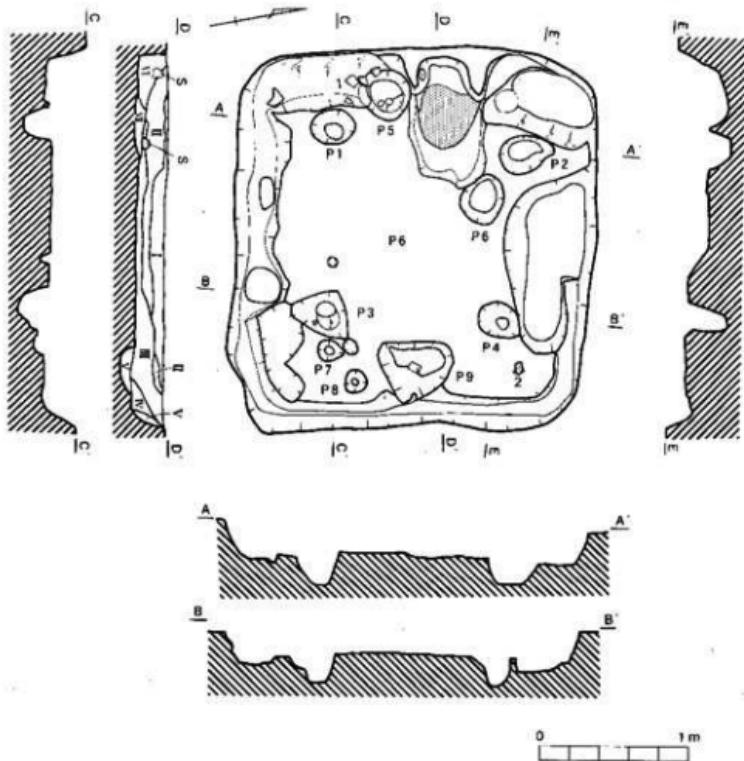
遺構（第46図） 2区の北部・A—22～24・B—22～24・C—22～24グリッドに位置する。南北5.0m×東西5.2mの規模を持ち、隅丸方形を呈し、N—79°—Wに主軸を示す。壁高は、北壁41cm、南壁40cmを測り平均している。主柱穴は、P₁（62×50×42cm）・P₂（76×52×34.5cm）・P₃（76×64×44cm）・P₄（56×36×38.5cm）の4本方形配列で、ほぼ円形を呈する。覆土は7層に分層され、I層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土層、II層はローム粒子をまばらに含む茶褐色土層、III層は明茶褐色土層、IV層は小礫をまばらに含む暗茶褐色土層、V層はローム粒子をまばらに含む暗茶褐色土層である。また、VI・VII層はカマド覆土であり、VI層はローム粒子と焼土を多量に含む茶褐色土層、VII層は赤褐色の焼土層である。

カマドは、西壁のほぼ中央部に位置する石芯粘土カマドである。しかし、遺存状態は悪くカマドの両袖は壁際から若干ロームが突出しているだけで、円柱状の石材は既に取り除かれた半壊状態にあった。また、火焼部は、床面よりも10cm深んでおり、その中は赤褐色をした焼土層（VII層）があり、使用度がかなり激しかったことを物語っている。

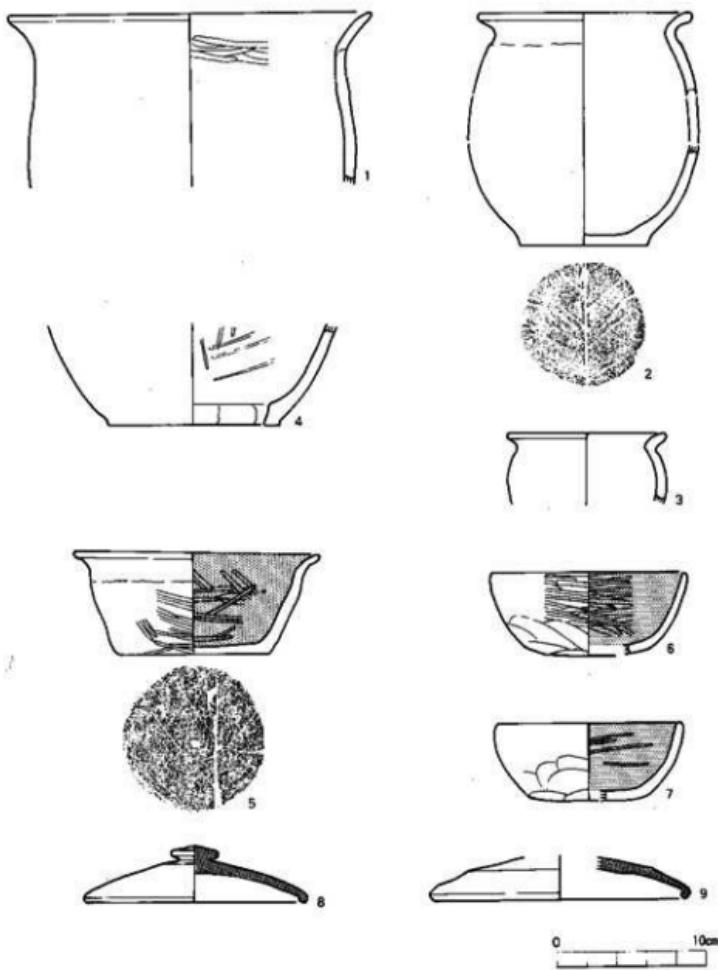
更に、柱穴以外の小穴（P₅～P₉）の中で特に注目されるのは、東壁中央部下にみられるP₉

が9号住宅同様に、入口施設に關係する小穴としての見方ができる。また、壁際には周溝がめぐらされ、カマドの両脇には土器を多産する土坑が設けられている。そして、その内側にはそれぞれ小穴が開けられ、その中にはよく精選された灰白色粘土（細点スクリーントーン表示）が、合計12.5kg収納された状態にあった。これらの粘土の使用目的は不明であるが、何らかの目的があって、収納されていたのは確かである。

遺物（第47図） 土師器は甕（1～3）、瓶（4）・鉢（5）・壺（6・7）が、須恵器は蓋（8・9）がみられ、カマドの集辺部からの出土が目立っている。1は、口縁部が短く外反し胴部はあまりふくらまず長胴を呈すると思われ、内外面共ヘラナデによる調整が施されるが、内面の一部にヘラミガキの痕跡を残す。2の小型甕は、胴上半部はカマドより、下半部は東側コーナ床面より出土している。4は、胴部が球状にふくらむ本調査で唯一出土した単孔の瓶で



第46図 10号住居址実測図



第47図 10号住居址出土遺物実測図

ある。5は、口縁部が水平に外反する特異的な形状を呈するもので、内面は黒色処理を施している。6・7の壺は、湾曲する体部で底部は丸底に近い。8・9の蓋は、美濃須恵器窯製品で、撥部が丸く作り出されている。

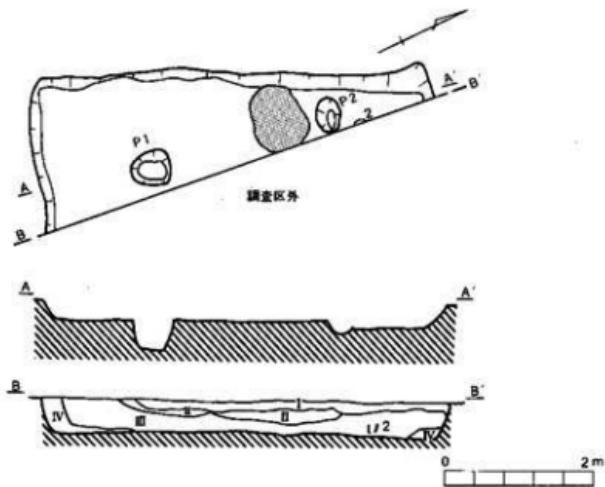
11号住居址

遺構（第48図） 2区の北部、A—6～8、B—8・9グリッドに位置する。住居址の東側は、調査区外に埋蔵しているため約20%の調査であった。南北5.6mを一边とする隅丸方形を呈する形状と思われ、主軸はN—65°—Wを示し、南壁で31.5cm・西壁34.5cmの壁高を測る。主柱穴は、P₁ (56×48×46cm) のみの検出に止まつたが、4本方形配列を呈するものと考えられる。礎土は4層からなり、I層はローム粒子をまばらに含む黒褐色上層、II層はローム粒子をやや多く含む茶褐色土層、III層はローム粒子をまばらに含む茶褐色上層、IV層はロームを多量に含む黄褐色上層である。また、全体的にしまりは弱い。

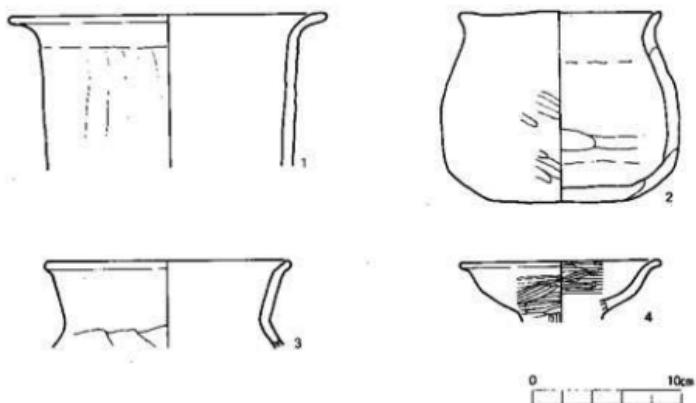
カマドは、西壁のほぼ中央部に位置するものの、火焼部に赤褐色の焼土がみられるだけで袖や石材はなく、破壊状況は著しい。

また、壁際には周溝はなく、他の住居址にみられるようなカマドの両脇の土坑状施設は認められなかった。

遺物（第49図） 土師器だけの出土であったが、甕（1～3）、高环（4）がみられる。住居址のほとんどが埋没状況にあるため遺物の出土量は少なかったものの、カマド周辺部の調査のためか、一応のまとまりはみられた。1の甕は、短く外反する口縁部で胴部はふくらまず、まっすぐ下降する長胴を呈するものと思われる。2は、直立ぎみに短く立ち上がる口縁部で胴部は球状にふくらむ小型甕である。3は、頸部が「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部の端部が更に屈曲して外反する甕で、胴部の形状は不明であるが外面へラケズリによる調整が施される。4は、口縁縫部が短く水平状に外反する形状の高环の环部である。



第48図 11号住居址実測図



第49図 11号住居址出土遺物実測図

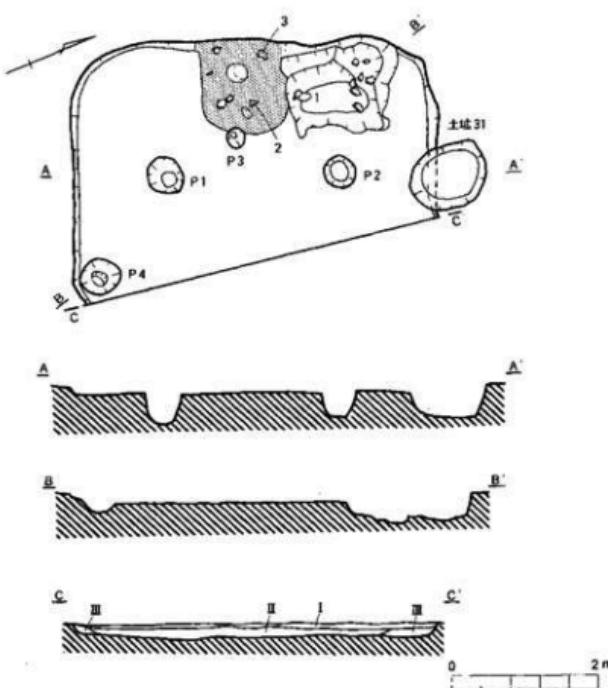
12号住居址

遺構（第50図） 2区の南部、A—34～37、B—35・36グリッドに位置するが、住居址の東側は調査区外に埋蔵しているため、西側50%の調査であった。規模は南北5.2mを一边とし、隅丸方形を呈する形状と思われる。主軸は、N—66°—Wを示す。住居址の上部は開田工事の際に削平されているため、壁高は北壁9.5cm、南壁14.5cmと全体的に浅くなっている。主柱穴は、P₁ (48×52×42cm)、P₂ (48×46×35cm) の2穴を含む、4本方形配列を呈すると考えられる。覆土は、I層がローム粒子をまばらに含む茶褐色土層、II層が黒褐色土層、III層がローム粒子を多量に含む黄褐色土層の3層からなる。

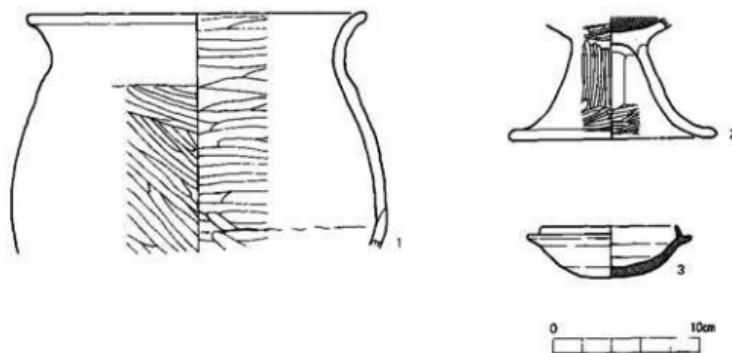
カマドは、西壁の中央部に位置するものの、既に破壊状態であり、カマドを構成する両袖の形跡はなく、使用されていたと思われる石材の残骸と土器等の遺物がやや厚く堆積する焼土中に混在して出土した。また、火焼部と思われる中央部は座んでおらず、床面と同じ高さであった。

尚、カマドの右側には、土器を多産した土坑状の施設があるものの、壁際の周溝は認められなかった。

遺物（第51図） 土師器は甕（1）と高壺（2）が、須恵器は壺（3）がみられ、カマドとカマド脇の土坑内からの出土が目立っている。1の甕は、内外面共ヘラミガキの施される球状



第50圖 12號住居址實測圖



第51圖 12號住居出土遺物實測圖

の制部を呈するものである。また、岡化することはできなかつたが、8号住の1の甕と類似性のある、口唇部より縦方向に一定間隔を持ってヘラミガキが施される甕の出土もみられた。2は柱状部が短く、「ハ」の字状に開く脚部を有する高环で、頭部の形状は不明であるが、内面は黒色処理が施されている。3は、焼成良好な蓋受けを有する坏身で、完形で出土したもの、蓋は破片すらみられなかつた。

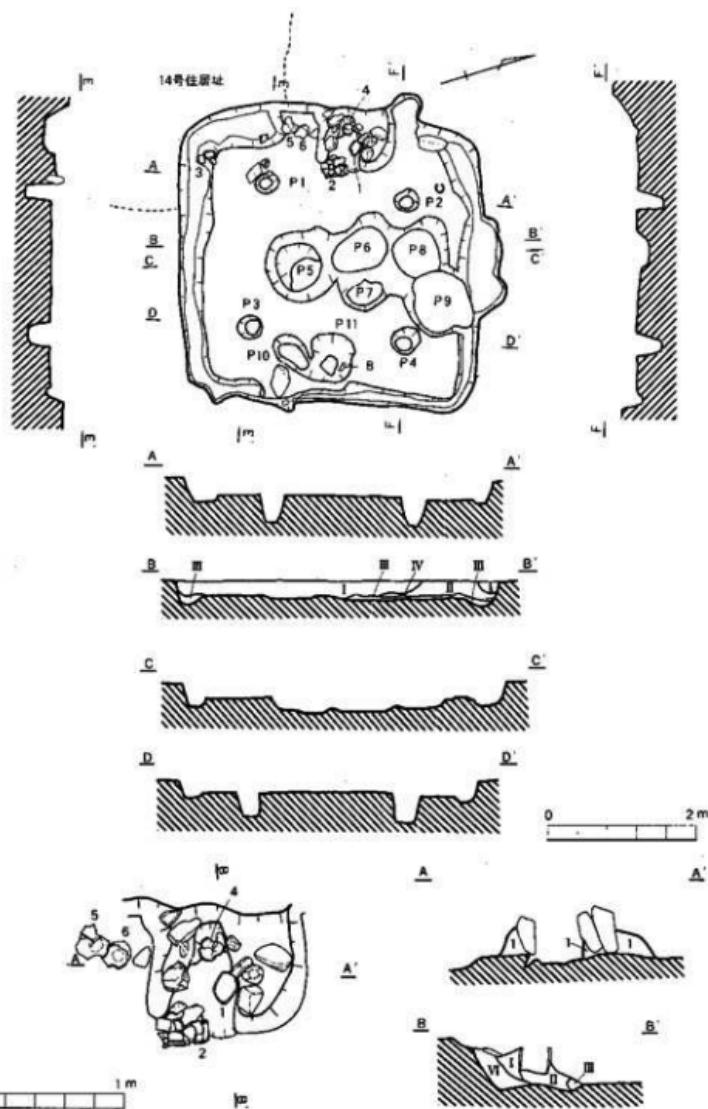
13号住居址

遺構（第52図） 2区の北部、D—22~24・E—22~24、F—22・23グリッドに位置し、14号住居址を切って構築している。南北4.2m、東西4.1mの規模で、隅丸方形の形状を呈し、主軸はN—73°—Wを示す。壁高は、北壁30cm、南壁20cmで隣接する10号住よりも、20cmほど浅い。主柱穴は、P₁ (30×24×34.5cm)、P₂ (36×28×39cm)、P₃ (34×32×34cm)、P₄ (40×38×40cm) の4本方形配列であり、円形を呈する。覆土は4層からなり、I層は茶褐色土層、II層は黒褐色土層、III層はローム粒子をまばらに含む明茶褐色土層、IV層はローム粒子を多量に、また焼土をまばらに含む黄褐色土層である。

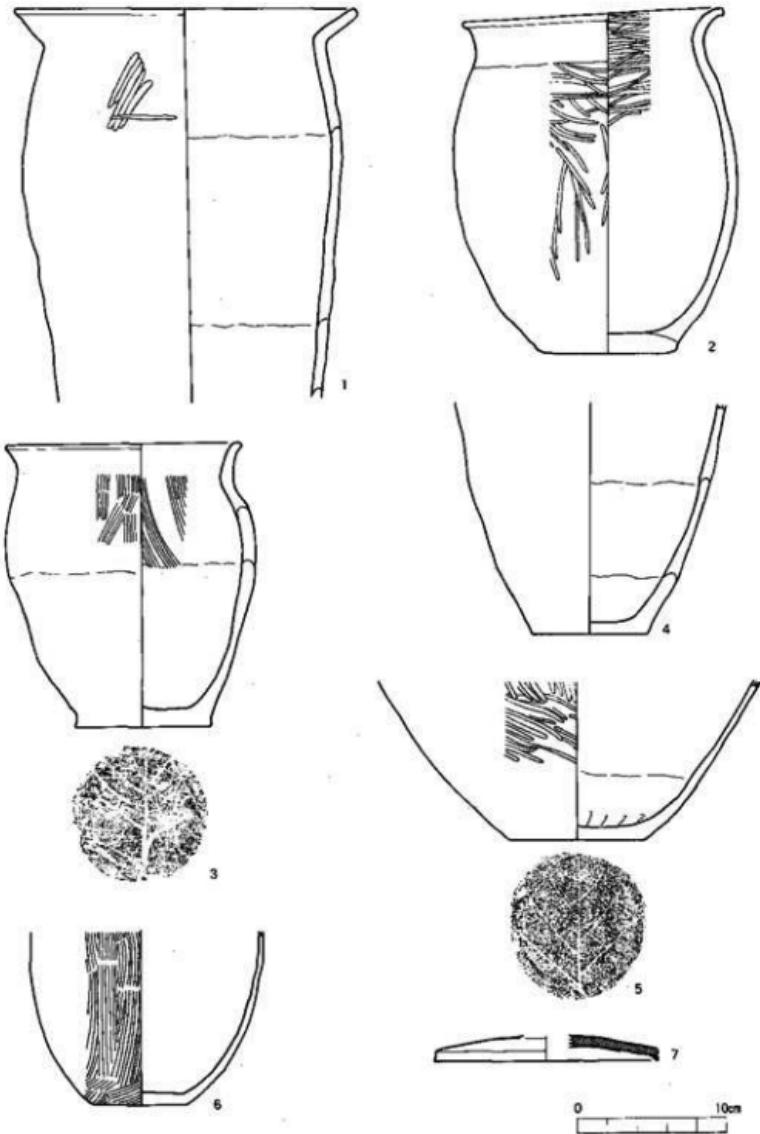
カマドは、西壁の中央部に位置し、比較的遺存状態のよい石芯粘土カマドである。柱状の石材を床面に立て、褐色粘土で被覆している。火焼部は、床面をやや振り込んで座んでいる。また、遺存状態がよいものの脚石はおろか、その痕跡も認めることはできなかつた。カマドの覆土は4層に分かれ、I層はローム粒子をまばらに含む黄褐色土層、II層は焼土をまばらに含む赤褐色土層、III層は焼土をまばらに含む黒褐色土層、IV層は暗茶褐色土層である。しかし、全体的に焼土を含むものの、著しい火焼状況は認められず、使用度の激しさを感じることはできなかつた。

また、その他の施設としては、壁際に周溝がめぐらされているが、カマドの両脇によくみられる土坑状の穴はなかつた。更に、住居址内部には柱穴の他に、P₅～P₁₁の7個の小穴が認められ、土師器や鉄器を出土するP₁₀・P₁₁に対し、P₅～P₉の5個の小穴は縄文土器のみを出土しており、縄文時代の土塙の可能性が考えられる。

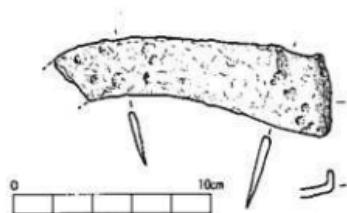
遺物（第53・54図） 土師器は甕（1～6）、須恵器は蓋（7）、鉄器は鎌（8）が出土し、カマド及びカマドの周辺部に出土の集中がみられた。1の甕は、頭部が「く」の字状に屈曲する長胴のもので、胴下半部は欠損してはいるものの、カマドの右袖の芯石に囲まれるように立った状態で出土しており、二次焼成の痕跡もみられることから、使用途中の可能性が考えられる。2の甕は、球状にふくらむ胴部で内外面共ヘラミガキが施される。カマドの前方部床面より土圧によって潰された状態で出土している。3は、口縁部が短く外反し胴部はゆるやかにふくらむもので、内外面共ハケ調整である。5は、底部から逆「ハ」の字状に立ち上がる形状の大型品で、外面ヘラミガキが施される。6の小型甕は、器厚が薄くカキメ状の荒いハケ調整が施さ



第52図 13号住居址実測図・カマド実測図



第53圖 13號住居址出土遺物實測圖 1

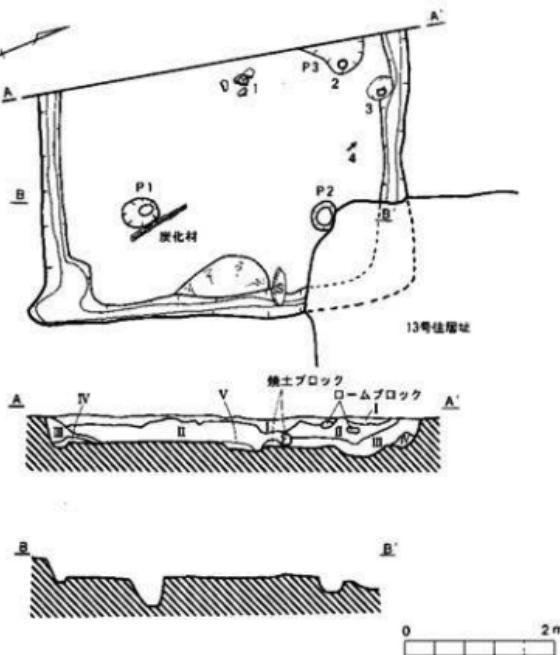


第54図 13号住居址出土遺物実測図2

れ、胎土も他の土師器とは異なる。7の蓋は、割部が丸みを持たず、屈曲をみせるものである。8は鉄製の鎌で、刃先は欠損しているものの、ゆるやかに湾曲する形状であり、現在のものに近くなっている。また、柄の取り付け部は折り曲げられている。小穴P₁₁内より出土したものである。

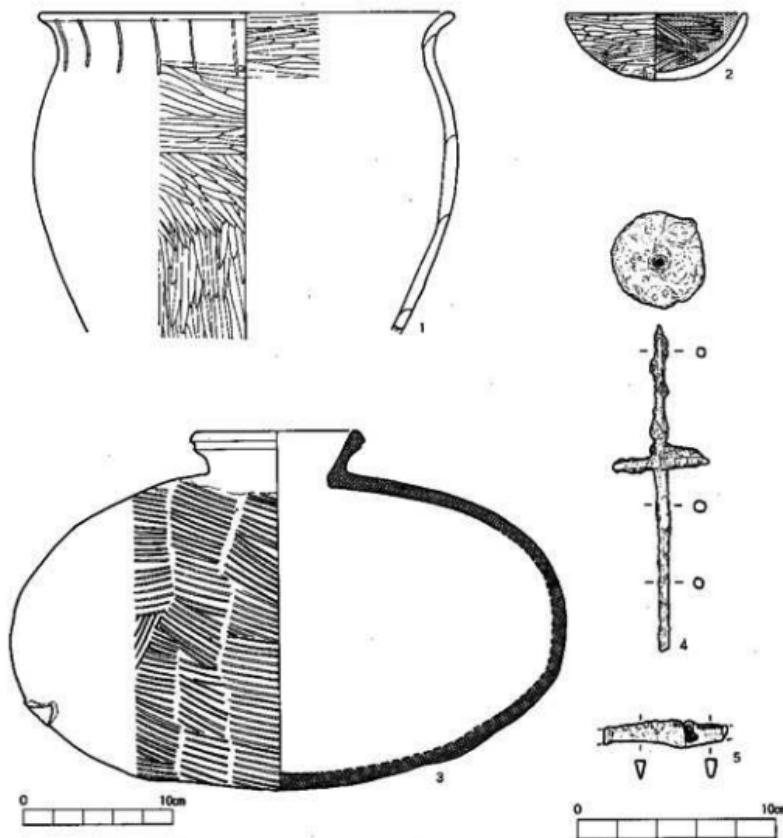
14号住居址

造構(第55図) 2区の北部、F—23~25、G—23~25グリッドに位置し、13号住居址によつて切られている。また、住居址の西側は調査区外に埋蔵しているため、東側72%の調査であつ



第55図 14号住居址実測図

た。南北4.9mを一辺とする規模で、隅丸方形を呈する形状である。主軸は、N—71°—Wを示しており、北壁20cm、南壁30cmの壁高を測る。主柱穴は、P₁ (48×40×36cm)、P₂ (40×32×28cm) の2穴の検出に止まつたが、4本方形配列を呈するものと思われる。覆土は5層からなり、I層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土層、II層はローム粒子と焼土と炭化物をまばらに含む茶褐色土層、III層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土層、IV層はローム粒子を多く含む黄褐色土層、V層は焼土とローム粒子を多く含む黄褐色土層である。また、P₁を中心としてII層中に含まれる焼土の広がりが顕著に認められた。そして、それといっしょに炭化した木片が混在しており、特にP₁の脇からは長さ92cmの炭化材がII～III層中より検出されている。この



第56図 14号住居址出土遺物実測図

ような状況から、本住居址が焼失住居ではないかとの見解もあったが、それが住居址内全域に及ぶものではなく、一概に断定することはできない。

カマドは、本調査では検出されず、他の住居址と同様に西壁の中央部に位置するものと考えられる。また、壁際には周溝がめぐらされており、東壁中央部の下にゆるやかな落ち込みが認められるが、入口施設に関連性のあるものかは不明である。

遺物（第56図） 土師器は甕（1）、壺（2）、須恵器は横巻（3）、鉄器は紡錘車（4）刀子（5）の出土がみられ、出土量としてはあまり多くなかった。1の甕は、口縁部が短く外反し球状にふくらむ胸部で、内外面共ヘラミガキが施され口縁部の縦方向のミガキは8号住・12号住出土の甕と共通性を持つ。2の壺は、丸底で内外面共ヘラミガキが施され、内面黒色処理がされる。3の横巻は、口縁部は2段の稜を持って短く外反し、胸部はラクビーボール状にふくらむ。外面は叫き目が残り自然釉がかかり、他の須恵器片の付着が認められる。4は、鉄製紡錘車で、紡輪径4.8cm、紡軸17cmを測る。5の鉄製の刀子は、刃先と茎が欠損し全形は不明であるが、刀身は内湾し茎には木質が残る。

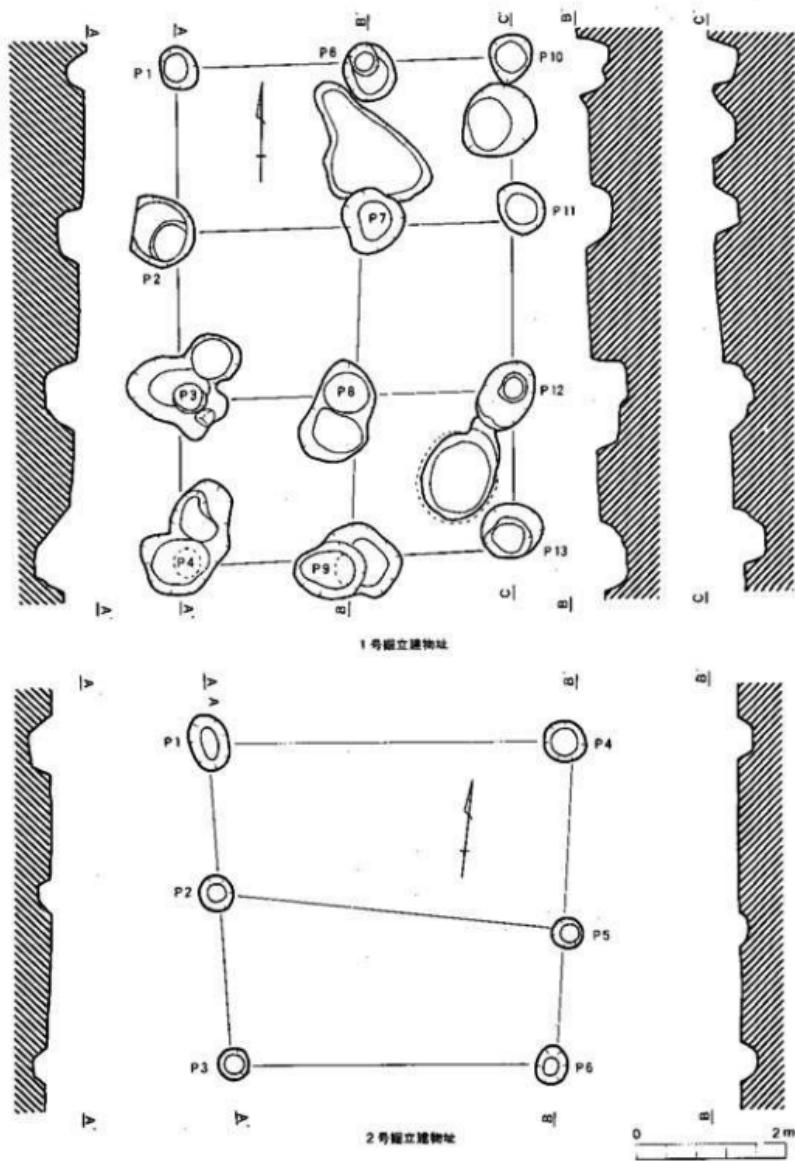
2 挖立建物址

1号掘立建物址

2区の南部、E—50、F—47～52、G—48～52、H—48～52グリッドに位置する。主軸は、N—2°—Wで、ほぼ南北方向を示す。南北3間（6.8m）の東西2間（4.6m）で、P₁（60×52×24cm）、P₂（68×56×32cm）、P₃（40×44×42cm）、P₄（100×88×40cm）、P₅（44×40×44cm）、P₆（92×56×30cm）、P₇（80×76×44cm）、P₈（100×80×44cm）、P₉（48×40×40cm）、P₁₀（72×44×34cm）、P₁₁（48×44×34cm）、P₁₂（68×56×44cm）の12個の柱穴である。柱穴の形状はほぼ円形を呈するが、土塙と重複関係にあるものはそのプラン確認がはっきりしなかった。また、覆土は2層からなり、I層は暗茶褐色土層、II層は黒褐色土層で、共にしまりは弱く、柱穴の中にはII層のみの覆土を有するものもみられる。尚、図化できなかったが、P₄から高環の脚部が出土しており、住居址からの出土遺物と比べて、ほぼ同一時期に位置づけられると思われる。

2号掘立建物址

2区の南部、F—43・44、G—43～45、H—43～45グリッドに位置し、主軸はN—6°—Wでほぼ南北方向を示す。2間（4.5m）の1間（4.9m）で、P₁（80×54×32cm）、P₂（50×48×18cm）、P₃（46×44×16cm）、P₄（60×58×20cm）、P₅（46×42×12cm）、P₆（56×46×22cm）の6穴である。覆土は、黒褐色土層の1層でしまりは弱い。また、柱穴内からは土器などの遺物の出土は、まったくみられなかった。



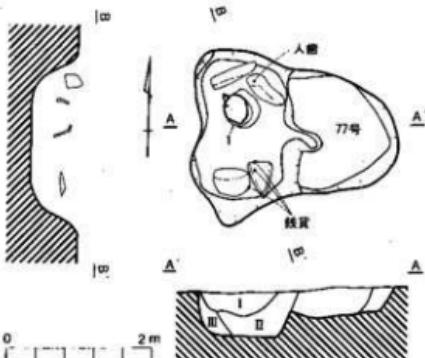
第57図 1・2号据立建物址実測図

第3節 中世

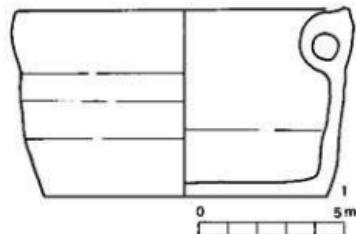
1. 土塙墓（116号土塙）

遺構（第58図） 2区の南側、段丘の突端部であるB—45、C—45グリッドに位置する。本土塙墓が位置する所は、縄文時代の土塙が集中する中にあって、77号土塙の西側を切って構築している。規模は、120cm×75cmの深さ35cmで、平面長方形を呈する。確認面からほぼ直に掘り込まれ、底面は半らである。長軸を主軸とするならば、N—3°—Eのほぼ南北方向を示す。覆土は3層からなり、I層は茶褐色土でロームをまばらに含み、II層は暗茶褐色土でロームをまばらに含む。III層は暗茶褐色土でロームをやや多く含む。全体的にしまりが弱い。また、南北壁際の覆土中より、人頭大の転石を2個づつ検出したが、人為的なものであるかは不明である。尚、他に本時期と同じ造構の検出はなかった。

遺物（第59図） 内耳土器、銭貨、人間の小白齒が出土した。1の内耳土器は口径23cm、底径19.4cm、器高12.8cmの完形で、中央よりやや北側による位置に、口縁部を下に土器を伏せた状態で覆土中より出土した。小白齒は土器の脇の転石の下で床面より出土している。銭貨は、



第58図 土塙墓実測図



2の開元通宝、3の天祐通宝、4・5の元豊通宝、6の天聖通宝、7の元祐通宝の6枚が南側の床面より出土した。唐の開元通宝を除く残りの5枚は北宋錢であり、すべて渡来錢である。6枚の銭貨の出土は、いわゆる六道錢の意味を持つものと考えられる。



第59図 土塙墓出土遺物実測図

第V章 まとめ

今回の調査においては、縄文時代中期初頭、古墳時代末から奈良時代、中世の各時代の遺構遺物が検出された。特に、深沢川によって形成された河岸段丘の中段面における遺構の確認は初めてであり、大きな成果であったといえよう。以下各時代ごとに概要と考察を述べてまとめたい。

縄文時代

縄文時代の遺構としては、住居址1軒、土塙109基、集石2基が検出された。遺構はすべて、縄文時代中期初頭時期に位置づけられるもので、伴出する遺物では、梨久保式の特徴を示す良好な・括上器資料が得られた。半截竹管状工具による沈線文と縄文を多用した本時期特有の文様構成を行っており、幾つかの種類に分類されるものの本資料中での形式的な変遷を追うことはできなかった。しかし、本資料を伴出する109基の土塙群には注目することができよう。特に土塙の分布状況をみてみると、ほぼその大半が段丘の突端部に集中している点があがる。昭和48年度の中央道建設に伴う発掘調査において、対岸に接する堂地遺跡の調査例と対比してみると、同一時期の土塙群がやはり段丘の突端部にみられ、このことは大きな共通点である。また、住居址などの居住施設が周辺部にみられないことは、やはり居住する場所からは掛け離れた所で土塙群を形成させる、大きな目的があったのではないかと推測されよう。それは、当地域に展開していた中期初頭の集落の墓域としての可能性が大である。従って、当時の集落構成を考えていくと、隣接するどこかに必ず住居址群が存在すると思われる。いずれにせよ、今回の調査では多くの諸問題を残しており、今後の調査と多くの研究者による解明に期待をしたい。

古墳時代末～奈良時代

本時期に属する遺構では、住居址13軒と掘立建物址2軒が検出されている。13軒の住居址のうち2～7号住の6軒が中段面である1区より、8～14号住の7軒が上段面である2区よりそれぞれ検出しており、地形的条件による集落構成の時間的差異は大きく認めることはできなかつた。ただし、各住居址間における切り合い関係や伴出遺物の分析により、比較的良好なセット資料を有する2～5・8～10・12～14号住について時間的細分が可能と思われる。

まず出土土器の様相について概観してみると、煮沸形態である長胴壺は、この地方に一般的にみられるナデないしヘラナデ調整によるものばかりで、後出するハケ調整のものはまったくみられない。しかし、小型壺では9・13号住よりハケ調整のものが出土しており、特に9号住出土のもの(45-3)はその特徴から、外部からの搬入品の可能性がある。貯蔵形態をみると、ヘラミガキが施される胸張りのものが5・9・10・12・13・14号住より出土し主流を占め、須

須恵器の甕は4・8号住より認められるがまだ、全体的に浸透していない。また、9・14号住からの横盤の出土はかなり注目されるものである。食器形態についてみてみると、須恵器は12号住出土の壺身(51-3)と2号住出土の蓋は、古墳時代末の所産といえよう。高台付のものが3号住より無有台のヘラ切り底のものが4・5・8号住よりみられ、宝珠形のつまみを有する反りのない蓋が3・4・10・13号住に認められる。必ずしも両者の出土状況に相関関係はみられない。更に、美濃須恵器窯製品の搬入が認められる。上師器では、丸底ないし丸底に近い形状で内面黒色処理を施すものが2・8・14号住でみられ、古墳時代的様相を根強く残しているものである。供獻形態である高环が、上師器では5・12号住から柱状部が短く「ハ」の字状に大きく開く脚部を有するものが、須恵器では9号住よりそれぞれ認められ、出土数は少ないものの高环の存在はまだ残っている。

のことから、中央道の調査によって検出された中道Ⅰ期とする5・20号住の一括資料と比較してみると、ハケ調整の長脛甕がみられず、また、須恵器の壺で糸切りのものが共存していない3~5・8~11・14号住はそれよりも一段古い様相を示しているようであり、奈良時代の初頭に位置づけられよう。また2・12号住は、前述するように古墳時代末として捕えられよう。更に上師器様相ではあまり大きな相違はみられないものの、ハケ調整の小型甕を伴出している13号住は10号住を切っており、奈良時代の中ごろと考えられ、従来中道Ⅰ期といわれるものと並行すると思われる。

中世

2区の段丘突端部に1基だけ土塚墓を検出している。内耳土器を伴い、また6枚の古銭を副葬するという六道錢の風習を伝える良好なものである。出土した内耳土器は、比較的小型で深いものであり、およそ16世紀頃の所産と考えられる。6枚の古銭は、すべて大陸からの渡来銭で、内耳土器とほぼ同一時期に広く一般的に流通していたものである。本址においての内耳土器の出土状態について考えてみると、南北方向に主軸を有する長方形の墓穴の北側に、土器の口縁部を下に伏せた状態で出土しており、ちょうど北枕で埋葬した遺体のほぼ頭部直上に位置している。これは、故意に死者の頭部に土器をかぶせて埋葬したのではないかという可能性も大いに考えられよう。

以上、各時代ごとに構造・遺物について概略的ではあるが、まとめを行ってきた。本遺跡の調査は、中央道の調査地の並びにあるため、調査前からその内容や性格は中央道の調査結果をパロメーターとし、ある程度の予測をつけることができた。しかし、結果として、古代における集落が東西に広がっていることを実証できたと同時に、集落の成立段階に新たな新展がみられた。それは、当初奈良時代にその成立があったとされてきたが、今回の調査によってそれよりも一段階古い古墳時代の終末期に逆登るという成果が得られた。しかし、このことによって、再三論議を呼んでいる東山道との関連性について考えてみると、今回の調査結果からは、その

系口すらみつけることはできなかった。当地が東山道の通過地でかつ駅の所在地であるという見方は、多くの研究者によって論じられており、それを決定づける証拠は得られなかつたものの集落の成立が逆巻ったことは、今後の研究に大きな影響を及ぼすと思われる。

最後に、本調査に多大な御協力をいただけた伊那建設事務所、また実際に調査に携わっていただいた調査団の方々に、厚く御礼申し上げる次第であります。尚、長年に渡つて発掘調査に従事していただきました山岸 工氏が、調査の中ばにして他界なされました。故人におきましては、熱心にかつ敏速な判断力で調査の進行に多くの御努力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、報告書の発刊を持ちまして新たためて御冥福をお祈り申し上げます。

付表1 土塁一覧表

番号	平面形	規模(長×短×高さ)cm	埋土	備考
1	楕円形	187×126×47		
2	楕円形	223×167×39	4分層	
3	楕円形	327×170×38		
4	円形	104×100×33	3分層(炭まじり)	
5	円形	118×110×47		
6	楕円形(?)	288×250×41	3分層	
7	円形	190×180×21	単層	土器片5点
8	楕円形	214×180×34		
9	楕円形	120×96×36	2分層	
10	楕円形	66×60×21		
11	楕円形	142×124×49	4分層	
12	円形	61×58×18		
13	円形	94×92×93	4分層	
14	円形	114×92×41	4分層	
15	円形	120×118×47	4分層	中央部に完形土器1点。ふせてあった。
16	円形	98×88×30	3分層	
17	円形	110×106×21	2分層	
18	円形	()×92×38		4号住居に切られている。
19	円形	76×74×72		
20	楕円形	122×104×46		
21	円形	168×152×86		
22	楕円形	()×128×66		一部調査区外。
23	不整楕円形	176×96×50		
24	楕円形	306×170×66	3分層、小石まじり	
25	楕円形(?)	()×166×78	4分層	26号土塁と切り合う。
26	楕円形(?)	()×192×95	4分層	25号土塁と切り合う。
27	楕円形	278×192×23	5分層	
28	円形	114×112×77	2分層	土器片10点余り。

番号	平面形	規模(長径×短径×高さ)cm	埋 土	備 考
29	椭円形	70× 56×24		
30	円 形	70× 66×26		
31	椭円形	114× 94×47.5		
32	椭円形	292× 104×32	3分層	
33	椭円形	188× 150×68	3分層(小石まじり)	
34	椭円形	170× 84×18	2分層	
35	椭円形	110× 106×32	単層(カクラン含)	37号土塁を切る。
36	椭円形	178× 138×52		
37	円形(?)	140× (?)×64	2分層	39号土塁を切り、35号土塁に切られる。
38	椭円形	128× 98×27		40号土塁と切り合う。
39	椭円形(?)	(?)× 64×27		37号土塁に切られる。
40	椭円形	146× 112×61	3分層	38号土塁と切り合う。
41	不整椭円形	310× 277 (198)× 73	2分層	
42	椭円形	182× 140×50	3分層	
43	円 形	90× 86×28		
44	椭円形	80× 66×19		
45	円 形	116× 98×47	5分層	
46	円 形	152× 136×39	3分層	
47	円 形	98× 92×36		
48	椭円形	136× 76×18		
49	円 形	114× 104×55	2分層	
50	椭円形	164× 100×14		
51	円 形	70× 70×24		
52	円 形	108× 98×36		
53	椭円形	120× 100 (84)× 38	3分層	一部調査区外。
54	椭円形	192× 102×40	3分層	112号土塁に切られる。
55	円 形	120× 110×45	3分層	
56	椭円形	98× 76×28		
57	椭円形	178× 108×44	3分層	

番号	平面形	規模(長径×短径×高さ)cm	埋 土	備 考
58	円 形(?)	() × 80 × 20		一部調査区外。
59	円 形(?)	() × 106 × 43	4分層	一部調査区外。
60	梢 円 形	112 × 82 × 51	4分層	
61	円 形	110 × 102 × 82	4分層(炭・小石含)	
62	円 形	94 × 80 × 48		小Pitを切る。
63	円 形(?)	110 × 106 × 35		64号土塙に切られる。
64	円 形	136 × 120 × 40	3分層	63号土塙を切る。
65	円 形	112 × 100 × 38	3分層	66号土塙と切り合う。
66	円 形	114 × 108 × 70	3分層(焼土含)	65号土塙と切り合う。 土器(ほぼ完形品)3点。
67	円 形	90 × 90 × 31	5分層	
68	円 形	84 × 74 × 29	2分層	
69	円 形	80 × 78 × 16	2分層	
70	円 形	104 × 94 × 49	2分層	
71	梢 円 形	134 × 112 × 79	3分層	
72	梢 円 形	200 × 110 × 66	4分層	
73	梢 円 形	70 × 42 × 19		
74	円 形	92 × 90 × 28		
75	円 形	86 × 80 × 34		
76	梢 円 形	130 × 90 × 39	3分層(炭含)	土器片数点。
77	梢 円 形	() × 78 × 30		中世土塙墓に切られる。
78	円 形	88 × 86 × 42	单層	
79	梢円形(?)	() × 160 × 45	4分層	80号土塙を切る。
80	梢円形(?)	() × 90 × 31		79号土塙に切られる。
81	梢 円 形	92 × 70 × 16		
82	円 形	84 × 74 × 33	3分層	
83	梢 円 形	74 × 60 × 15		
84	梢 円 形	100 × 84 × 32	2分層(小石含)	土器片数点。
85	円 形	118 × 108 × 41	3分層	
86	円 形	102 × 100 × 52	3分層	

番号	平面形	規模(長径×短径×高さ)cm	埋土	備考
87	円形	128×124×45	4分層(炭含)	土器片散点。
88	円形	98×96×19		
89	椭円形	()×98×46		一部調査区外。
90	椭円形	104×84×19		
91	円形	104×90×19		
92	円形	98×94×28		
93	円形	82×78×25		
94	椭円形	138×78×18		
95	椭円形	202×122×21		
96	円形	110×100×37		
97	円形(?)	()×98×36		一部調査区外。
98	円形(?)	74×(74)×50		99号土塙を切る。
99	椭円形	140×(90)×48		98号土塙に切られる。
100	円形(?)	()×98×49		1号掘立建物址柱穴No.7に切られる。
101	椭円形	136×98×60		
102	椭円形	102×(90)×38		115号土塙と切り合う。
103	椭円形(?)	()×106×64		114号土塙に切られる。
104	円形	66×64×21		
105	円形	92×80×38	3分層	
106	円形	130×118×35	2分層	
107	円形	68×60×44		
108	椭円形	104×80×20		
109	円形	78×66×51		
110	椭円形	108×78×20		
111	椭円形	84×64×38	焼土	
112	椭円形	116×92×53		54号土塙を切る。
113	円形	94×80×32		
114	椭円形	100×80×34		103号土塙を切り、1号掘立建物址の柱穴No.8に切られる。
115	椭円形	(84)×70×40		102号土塙と切り合う。

付表2 出土石器一覧表

打製石斧

No.	出土地	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
19-1	15号土塙	短冊型	綠泥岩	10.7	3.8	1.6	95	100	
19-2	16号土塙	短冊型	粘版岩	12.2	4.9	1.7	140	100	
19-3	65号土塙	短冊型	粘版岩	10.8	3.9	1.6	80	95	
19-4	66号土塙	短冊型	砂岩	16.9	5.2	1.5	180	100	
19-5	66号土塙	短冊型	砂岩	16.0	5.1	1.6	145	100	
19-6	24号土塙	短冊型	粘版岩	13.2	5.4	1.4	135	100	刃部磨滅
22-4	2号表採	分銅型	砂岩	14.0	10.3	3.7	495	100	
24-4	2区表採	短冊型	砂岩	13.6	4.6	1.7	160	90	
24-5	8号住腹土	短冊型	砂岩	12.1	4.5	2.0	130	85	
24-6	8号住腹土	撥型	泥岩	10.4	4.4	1.8	110	100	
24-7	2区表採	撥型	砂岩	13.7	4.6	2.1	115	100	

磨製石斧

No.	出土地	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
20-7	82号土塙	乳棒状	砂岩	(9.4)	6.6	4.1	(410)	50	側面に打痕
20-8	28号土塙	乳棒状	砂岩	(12.0)	6.3	3.4	(450)	70	側面に打痕
24-8	2区表採	乳棒状	綠泥岩	(9.7)	5.0	3.2	(215)	80	刃部後退

磨石

No.	出土地	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
20-9	24号土塙	安山岩	(6.9)	9.7	8.0	(690)	30	
20-10	54号土塙	花コウ岩	(7.5)	7.9	4.6	(410)	50	
20-11	96号土塙	砂岩	15.2	7.1	5.7	1030	90	
24-9	2区表採	安山岩	11.7	6.6	4.7	550	100	表面に2ヶ所の凹部がある。

石鎚

No.	出土地	分類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
24-1	1区表採	鋸型	黒曜石	2.0	(1.4)	0.25	(0.8)	90	
24-2	1区表採	凹基無茎	黒曜石	1.85	(1.3)	0.35	(0.7)	90	先端部丸い

石匙

No.	出土地	分類	石質	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度	備考
24-3	1区表採	横形	チャート	2.9	(4.6)	0.7	9.0	90	先端部欠損、直刃

石核

No.	出土地	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
25-1	4号住床下	砂岩	18.5	19.9	6.5	2640	100	23-1と共出
25-2	4号住床下	砂岩	16.1	8.5	5.9	780	100	23-1と共出

石皿

No.	出土地	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度(%)	備考
25-3	2区表採	花コウ岩	(20.3)	(18.5)	6.8	(4000)	30	裏面に凹部有り。

付表3 古墳時代末～奈良時代、住居址出土土器一覧表

No	出土地点	器種 器形	法量(cm) 口径 底径 器高			残存% 度	調整・形態の特徴	備考
28-1	2住	土師器 甕	19.0	-	(14.4)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
28-2	2住 (カマツ)	土師器 甕	20.4	-	(14.3)	20	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
28-3	2住	土師器 甕	16.0	-	(11.7)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
28-4	2住	土師器 环	11.6	-	5.1	30	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ丸底を有する。	内面黒色処理
28-5	2住	土師器 环	12.0	-	4.5	30	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ丸底を有する。	内面黒色処理
31-1	3住	土師器 長胴甕	19.8	7.8	36.2	50	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。口縁部が畠曲して外反する。底部木葉痕?	
31-2	3住	土師器 長胴甕	21.0	-	(21.0)	50	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、ヘラケズリ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。口縁部が緩やかに外反する。	
31-3	3住	土師器 長胴甕	-	4.5	(22.0)	30	外面一胴部ヘラナデ、ヘラケズリ 内面一胴部ヘラナデ、底部木葉痕。	
31-4	3住	土師器 鉢	15.9	8.5	8.6	50	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、底部木葉痕。	内面黒色処理
31-5	3住	須恵器 蓋	(12.0)	-	(2.0)	20	外面一口クロナデ、天井部回転 ヘラケズリ 内面一口クロナデ	
31-6	3住	須恵器 坏	14.6	11.4	3.7	50	外面一口クロナデ 内面一口クロナデ、高台付き。 底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ。	
31-7	3住	須恵器 坏	12.4	9.6	3.9	25	外面一口クロナデ 内面一口クロナデ、高台付き。 底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ。	
31-8	3住	須恵器 坏	-	11.4	(1.7)	20	外面一口クロナデ 内面一口クロナデ、高台付き。 底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ。	
31-9	3住	須恵器 坏	-	11.4	(2.0)	25	外面一口クロナデ 内面一口クロナデ、高台付き。 底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ。	
31-10	3住	灰陶器 碗	-	8.4	(2.4)	20	外面一口クロナデ 内面一口クロナデ、高台付き。 底部回転ヘラケズリ、高台貼り付け後ナデ。	
33-1	4住	土師器 長胴甕	21.0	-	(10.0)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。縁部は短く外反し、緩やかに胴部がふくらむ。	

Na	出土 地点	器種 器形	法量(cm) 口径 底径 器高	残 存 率 度%	調査・形態の特徴	備 考
33-2	4住	土師器 長胴甕	20.4 - (6.3)	20	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラナデ、口縁部は短く外反し、 胸部はふくらまない。	
33-3	4住	土師器 長胴甕	20.0 - (8.5)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラナデ、口縁部は短く外反し、 胸部はつぼまる。	
33-4	4住	土師器 甕	14.2 - (7.1)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラナデ、口縁部は短く外反し、 胸部は緩やかにふくらむ。	
33-5	4住	土師器 甕	- 10.0 (20.0)	30	外面一胸部ヘラナデ、ユビナデ 内面一胸部ユビナデ底部木葉痕	
33-6	4住	土師器 甕	- 10.0 (12.0)	25	外面一胸部ヘラナデ 内面一胸部ヘラナデ、底部木葉痕	
33-7	4住	土師器 平底甕	11.8 6.0 4.2	50	外面一ナデ、底部手持ちヘラキリ 内面一ヘラナデ	
33-8	4住	須恵器 环	14.2 5.4 4.4	30	外面一口クロナデ、底部ヘラケズリ 内面一口クロナデ	焼成不良のため土 師質。
33-9	4住	須恵器 蓋	(つまみ輪) 2.8 2.4 12.4	25	外面一口クロナデ、上位回転ヘ ラケズリ 内面一口クロナデ	外面自然縫付着。
33-10	4住	須恵器 蓋	- (2.5) 10.8	20	外面一口クロナデ、上位回転ヘ ラケズリ 内面一口クロナデ	
33-11	4住	須恵器 蓋	- (2.6) 14.4	25	外面一口クロナデ、上位回転ヘ ラケズリ 内面一口クロナデ	
33-12	4住	須恵器 こね鉢	19.4 13.8 11.0	75	外面一口クロナデ、底部ヘラケ ズリ後、棒状工具による穿孔 内面一ナデ	焼成良好
36-1	5住	土師器 長胴甕	19.6 - (39.5)	50	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘ ラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ナ デ 口縁部は短く外反し、胸部 はややふくらみをみせる。	カマド
36-2	5住	土師器 長胴甕	23.2 - (13.8)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胸部 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘ ラナデ、口縁部は短く外反し、 胸部はほぼまづく下がる。	カマド
36-3	5住	土師器 長胴甕	23.4 - (20.0)	30	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘ ラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘ ラナデ、口縁部は短く外反し、 胸部はややふくらみをみせる。	
36-4	5住	土師器 長胴甕	24.4 - (16.7)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラ ナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラ ナデ、口縁部は短く外反し、 胸部はふくらます底部へとつぼまる。	
36-5	5住	土師器 甕	24.8 - (11.6)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘ ラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラ ナデ、口縁部は短く外反し、 胸部上位が球状にふくらむ。	カマド
36-6	5住	土師器 甕	24.6 - (15.7)	25	外面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラ ナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胸部ヘラ ナデ 後ヘラミガキ、口縁部は短く外反 し、胸部上位が球状にふくらむ。	

No.	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			残存 (%)	調整・形態の特徴	備考	
			口径	底径	器高				
36-7	5住	土師器 長胴甕	-	8.2 (22.0)	25	外面一胴部ヘラナデ 内面一胴部ナデ。底部木葉痕。 底部からは直線的に立ち上がる。			
37-8	5住	土師器 甕(蓋)	15.4	- (5.9)	15	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ メ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ メ。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球状。	赤褐色。4号住で 同一破片出土。		
37-9	5住	土師器 甕	-	7.6	11.2	30	外面一胴部ヘラナデ 内面一胴部ヘラナデ。底部木葉痕。 底部から外反して立ち上がる。	器厚が薄い。 特殊遺構(37-11、 12を収納)	
37-10	5住	土師器 小形甕	12.9	8.7	13.9	65	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘ ラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ハケ メ。口縁部は短く外反し、胴部は球状。	二次焼成を受けて いる。特殊遺構(37- 13を収納)	
37-11	5住	土師器 小形鉢	11.8	7.6	6.9	65	外面一ナデ 内面一ナデ後へラミガキ。底部 木葉痕。溝状に立ち上がる。	二次焼成を受けて いる。特殊遺構(37- 12を収納)	
37-12	5住	土師器 高环(脚)	-	10.6 (6.4)	30	外面一口部ヘラミガキ、胴部ヘラミ ガキ 内面一口部ヘラミガキ、胴部ホリ 状部は短く、底は「く」の字状に広がる。	炭化物付着 特殊遺構		
37-13	5住	須恵器 环	13.0	8.1	3.6	75	外面一口クロナデ、底部回転ヘ ラケズリ後手持ちヘラキリ 内面一口クロナデ	焼成良好。特殊遺 構	
39-1	6住	土師器 甕	-	6.0 (1.6)	10	外面一ハケ 底部木葉痕 (?) 内面一ナデ	黒褐色で白色の粒 子を含む		
39-2	6住	須恵器 蓋	-	16.0 (1.8)	25	外面一口クロナデ、回転ヘラケ ズリ 内面一口クロナデ			
41-1	7住	土師器 环	10.0	6.4	3.8	65	外面一ナデ、底部木葉痕 内面一ヘラミガキ	内面黒色処理	
41-2	7住	須恵器 环	13.0	7.6	3.9	30	外面一口クロナデ、底部手持ち ヘラキリ 内面一口クロナデ	焼成良好	
43-1	8住	土師器 長胴甕	27.2	-	10.0	25	外面一口縁部ヨコナデ後へラミ ガキ、胴部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、底部木葉痕。 口縁部は「く」の字状に短く外反する。		
43-2	8住	土師器 甕	16.6	-	11.5	25	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘ ラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、底部ヘラ ナデ。口縁部は「く」の字状に短く 外反し、胴部は球状にふくらむ。		
43-3	8住	土師器 甕	23.2	-	11.9	25	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘ ラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、底部ヘラ ナデ。口縁部は短く外反し、 胴部が球状にふくらむ。	内面炭化物が付着	
43-4	8住	土師器 小形甕	14.2	-	13.9	25	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ		
43-5	8住	須恵器 大甕	-	- (43.4)	20	外面一タタキ 内面一タタキ後ナデ	胎土はよく精選さ れているが、やや 焼成不良。		
43-6	8住	須恵器 环	12.0	6.6	4.0	80	外面一口クロナデ、底部回転ヘ ラケズリ後ハケ 内面一口クロナデ	焼成良好	

No.	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			残 存 (%)	調整・形態の特徴	備考
			1径	底径	器高			
43-7	8住	須恵器 环	12.4	6.6	5.2	50	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ 内面一ロクロナデ	焼成不良のため乳橙色。
45-1	9住	土師器 甕	25.8	-	(9.3)	25	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ 内面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ。口縫部は短く外反し、胸部は球状にふくらむ。	
45-2	9住	土師器 甕	-	7.7	(19.0)	65	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ナデ、口油滴ヘラケズリ 内面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ナデ。口縫部は短く外反し、胸部は球状にふくらむ。中位が焼成不良。	二次焼成を受けているために外面はもう少し赤褐色を帯びる。
45-3	9住	土師器 甕	14.6	-	(10.0)	30	外面一ロ縫部ハケ後ヨコナデ、胸部ナデ 内面一ロ縫部ハケ後ヨコナデ、胸部ナデ。口縫部は短く外反し、胸部は球状にふくらむ。	
45-4	9住	土師器 甕	11.8	-	(10.0)	20	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ 内面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ。口縫部は短く外反し、胸部は球状にふくらむ。	カマド
45-5	9住	土師器 环	12.5	5.2	4.8	50	外面一ヘラナデ 内面一ヘラナデ。手づくねと思われる。	
45-6	9住	須恵器 高环	15.4	10.2	11.7	65	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ。ロクロ成形	胎土はよく精選されているが、焼成不良で乳橙色。
45-7	9住	須恵器 横巻	-	-	(19.8)	25	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ	
47-1	10住	土師器 長胴甕	25.0	-	(11.8)	20	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラナ 内面一ロ縫部ヨコナデ後ヘラミガキ。胸部ヘラケズリ。口縫部は短く外反し、胸部は球状にふくらむ。	カマド
47-2	10住	土師器 甕	14.7	8.8	(16.0)	66	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラナデ 内面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ。口縫部は短く外反し、胸部は球状。	
47-3	10住	土師器 小形甕	10.8	-	(4.8)	20	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラナ 内面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ナデ。口縫部は短く外反し、胸部は球状。	二次焼成を受ける。
47-4	10住	土師器 瓶	-	11.8	(7.0)	20	外面一ヘラナデ、底部ヘラケズリ 内面一ヘラミガキ。胸部は球状にふくらむ。	
47-5	10住	土師器 鉢	17.2	10.0	7.2	100	外面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ。底部木葉痕 内面一ロ縫部ヨコナデ、胸部ヘラミガキ。口縫部は短く外反し、底径が広く安定性がある。	内面黒色処理
47-6	10住	土師器 环	13.0	5.2	5.8	30	外面一ヘラミガキ後ヘラケズリ 内面一ヘラミガキ。球状を呈する。	内面黒色処理
47-7	10住	土師器 环	12.6	6.0	5.4	30	外面一ヨコナデ後ヘラケズリ、 底部木葉痕 内面一ヨコナデ後ヘラミガキ。球状を呈する。	内面黒色処理
47-8	10住	須恵器 蓋	3.4	13.0	3.9	30	外面一ロクロナデ後回転ヘラケズリ 内面一ロクロナデ	外面自然釉付着
47-9	10住	須恵器 蓋	-	17.2	(2.9)	30	外面一ロクロナデ後回転ヘラケズリ 内面一ロクロナデ	カマド

No.	出土 地点	器種 器形	法量(cm)			残 存 (%) 度	調整・形態の特徴	備考
			口径	底径	器高			
49-1	11住	土師器 長胴甕	22.4	-	(10.6)	30	外面一ロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、口辺部は短く外反し、胴部はふくらまない。	
49-2	11住	土師器 小形甕	13.8	9.0	13.1	65	外面一ロ繩部ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、ヘラケヌリ、ロ繩部は逆に外反し、胴部は球状にふくらむ。	二次焼成を受け橙色を帯び、器面がはげ落ちている。
49-3	11住	土師器 甕	16.6	-	(6.0)	25	外面一ロ繩部ヨコナデ、内面ニロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、口辺部は「く」の字状に外反し、ロ辺部が更に短く外反する。	
49-4	11住	土師器 高环	12.6	-	(4.0)	50	外面一ロ繩部ヨコナデ、环体部ヘラミガキ、内面ニヘラミガキ。环部の口辺部が短く外反する。	
51-1	12住	土師器 甕	23.6	-	(16.5)	50	外面一ロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヘラミガキ、胴部ヘラミガキ。ロ繩部は球状にふくらむ。	カマド内面炭化物付着
51-2	12住	土師器 高环	-	14.4	(8.4)	50	外面一ロ繩部ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヘラミガキ、ヘラケヌリ、ロ辺部は短く外反し、胴部の球状にふくらむ。	カマド
51-3	12住	須恵器 环	受け部 9.6	11.6	3.6	100	外面一ロクロナデ、底部回転ヘラキリ後ナデ、内面一ロクロナデ。蓋受けを有する。	カマド
53-1	13住	土師器 長胴甕	23.4	-	(27.0)	66	外面一ロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ(一ロヘラミガキ)、内面一ロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、口辺部は球状に外反し、胴部はやや肩が振る。	カマド
53-2	13住	土師器 甕	17.9	8.6	23.5	100	外面一ロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヨコナデ後ヘラミガキ、胴部ヘラミガキ、ヘラケヌリ、ロ繩部は短く外反し、胴部は球状にふくらむ。	カマド前
53-3	13住	土師器 甕	16.2	9.0	19.6	75	外面一ロ繩部ヨコナデ、内面ニロ繩部ヨコナデ、底部木葉痕、内面ニロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、ロ繩部は短く外反し、胴部はやや肩が振る。	
53-4	13住	土師器 甕	-	7.8	(15.0)	50	外面一ヘラナデ、底部木葉痕、内面一ヘラナデ。胴部は緩やかに立ち上がる。	カマド 二次焼成を受けている。外面炭化物付着
53-5	13住	土師器 甕	-	9.5	(11.0)	30	外面一ナデ後ヘラミガキ、底部木葉痕、内面一ヘラナデ。胴部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。	カマド脇 外面スス付近
53-6	13住	土師器 甕	-	6.4	(12.0)	50	外面一ハケ、底部ナデ、内面一ナデ。器厚が薄く、胴部は緩やかにふくらみながら立ち上がる。	灰褐色で、胎土に白色、粒子を含む、カマド脇
53-7	13住	須恵器 蓋	-	15.4	(1.8)	50	外面一ロクロナデ、回転ヘラケヌリ、内面一ロクロナデ	
56-1	14住	土師器 長胴甕	28.7	-	(22.0)	30	外面一ロ繩部ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ニロ繩部ヨコナデ後ヘラミガキ、ロ辺部が短く外反し、胴部は球状にふくらむ。	
56-2	14住	土師器 环	12.2	-	4.6	100	外面一ヘラミガキ、内面一ヘラミガキ。湾状を呈する。	内面黒色処理
56-3	15住	須恵器 横龜	10.6	-	24.7	100	外面一ロ繩部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、内面一ロ繩部ヨコナデ後ヘラミガキ、ロ辺部は短く外反し、胴部はラクビーボール状である。	自然釉付着 他の須恵器片が付着。

図 版

1区近景



1区全景（1）



1区全景（2）





2区近景



2区全景（北部）



2区全景（南部）



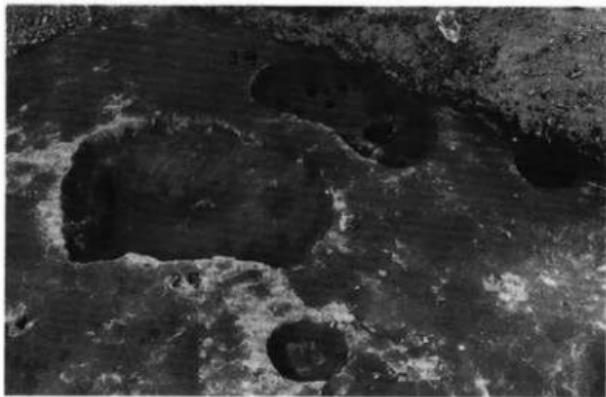
1号住居址



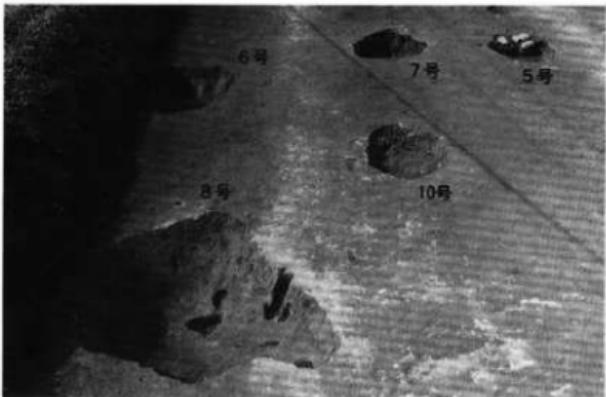
同埋甕出土状况



土壌 1

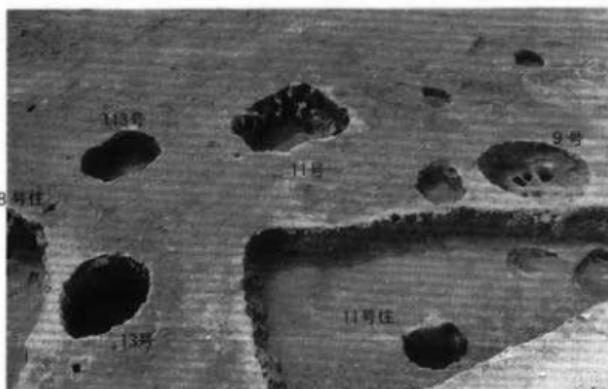


土壌 2

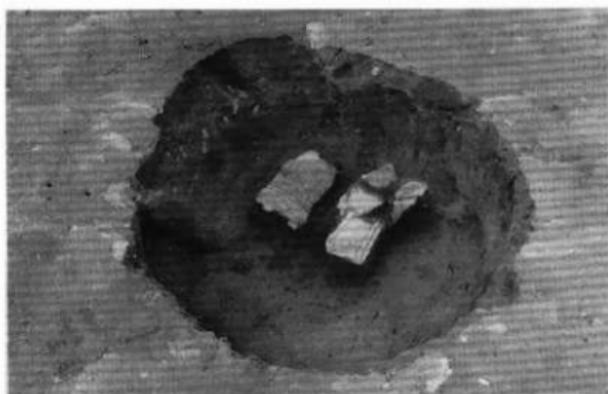


土壌 3

土坡 4



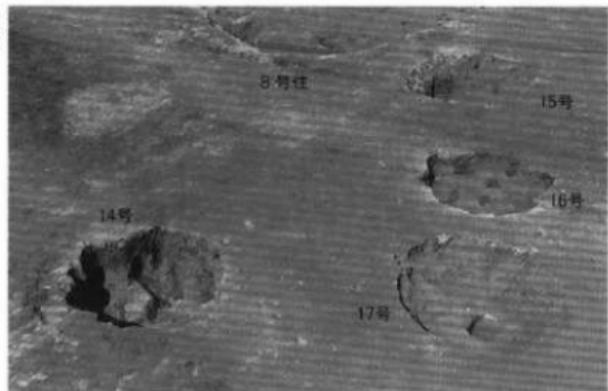
土坡 5
(7号土坡)



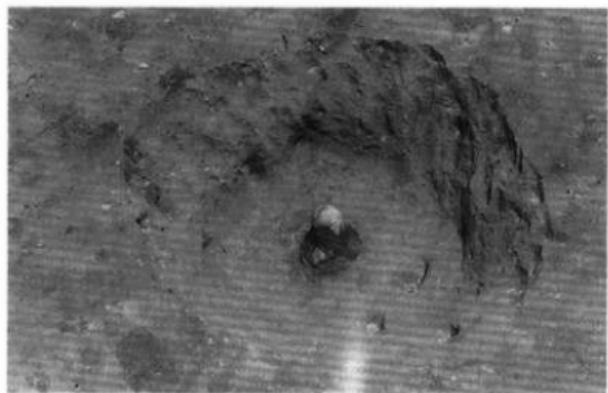
土坡 6
(7号土坡遺物出土狀況)



图版 6



土坯 7



土坯 8
(15号土坯)



土坯 9
(15号土坯 遗物出土状况)

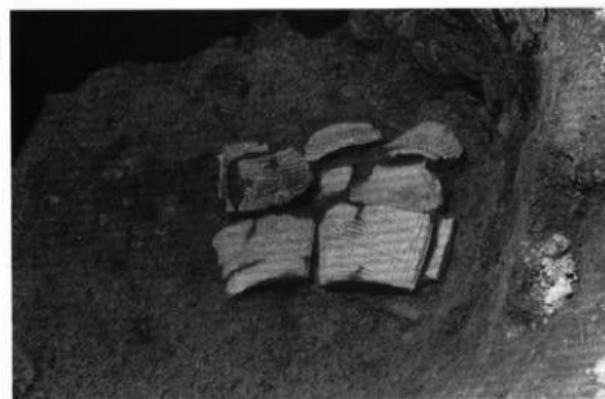
土坡10



土坡11
(28号土坡)

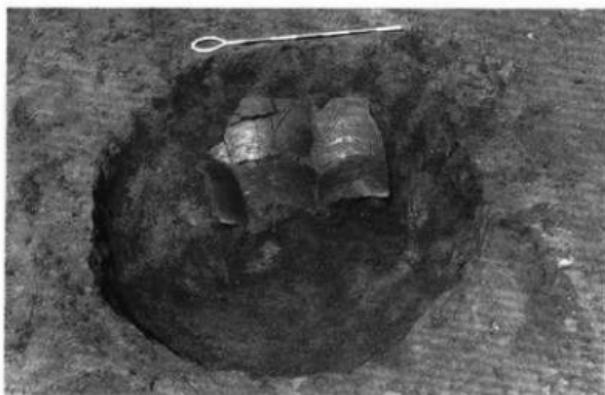


土坡12
(28号土坡遺物出土狀況)

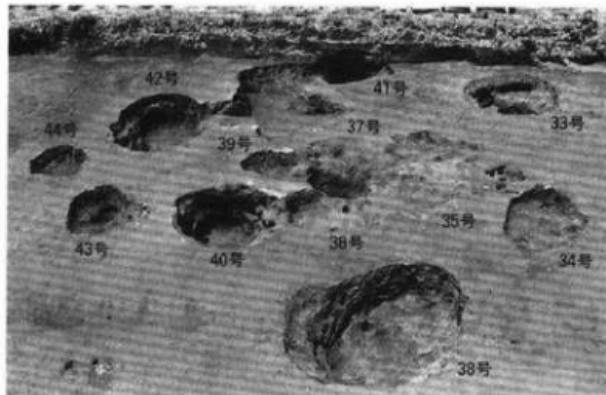




土塙13



土塙14
(30号土塙)

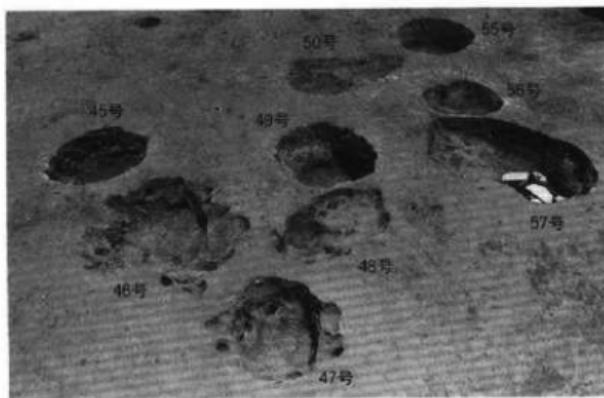


土塙15

土坡16
(42号土坡遗物出土状况)



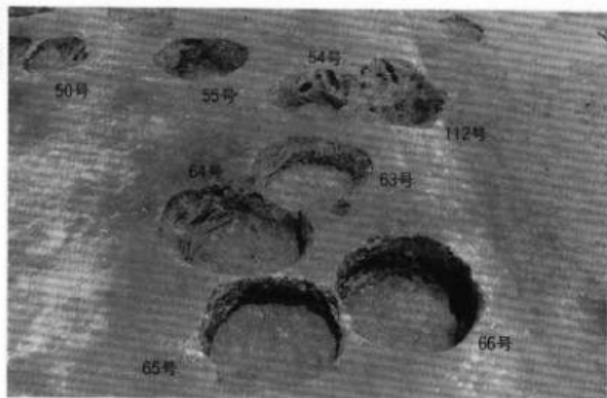
土坡17



土坡18
(57号土坡)



圖版
10



土坡19

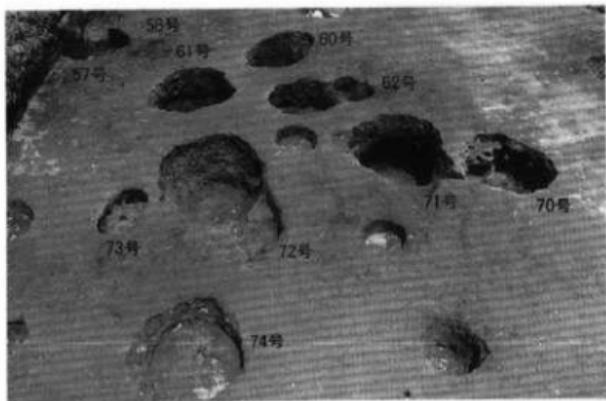
土坡20
(66号土坡)



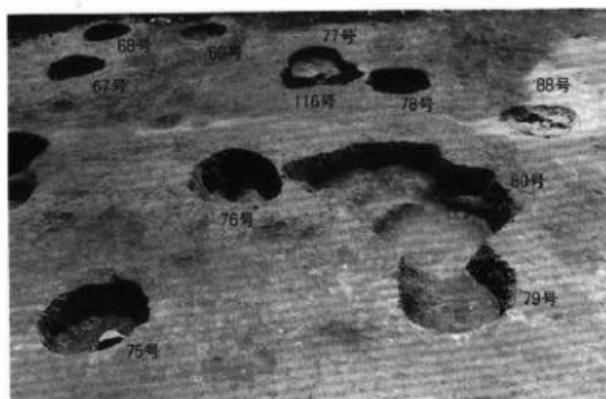
土坡21
(66号土坡遺物出土狀況)



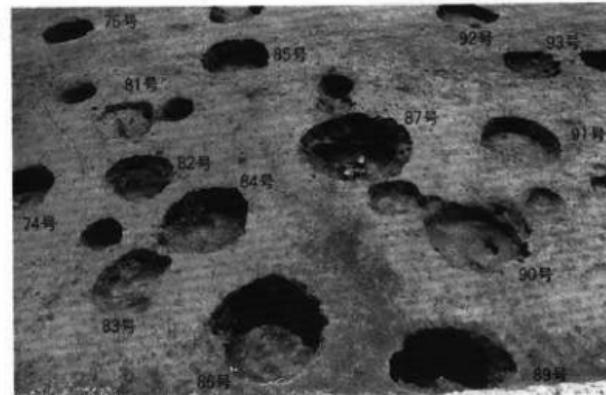
土坡22



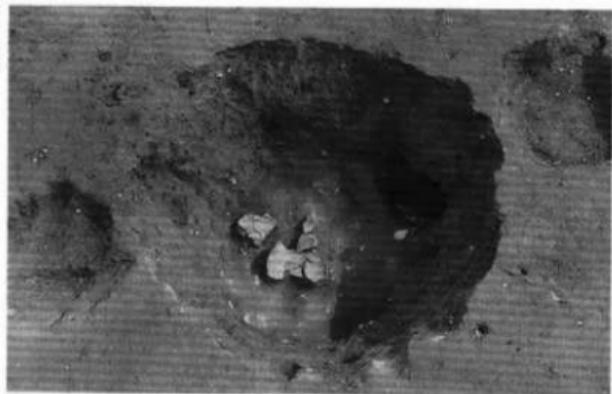
土坡23



土坡24

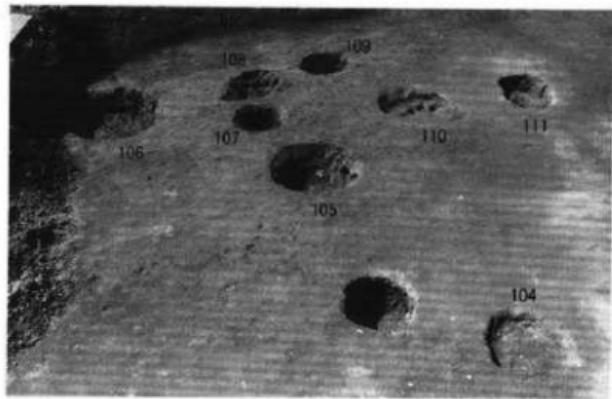


圖版
12



土坡25
(87号土坡)

土坡26



1·2号集石



1号集石

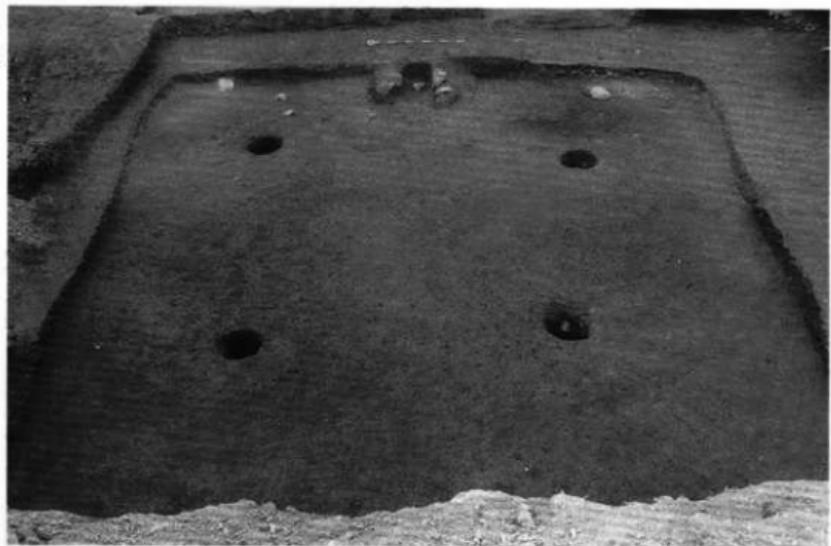


2号集石



4号住床下縄文土器
・石器出土状況





2号住居址



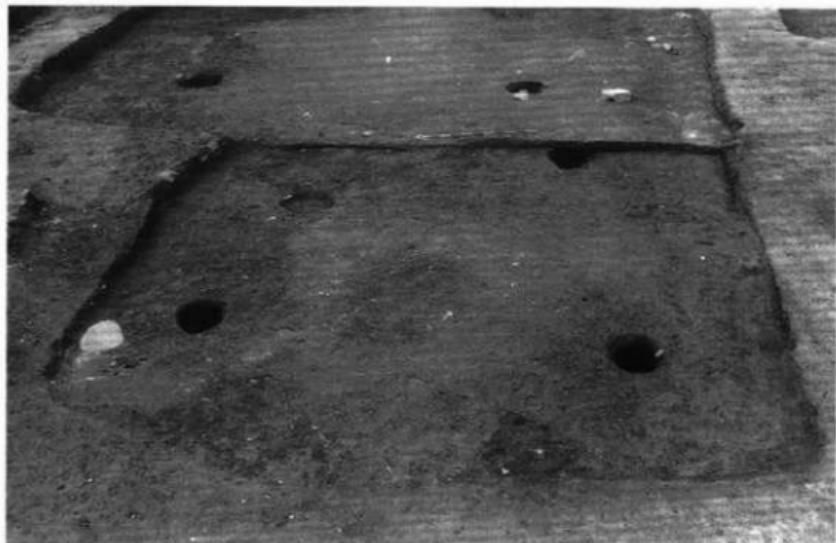
同カマド出土状況



3号住居址



同カマド出土状況



4号住居址



同遺物出土狀況



5号住居址



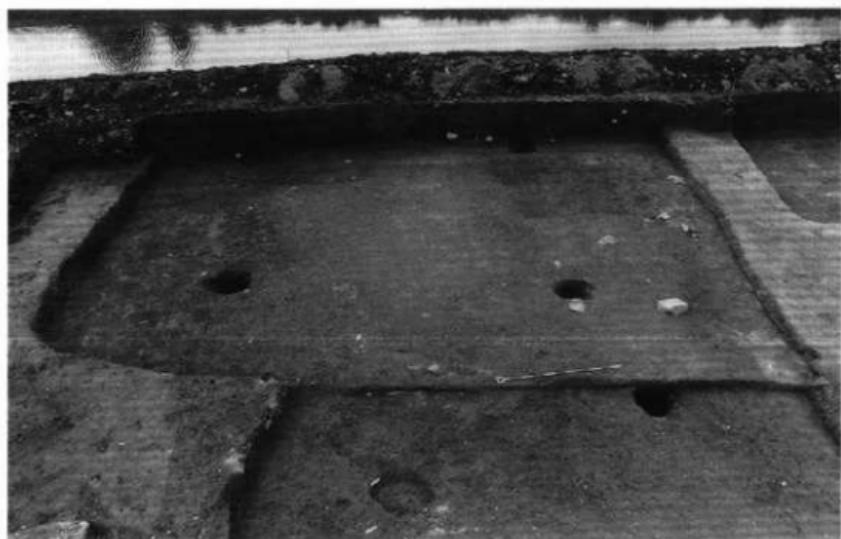
同カマド出土状況



5号住居址遺物出土状況



6号住居址



7號住居址



4·7號住居址重複狀況



8號住居址



同遺物出土狀況